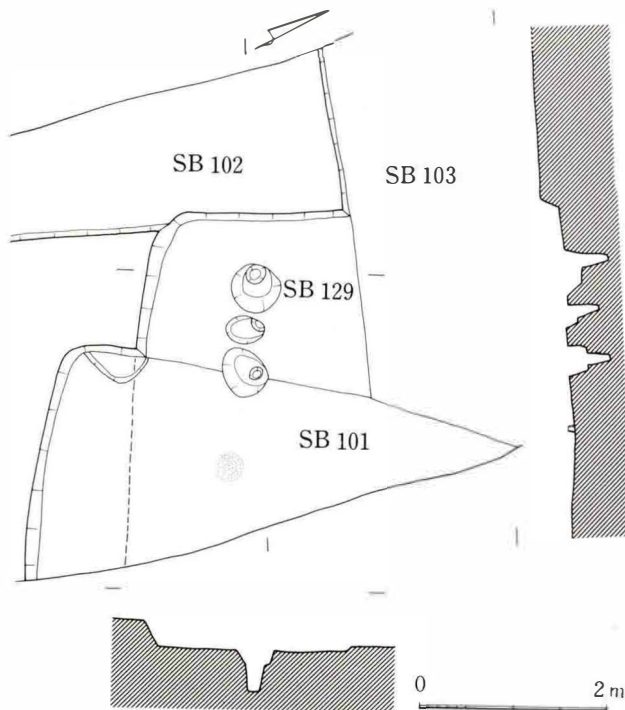


III-281 122号住居址出土土器

出土量は多くない。1は坏部中位が屈曲し、更に口縁部が外反する高坏形土器である。2は口縁部の中位に段を形成し体部が張る甕形土器で、3には台が付く。4は小形の高坏形土器であるが脚部は短い。7は広口壺の、6は壺の、5は甕の底部であろう。

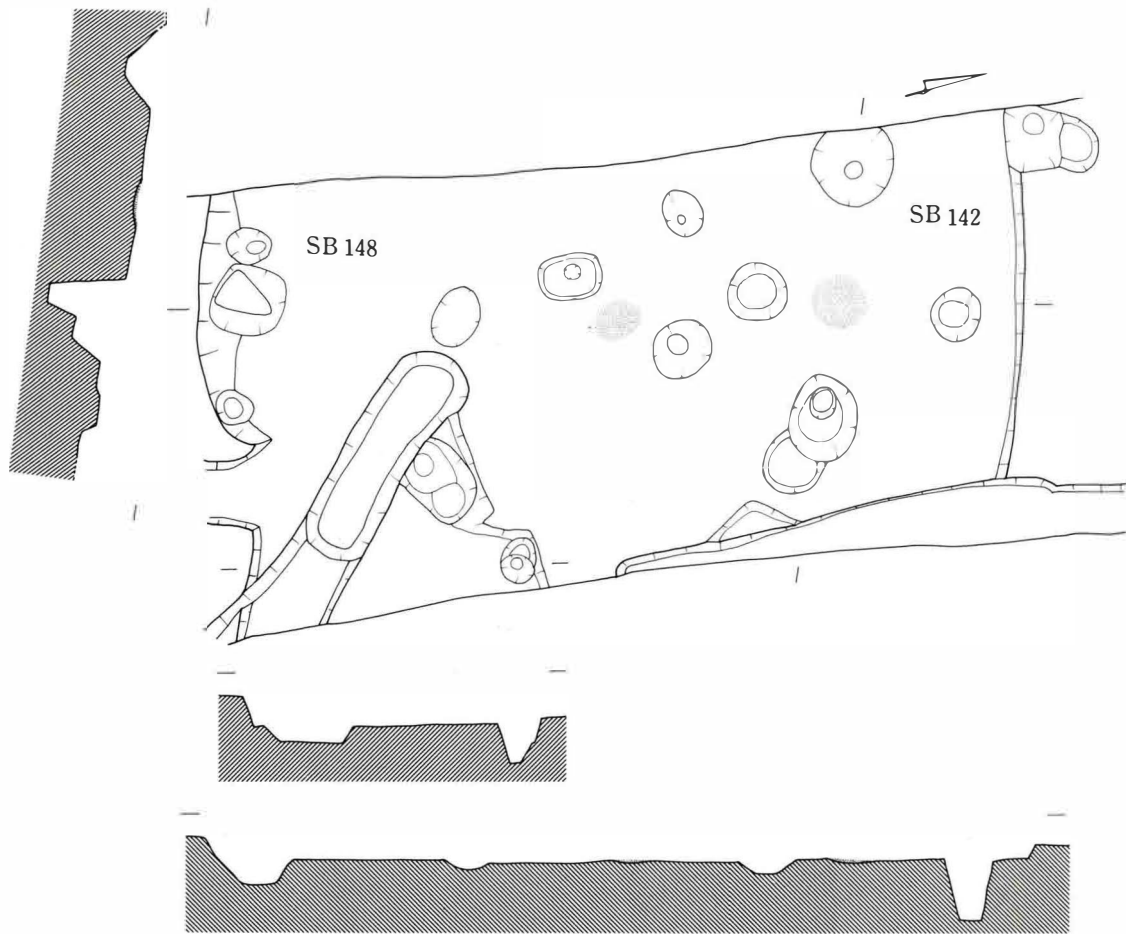


III-282 129号住居址実測図

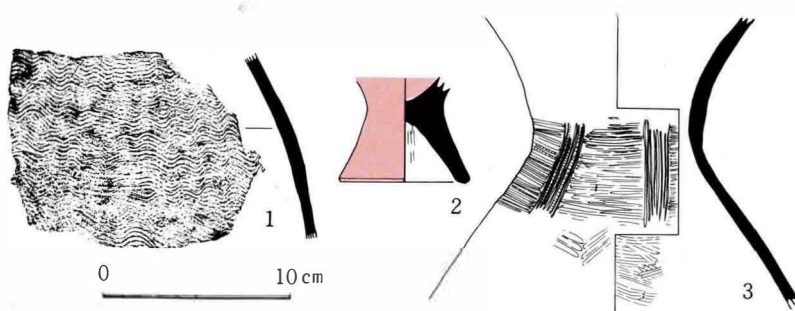
101号住居址の西側から検出されたもので、102号住居址を切って構築され、103号住居址に切られる。形態は隅丸方形を呈するかと思われるが、規模・主軸方向等詳細は不明である。支柱穴と思われるものは2個検出されており、ともに径50 cm前後、深さ45 cm前後である。柱穴の配列状態は、6個の長方形配列であろう。炉等の施設は不明である。住居址の掘り込みは、西壁で14 cm・南壁32 cmである。床面は平坦で軟弱であり、101号住居址と同レベルかわずかに低くなる程度である。



III-283 142号・148号住居址



III-284 142号・148号住居址実測図



III-285 142号・148号住居址出土土器

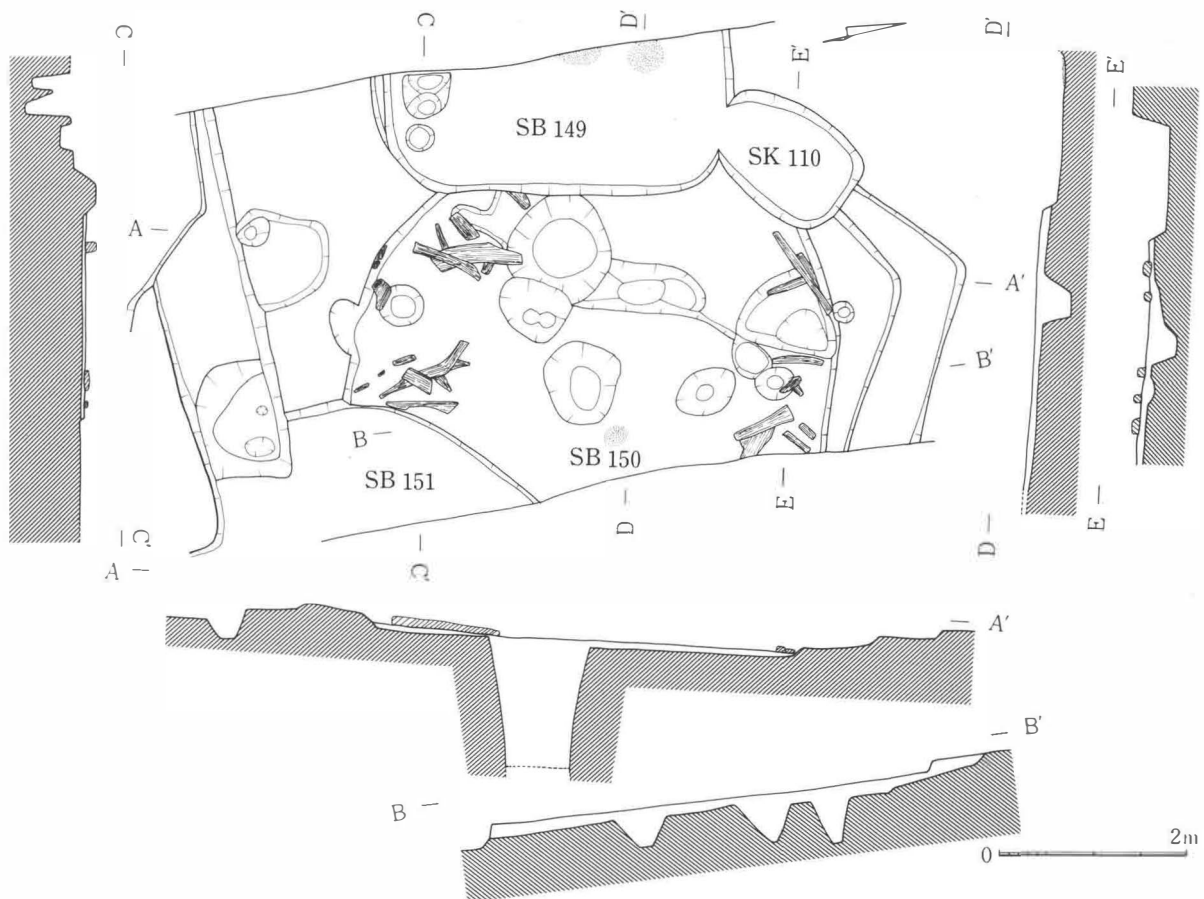
142号住居址 出土量は少なく、壺・甕(1)・高坏片が出土している。

148号住居址 (3)・甕・高坏形土器(2)片がある。

両住居址とも重複関係にあり、142号は北壁を、148号は南壁を残すだけで、また床面も同一レベルにあるため形態等を割り出すことができなかった。

142号住居址 形態は方形になるものと思われる。柱穴は北壁に沿った2個のものが主柱になると思われ、その中間に径55cm程の地床炉がある。主柱穴の規模は、主軸西側のもので、径65cm・深さ71cm、東側の柱穴は径45cm・深さ56cmである。北壁の掘り込みは15cmを測る。

148号住居址 南壁と西壁部の関係から隅丸方形を想定し、その主軸方向はN14°Eになる。南壁・西壁下に小ピットがあり支柱穴であろう。主柱穴は不明であるが、142号住居址炉の南側に径40cm程の焼土があり、この住居址に位置づくものと思え、その周辺のものをもってあてることができる。床面は平坦で軟弱である。



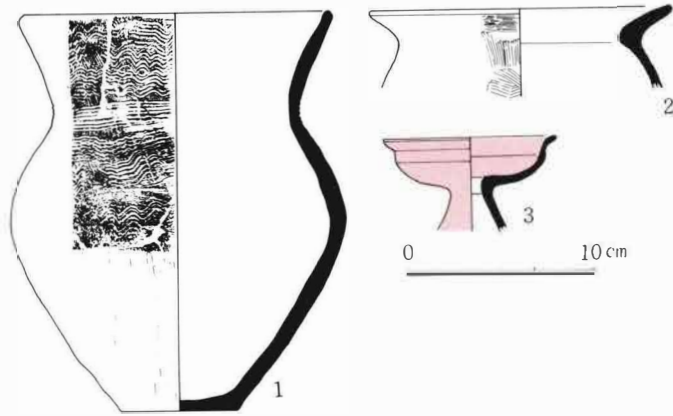
III-286 149号・150号住居址実測図



III-287 149号・150号住居址

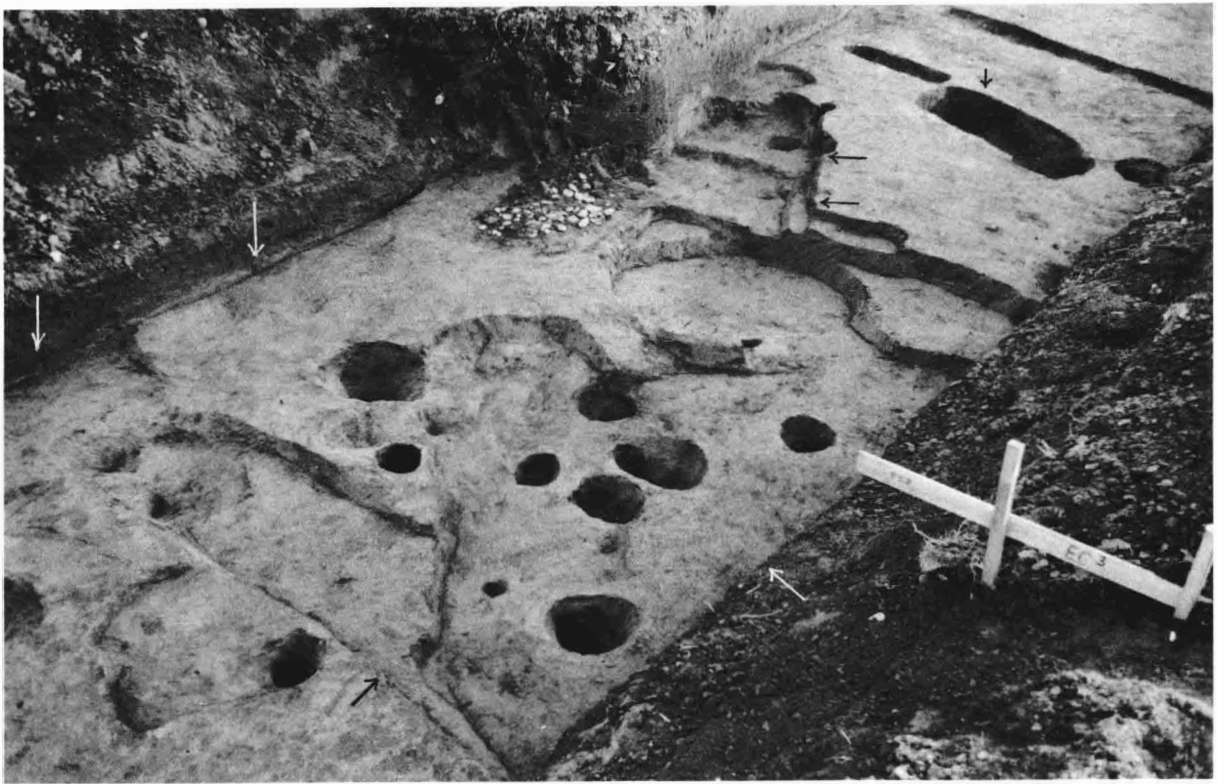
149号住居址 150号住居址より古く、また土壇 110により切られる。住居址の西側半分は未調査区へ延びるため全容は不明である。形態は隅丸方形を呈し、南北軸はN 11°Eになるものと思われる。南北3.8mを測り、東西は不明であるが、炉の位置から南北より大きな数値にならないと思える。炉は中央より北側の道路幅(調査区)ぎりぎりの所から検出され、径35cm程の地床炉になる。掘り込みは、北壁40cm・南壁21cm・東壁16cmである。床面は平坦で軟弱である。柱穴は支柱穴であろうものが南壁下にあるものの、主柱穴は確認できなかった。



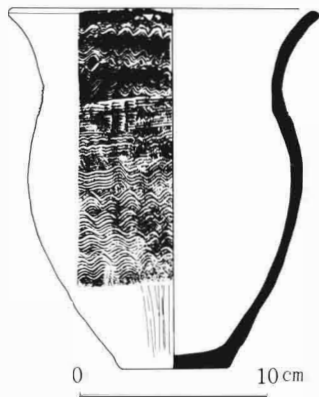


III-288 149号住居址出土土器

出土量は少なく、壺・甕(1・2)・高坏・甑・器台形土器片(3)が出土している。1は体部中位に最大径があり、口縁部は頸部より直線的に外開する。2の口縁部は、くの字状に強く屈曲し、外面にハケナデ整形が認められるだけで、文様はない。(3)は器台形の土器で、器体受部は中位がゆるやかな屈曲をなし、口縁部が外反する形態を呈する。底部に円孔がうがたれる。外面及び器体受部の内面は、ヘラミガキされたのち赤色塗彩される。



III-289 157号住居址

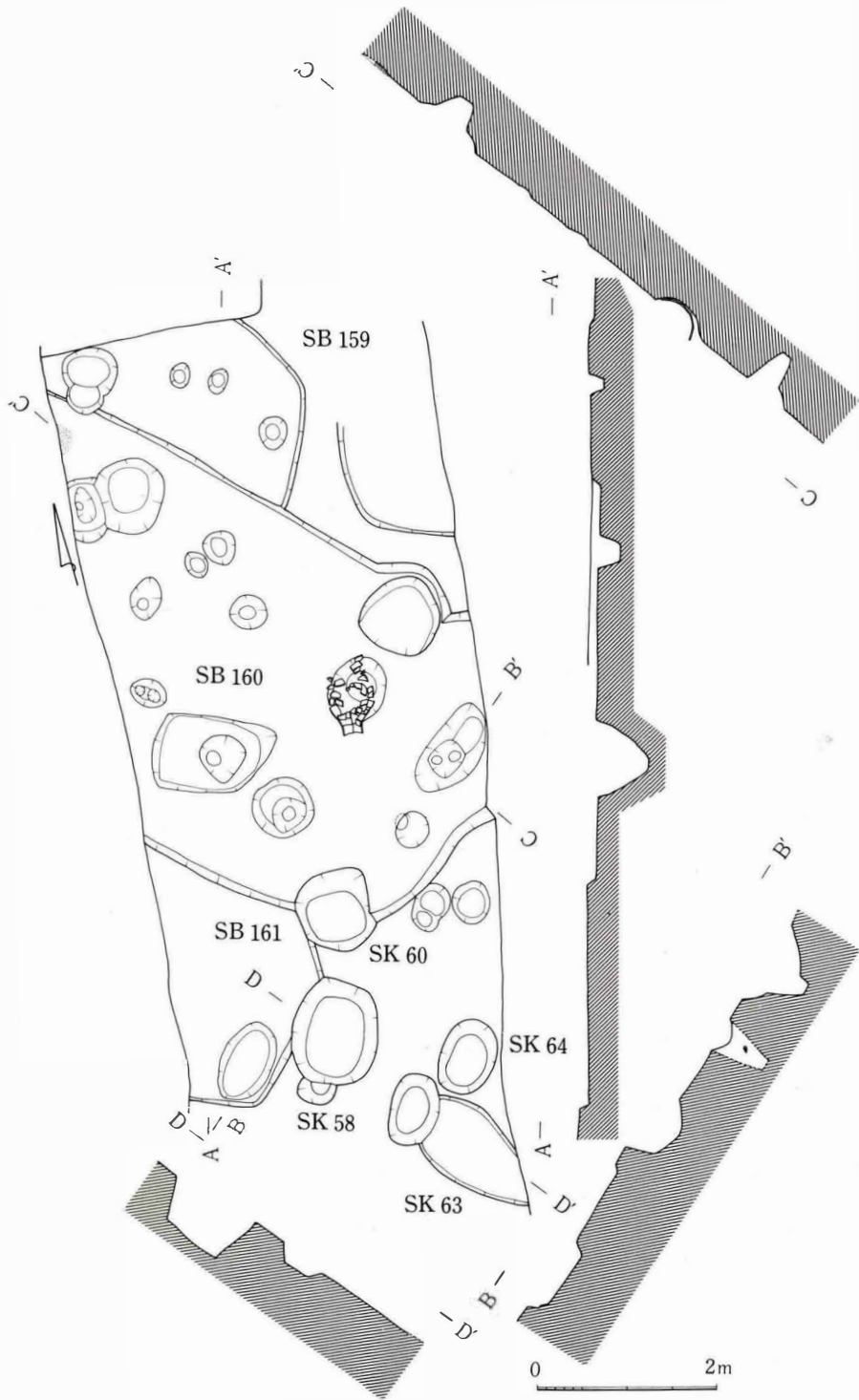


III-290 157号住居址出土土器

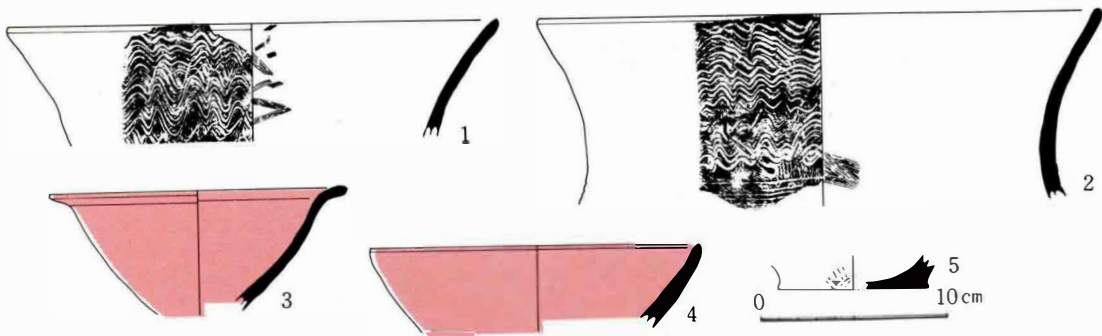
この住居址周辺の遺構は、複雑に重複しあっており、また床面の凹凸も著しいため、形態把握は困難であった。一応この住居址の形態を南壁より推定すると、隅丸方形を呈するものと予想され、南北軸4.6 m前後になる。支柱穴・炉址等の諸施設は不明である。

出土遺物は弥生時代中期の土器片が多かったが、これに混入するように該期の壺・甕・高坏片が出土した。左図に示した甕形土器は東壁付近に完形で埋納されていた。口縁部に最大径があり、端部は面取りされる。文様は頸部に楡描簾状文を施したのち、口縁部は下から上へ、体部は上から下へ波状文がめぐる。体部下半は縦ヘラミガキ整形される。

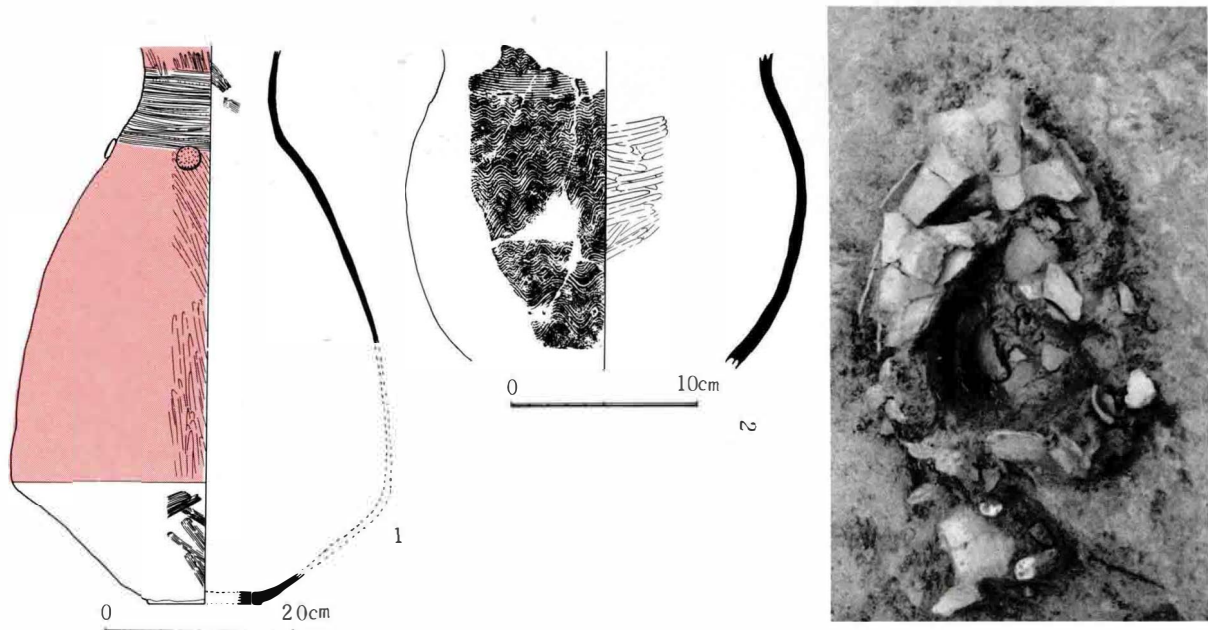




III-291 159号·160号·161号住居址实测图



III-292 160号住居址出土土器(1)

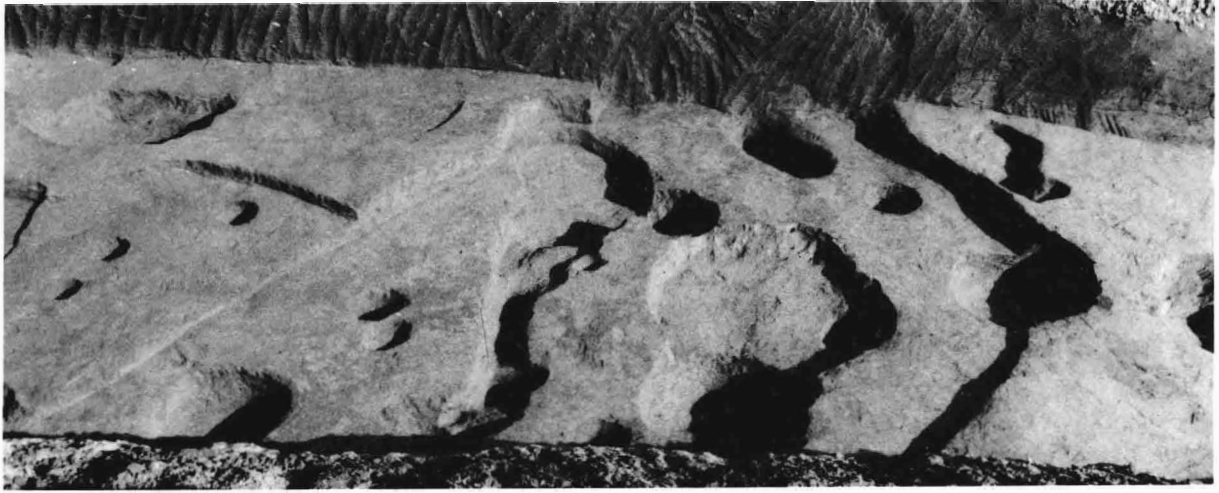


III-293 160号住居址出土土器(2), 出土状態

壺・甕・鉢・高坏形土器が出土している。III-293-1は壺の頸部以下が残存するが、かなり細長い頸で、体部のくびれ部の位置も低い。頸部に櫛描横線文をめぐらし円形貼付文をつける。2の体部は球形を呈する甕形土器で、簾状文施文後上から下へ波状文を施す。これらは住居址南西隅より集中した状態で出土した。III-292-1・2は甕口縁部であるがともに頸部より緩やかに長く外反して立ち上がる。櫛描波状文はともに下から上へ施文している。3・4は高坏形土器の坏部である。5は甕形土器の底部であろう。このほか覆土中より、石核(III-165-37)、横刃石器(III-168-19)、打製石斧(III-179-5・6)が出土している。



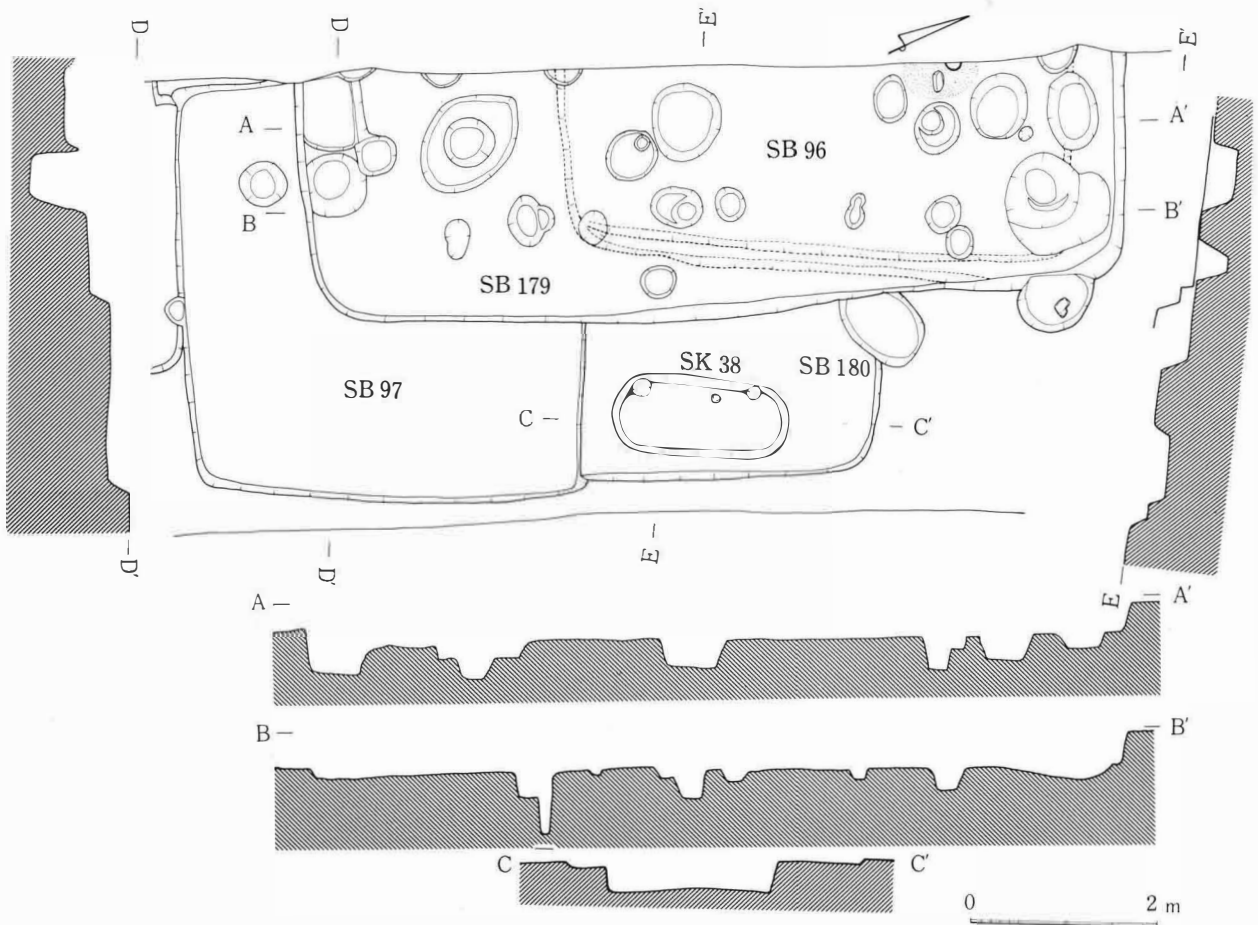
III-294 158号・159号・160号住居址



III-295 159号・160号住居址

159号住居址 (III-291) 160号・158号住居址により切られる。東壁と南壁の隅付近を検出したにすぎない。形態は隅丸方形を呈し、南壁7cm・東壁9cmの掘り込みである。図示する遺物はない。

160号住居址 (III-291) 東壁に平安時代の住居址がある模様。形態は隅丸長方形を呈し、長軸規模は不明であるが、東西軸4.0m前後になる。主柱穴は6個方形配列であろう。東壁19cm・西壁7cmの掘り込みである。

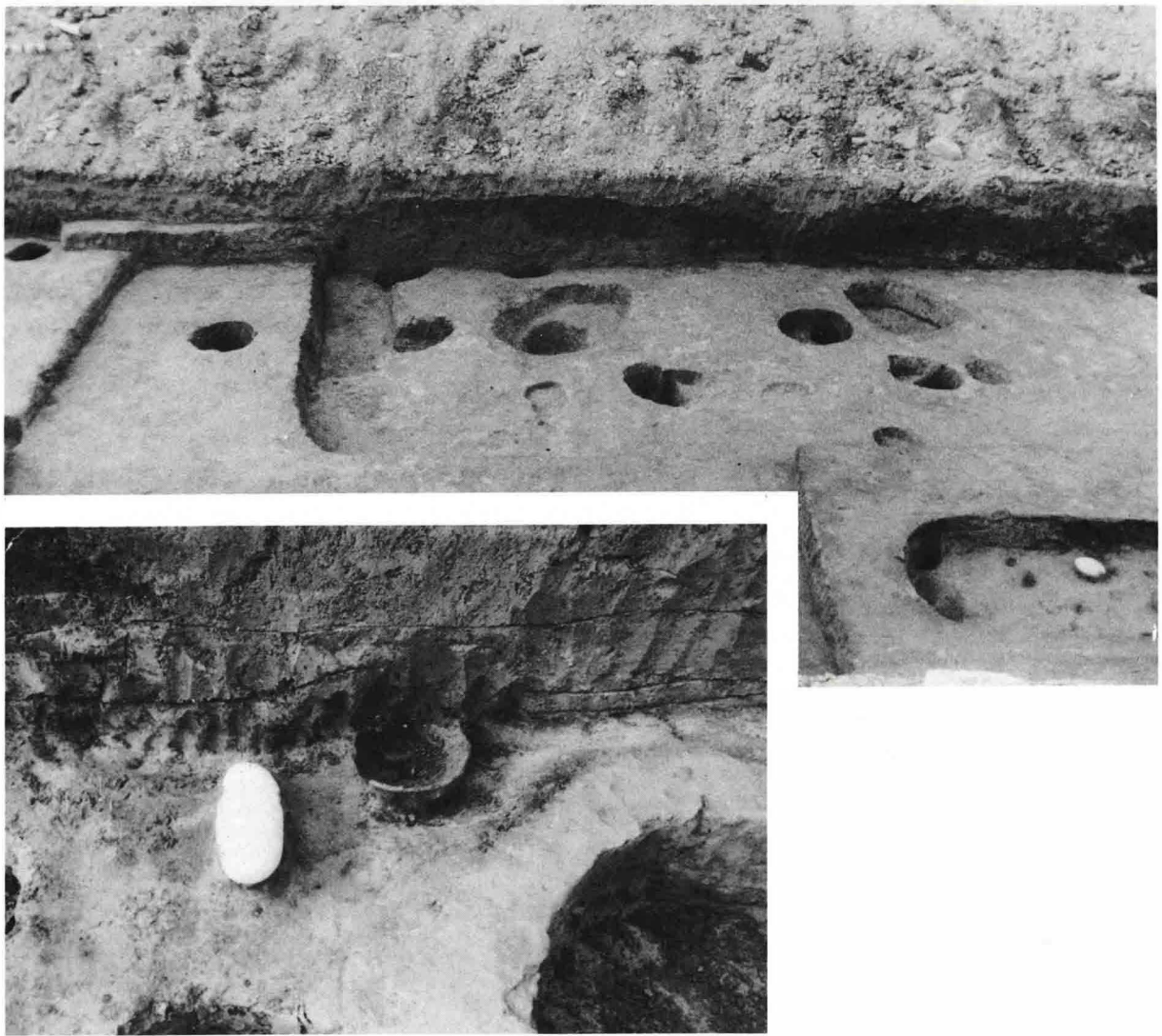


III-296 179号・180号住居址実測図

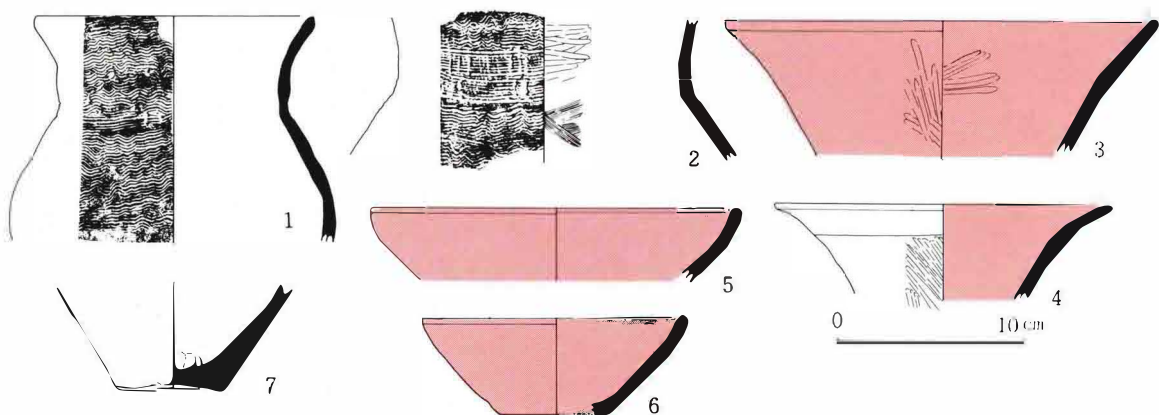
179号住居址 形態は隅丸長方形を呈し、主軸方向はN 18°Eになる。南北軸は8.65mを測る。掘り込みは北壁35cm・南壁19cmになる。主柱穴は6個長方形配列になる。炉址は北壁よりある枕石を有する埋甕炉である。

180号住居址 形態は隅丸方形を呈するものの北壁、東壁付近だけの検出で、詳細は不明である。



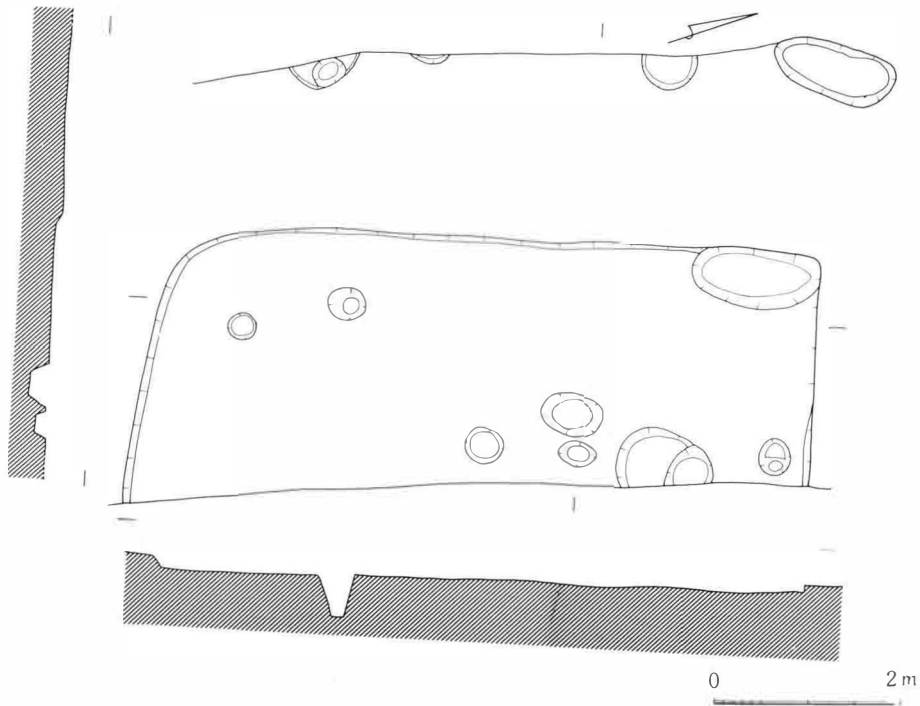


III-297 179号住居址・炉



III-298 179号住居址出土土器

壺・甕・高坏・鉢・甑・蓋形土器が出土しているほか、砥石（III-171-10）がある。3・4は壺の口縁部で朝顔状になるが、4の外面にはヘラナデ整形だけで赤色塗彩されない。1・2の甕は最大径が体部にあり、特に2の体部は球形化する。文様は楡描簾状文と波状文である。5は高坏形土器で、口縁端部が若干内弯気味に立ち上る。6は鉢形土器で、体部は内弯しながら立ち上り、内外面とも赤色塗彩が施される。7は甕形土器の底部であろう。

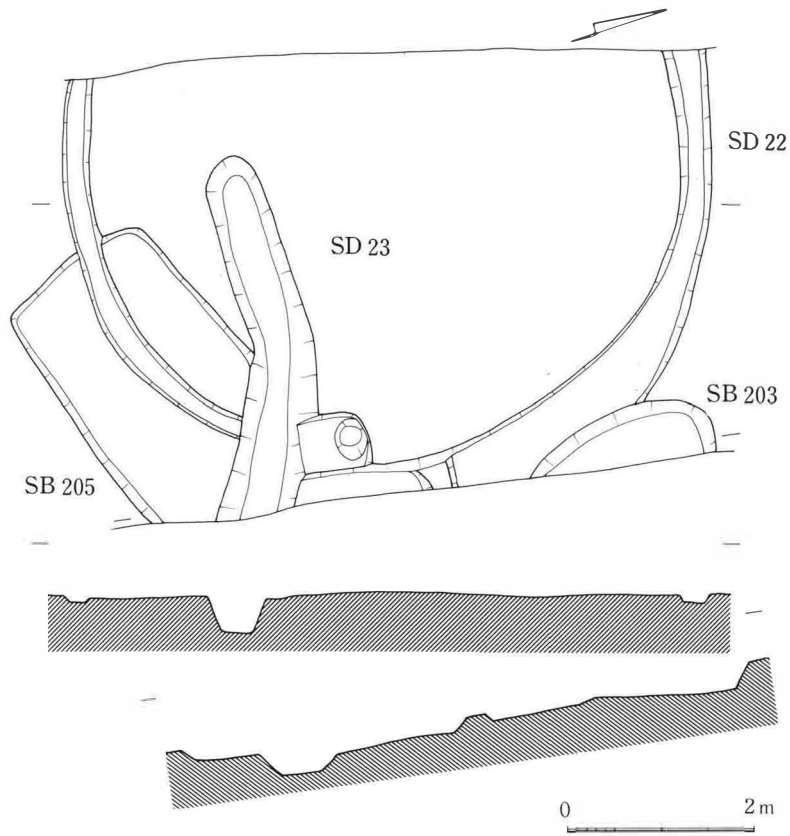


III-299 195号住居址実測図



III-300 195号住居址

調査地最北端から検出した住居址である。形態は南北軸6.8mを測る隅丸長方形になるが、東側半分は調査対象外になる。掘り込みは、北壁16cm・南壁7cm・西壁4cmを測る浅い住居址である。床面は平坦で軟弱である。主柱穴は明確でないが、6本柱を基本とした小屋組みになると思われる。床面は平坦で軟弱である。炉址等の施設は確認できなかった。



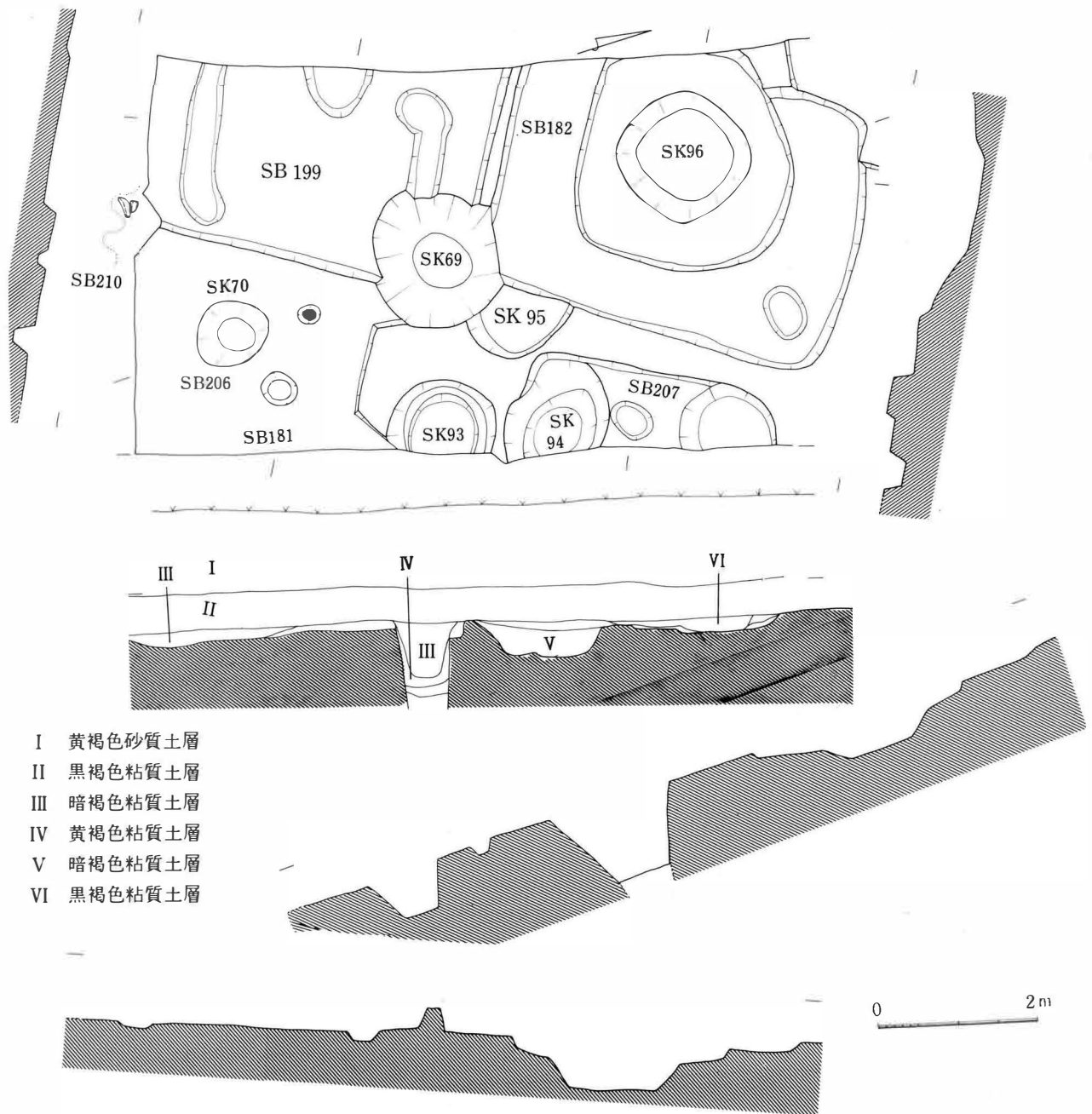
III-301 203号・205号住居址, 22号・23号溝址実測図



III-302 205号住居址

22号溝址を埋めて構築され、23号溝址に切られる。東西軸2.85m・短軸1.85mの長方形態を呈し、主軸はおよそ東西方向をとる。柱穴・炉址等は検出されず住居址であるか不明であるが、床面は平坦でところどころ堅い部分が残在している。壁の残存状況は、北側10cm、南側11cm、西側15cmの深さである。



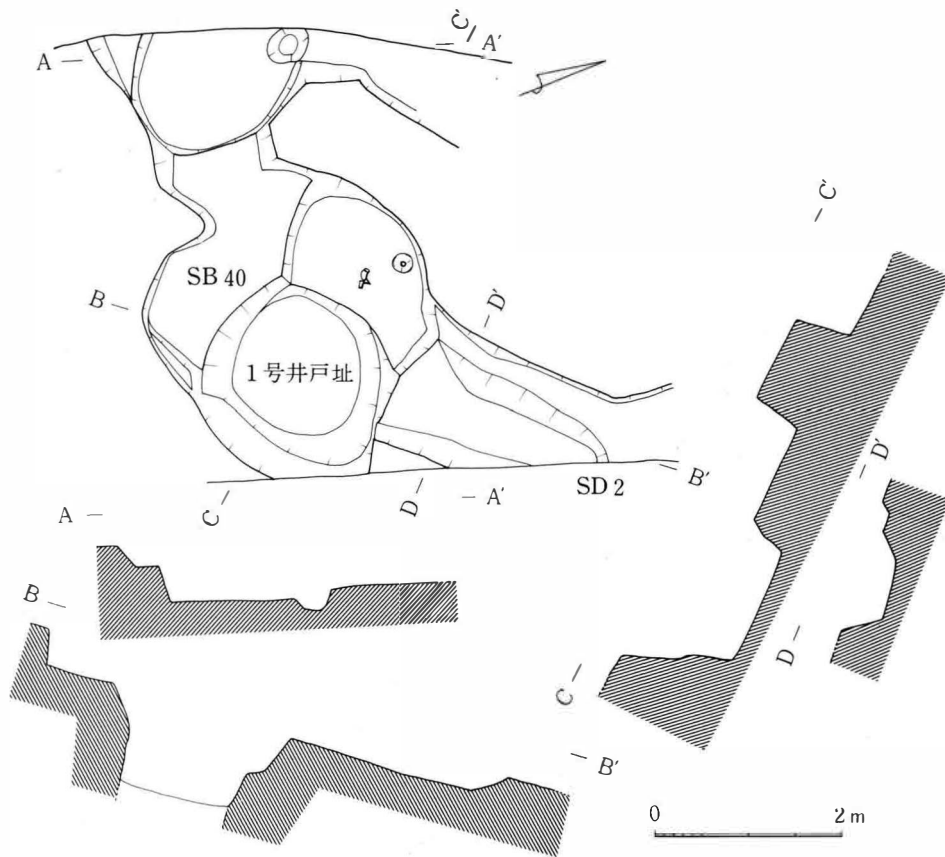


III-303 199号・206号・207号住居址，土壙96他実測図

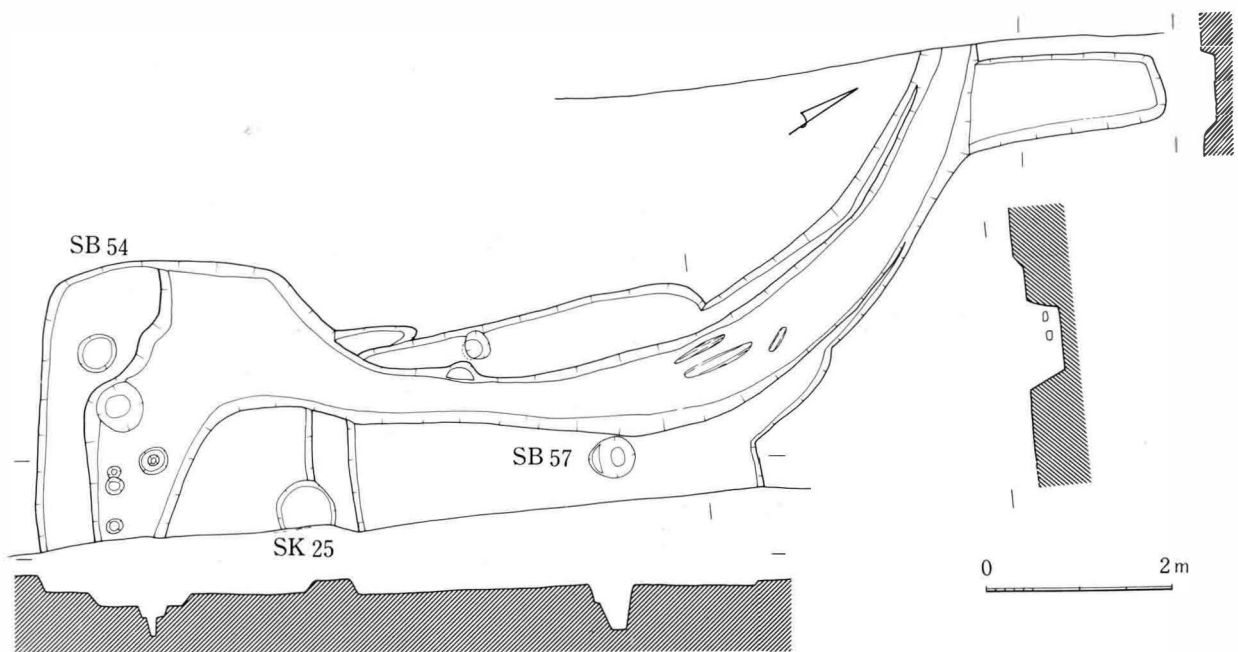
206号住居址 199号・181号住居址、土壙70によって切られる。また東側と南側は未調査区になるため規模等は不明である。形態は方形を呈するものと思われる。柱穴は北壁よりやや内側に2個確認され、これを支柱穴と想定すれば、主軸が東西方向の6個方形配列になる。検出面からの掘り込みは浅く、北壁・西壁ともに13cmを測る。床面は平坦で軟弱である。

出土遺物は少なく、量的には弥生時代中期のものが多く出土している。これに混入するように該期の土器片がある。図示できる破片はなく、器種に壺・甕・高环形土器片が認められる。壺形土器は体部片で、外面はヘラミガキが施され赤色塗彩される。内面はナデ整形によっている。甕形土器も体部片で、楕描波状文がめぐらされ、文様下は、縦ヘラミガキ整形である。高环形土器は、坏部と脚部片があり、ともにヘラミガキ後、赤色塗彩される。

ちなみに199号住居址は奈良時代に、207号住居址は古墳時代後期に比定され、土壙69は径1.7m・深さ1.21mの楕鉢形の土壙で、平安期のものであろう。出土遺物は弥生時代中期のものが多く、打製石斧と凹石が出土している。土壙70は径約90cm・深さ57cmの円形を呈し、土壙71は井戸址と考えられる。

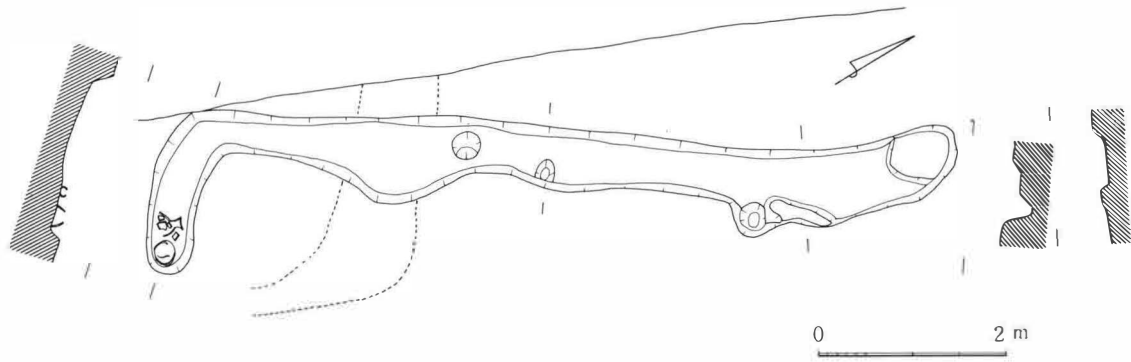


III-304 40号住居址(下), 2号溝址, 1号井戸址実測図



III-305 8号溝址実測図

8号溝址 古墳時代の54号・59号住居址下に検出されている。南側で直角に近いカーブを描いて曲った後北側へのび、その後緩やかな弧状に北西方向へと伸びてゆくが、調査区西端付近で、北側へ2mほど突出する形態を示す。溝幅は最大1.60m・最小0.5mで、平均0.7mぐらい、深さ40cm前後である。溝址中央やや北寄りの部分において、溝底よりやや浮いた状態で獣骨片が3点検出されているが、保存状態は良くなく、種類は不明である。



III-306 第9号溝址実測図



III-307 2号溝址, 1号井戸址



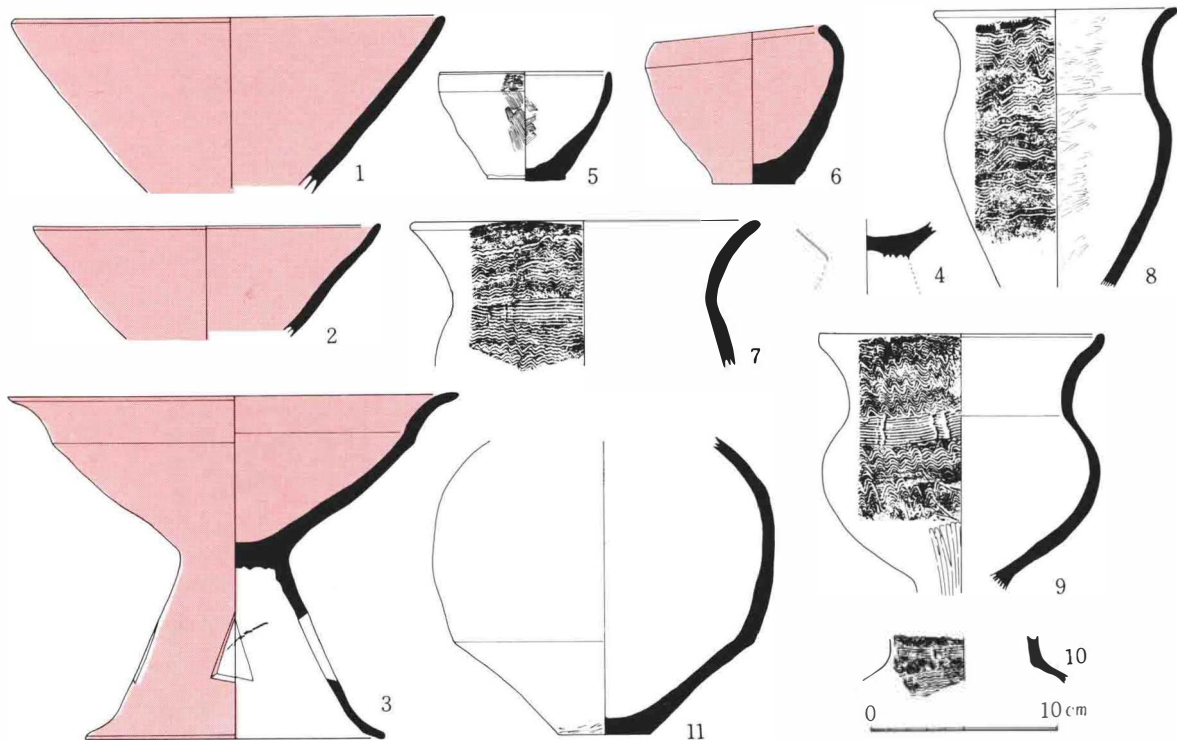
III-308 9号溝址

9号溝址 71号・72号住居址を切った状態で検出された。全長約8.40mほどで、南端部分は東方へ約2m弱ほど突出しているが、その端部において溝底に密着した状態で、土器が集中して検出されている。溝の最大幅は約1.0m・最小約0.4mで、平均して0.7m前後の幅を有する。深さは平均10~15cmであり、現状においては比較的小規模なものであり、その性格も不明である。出土遺物は該期の壺・甕・高坏片が少量出土している。





III-309 1号溝址



III-310 溝址出土土器

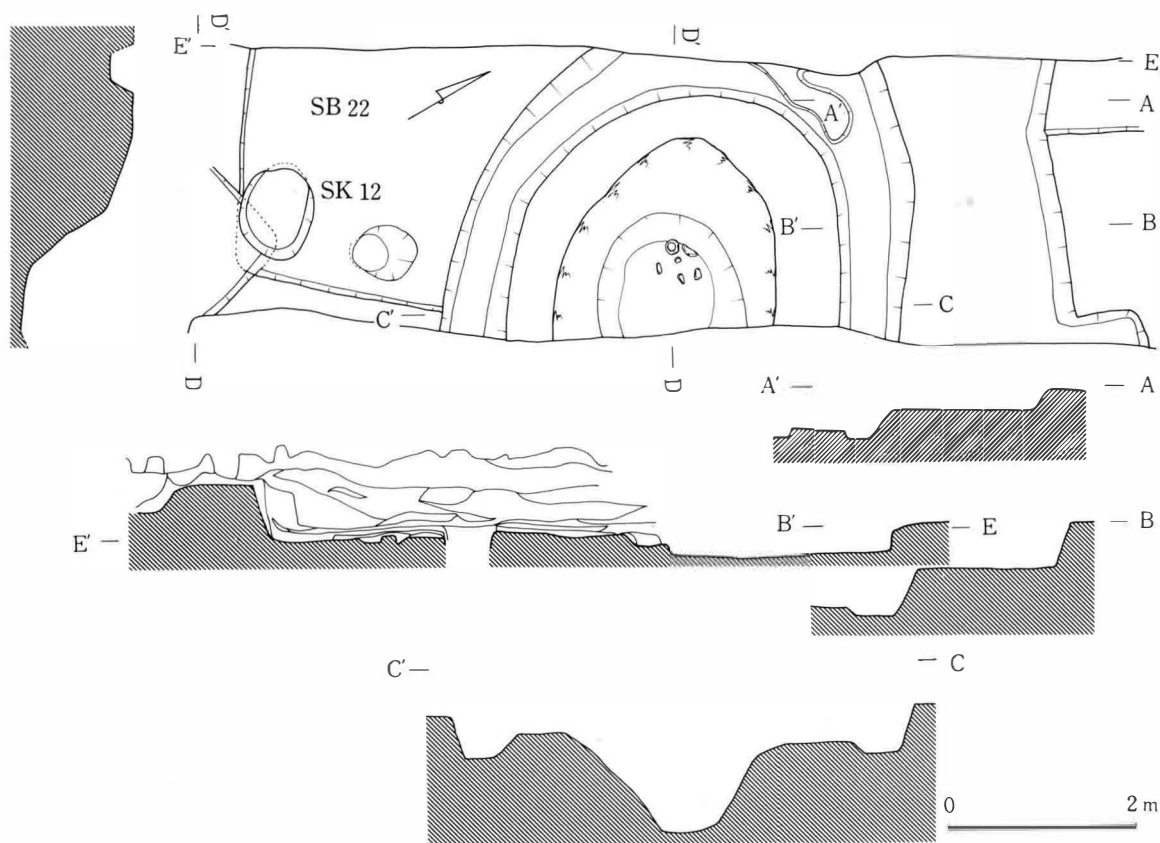
1号溝址(III-321) 9号住居址床面下より検出したもので、土壌状の掘り込みを伴う。最大巾1.28 m・深さ45 cmを測る。底面から弥生時代後期の高坏等が出土しており単なる溝とは考えられない。

溝址出土土器 1 (SD 2) は鉢形の高坏形土器坏部、内外面に赤色塗彩。2・7 (SDニ) は、高坏と甕形土器である。3・11 (SD 9) は高坏と壺形土器であり、3の脚部には三角窓が4個うがたれ、11の壺には赤色塗彩がない。5 (SD 1)・6 (SD 3) は鉢形土器で、6の内部には赤色顔料がつかまっていた。4・8～10 (SD 10) は、甕形土器片で、4・9は台付甕形土器であり、9の体部は球形を呈する。



III-311 9号溝址土器出土状態

9号溝址南東端部分において、集中した状態で検出されている。壺・甕・高坏形土器が出土しているが、いずれもつぶれたような状況を呈し、溝底に接した状態で出土している。何らかの目的をもった廃棄行為の結果と考えられる(III-306)。



III-312 2号・3号ファイアーピット実測図

この遺構付近も該期のものが重複しており22号住居址が最も新しく、次いで18号住居址、ファイアーピット2・3の順になる。この遺構の東半分は未調査区に延び、その方向に長軸がある楕円形を呈するものと思われる。短軸(南北)約2.4mで、ファイアーピット3の底面までの深さが1.1mを測る播鉢形になる。尚、検出面から深さ50cm前後の位置に炭化物がレンズ状に確認され、これをファイアーピット2とする。またこの遺構の外縁には周溝状遺構がめぐる。その規模は幅70~80cmで、深さ50cm前後のU字形で、比較的しっかりした掘り込みを示していた。ファイアーピット3の底面から湧水があったものの、厚さ10cm程の炭化物が認められた。ただ2と3の間にも明確ではないが、炭化物を含む層があり、数回の使用が考えられる。

出土遺物(III-316)は多く、それも破片状態のものである。そのほとんどが該期のもので、器種に壺・甕・高坏・鉢・甑・蓋形土器を内在していた。外縁の周溝からも同時期の破片を得たが、その量は少ない。



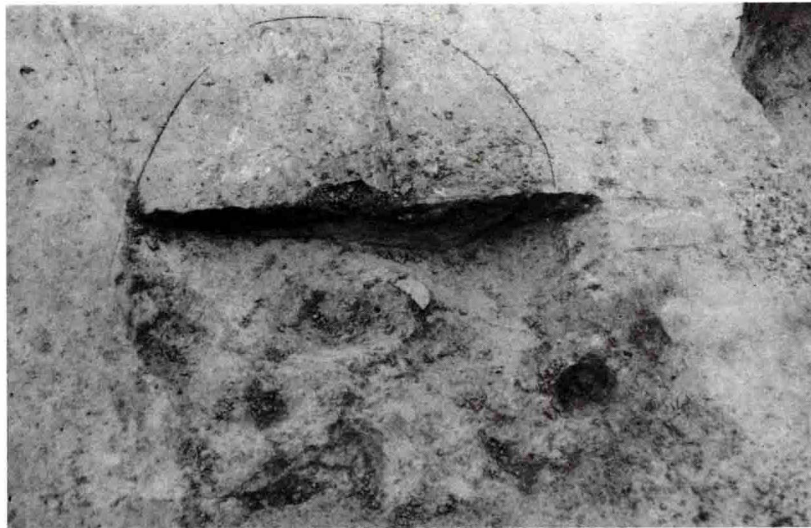
III-313 2号ファイアーピット, 18号住居址



III-314 2号・3号ファイアーピット, 29号住居址 (矢印は2号の炭化物層)

29号住居址 ファイアーピット2・3によって切られ、この周辺では該期の最も古い住居址である。規模・主軸方向・柱穴・炉址等詳細は不明であるが、床はしっかりした貼床をもっている。出土遺物III-225に図示した。

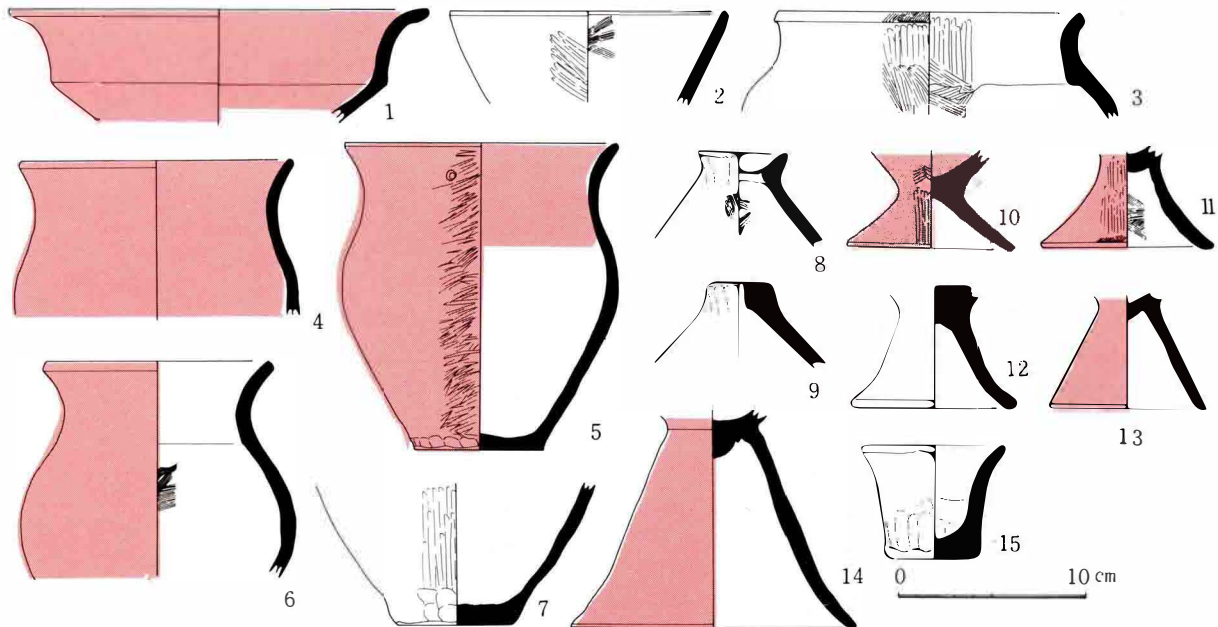




III-315 1号ファイアーピット

12号住居址と14号住居址の間から検出した地床炉形態をなすもので、炭化物及び焼土の範囲は2m以上もあった。掘り込みは東西1.65m・南北1.12mを測り、焼土はレンズ状に堆積しており、中央の深さは12cmである。また東側に径約70cm・深さ40cmの土壇3を伴うが、上面に焼土・炭化物があった(III-304)。

出土遺物は、該期の壺・甕・高坏土器片を得たにすぎないが、2ヶ所の焼土中より土製の紡錘車と同未製品(III-166-8・9)が出土した。



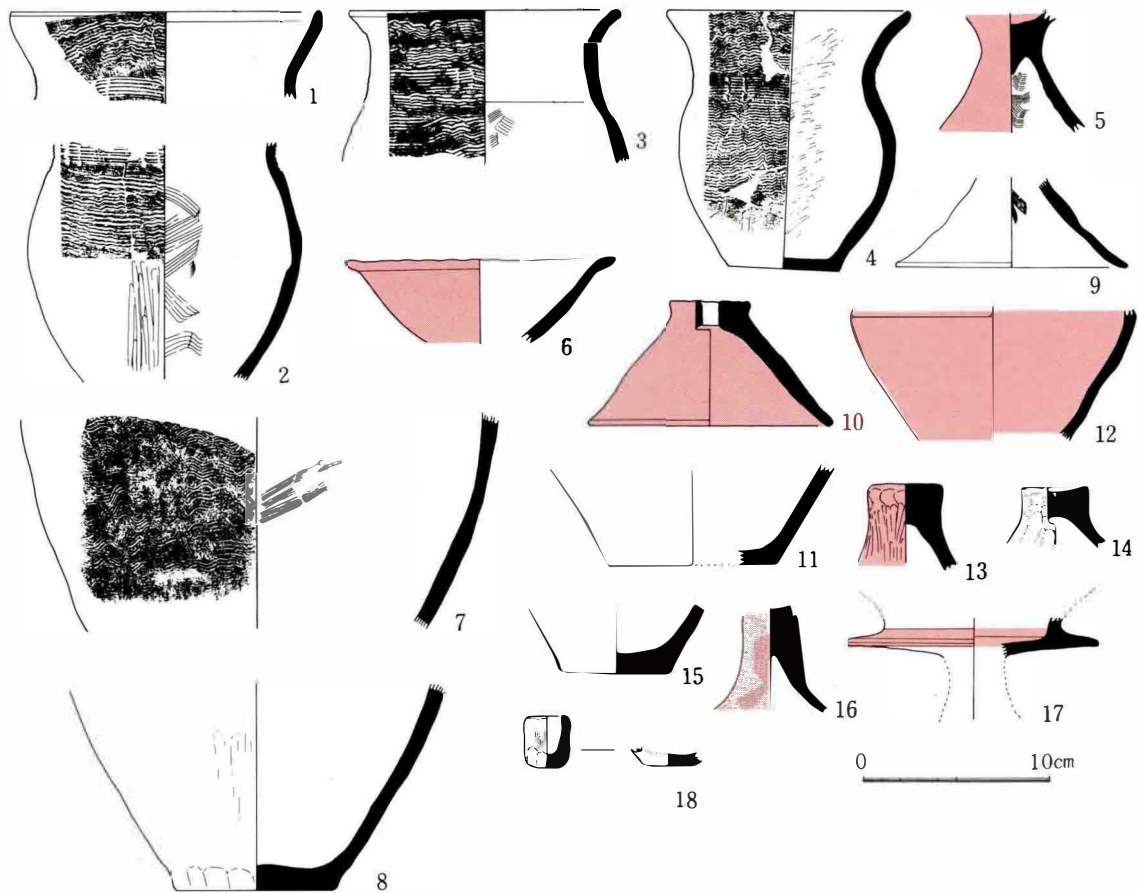
III-316 ファイアーピット, 土壇出土土器

ファイアーピット1出土土器(14) 炭化物層直上から出土した高坏形土器で、坏部と脚部の接合痕を残す。坏部内面および脚部内面はヘラミガキが施され、赤色塗彩される。

ファイアーピット3出土土器(1~10・12) 1は体部に段をなし、口縁部が外反する高坏坏部である。2は赤色塗彩されないところから浅鉢形土器である。3は頸部が内屈し、口縁端部が面取りされる見えない甕形土器である。4~6は甕形の広口壺で、4は残存部全面が赤色塗彩され、これも珍しい資料である。5の赤色塗彩範囲は内面頸部までおよんで、2孔一対の円孔がうがたれる。6は外面だけ赤色塗彩される。ともに外面ヘラミガキが施され、内面体部はハケナデ・ナデ整形される。8・9は蓋形の土器で、つまみ部と体部は円孔をもって接続する。内外面ともハケナデ整形である。10は高坏形土器脚部片で、大きく外開する器形になる。赤色塗彩が施される。12も高坏形土器の脚部形態になるが、赤色塗彩が認められないことから台付甕の器形であろう。ヘラミガキ整形される。7は甕形土器の底部片である。

土壇7(11) 高坏形土器の脚部で外面だけ赤色塗彩され、坏部内面には認められない。

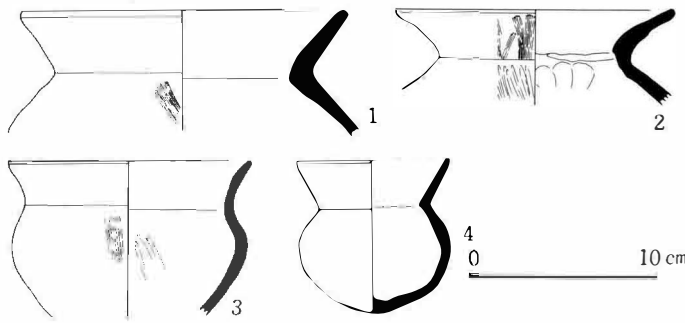
土壇107(13・15) 13は高坏形土器の脚部で、直線的に外開し、裾部の屈曲はみられない。15は浅鉢形土器で、底部は指頭によるナデツケ整形で、他はハケナデ整形になる。



III-317 検出面, その他の遺構出土土器

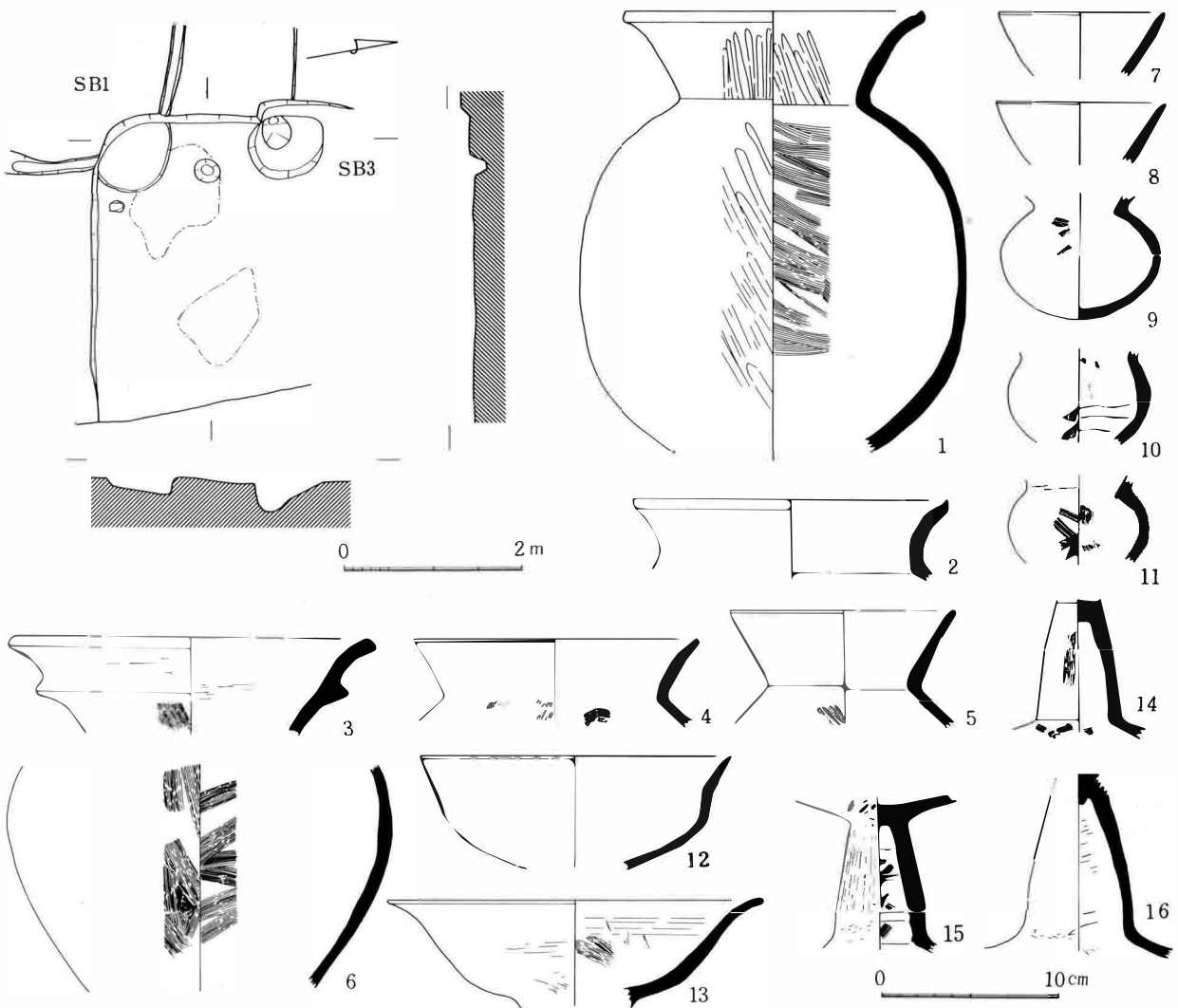
壺・甕・蓋・高坏・鉢・器台・ミニチュア形土器がある。11は壺の底部破片で外面はへらナデ整形される。1～4・7・8は甕形土器である。1～4は小形品であるが、口縁端部が内弯気味に立ち上がり同部に最大径を有する(1・4)と口縁部が単純に外反して終り、体部上位に最大径を有す(3)の二形態に大別される。文様はいずれも頸部にまず櫛描簾状文を施文し、その後口縁部は下から上へ、胴部は上から下へ波状文を施文する。体部下半ならびに口縁部内面はいずれもへらミガキ整形される。7・8は大形甕である。7は体部中位に櫛描波状文が上から下へ施文され、8は体部下半片で、外面には縦方向のへらミガキ整形痕を残す。5・6・16は高坏形土器である。6は底部より直線的に外開した坏部が端部にて緩く外反する形態になる。5・16は高坏脚部であるが、いずれもハの字状に広がり大きく外開する形態なると思われる。9・10・13・14は蓋形土器である。9・10は鉢形土器を伏せたような形態になる。10のつまみ部の突出はさほど明確ではなく中央に大きな一孔がうがたれる。13・14はともにつまみ部が明確に形成されている。14はつまみ部上面が若干凹み、中央に小円孔を有する。10・13はへらミガキ整形され、内外面ともに赤色塗彩される等、つくりも丁寧であり、貯蔵用土器の蓋であった可能性が考えられる。12・15は鉢形土器で、12は内外面ともにへらミガキ整形され赤色塗彩される。15は内外面ともへらナデ整形される。17は器受部底部が外方へ大きく突出する装飾器台であろう。内外面ともへらミガキ整形され、赤色塗彩される。18はミニチュアの手捏土器である。外面にはへらナデ整形痕ならびに、指頭による調整痕を顕著に残す。(千野 浩)

## 第5節 古墳時代前半の遺構と遺物



III-318 0号住居址出土土器

調査地最南端の自然堤防東縁にある遺構で、住居址東壁付近を破壊し、土器だけを検出した。1～3は甕形土器である。1・2は頸部がく字形に屈曲する壺形の甕形土器で、最大径は体部にある。3は頸部が立ち上がり最大径が口縁部にある甕形土器になる。4は小形丸底形土器で球形胴になる。ともにハケ整形が多用される。



III-319 2号住居址実測図・出土土器

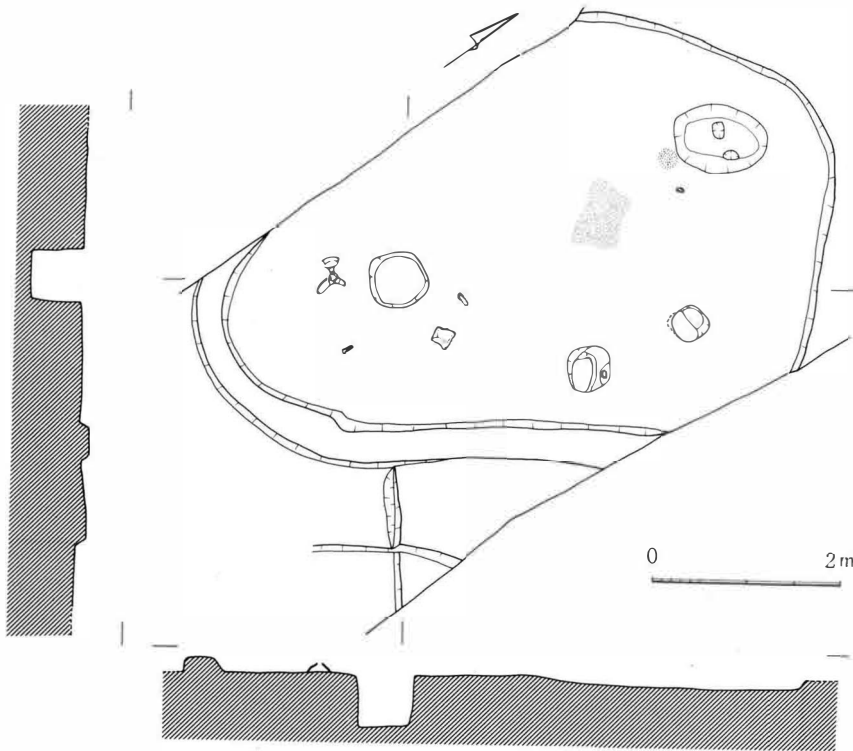
形態は隅丸方形を呈するものと思われ、南壁は床面より数cm・西壁は10cmの掘り込みとなる。床面は貼床になり、炭化物が散在していた。柱穴は南西隅付近に1個確認された。

出土遺物は検出面及び床面からのもので、1～6は甕形土器、7～11は小形丸底形土器、12～16は高坏形土器である。1は球形胴を呈し、3の口縁部は有段になる。また2の口唇部は面取りされる。小形丸底形土器の体部は扁平化する傾向がある。これらの土器の一次整形は、ハケ状工具によっている。

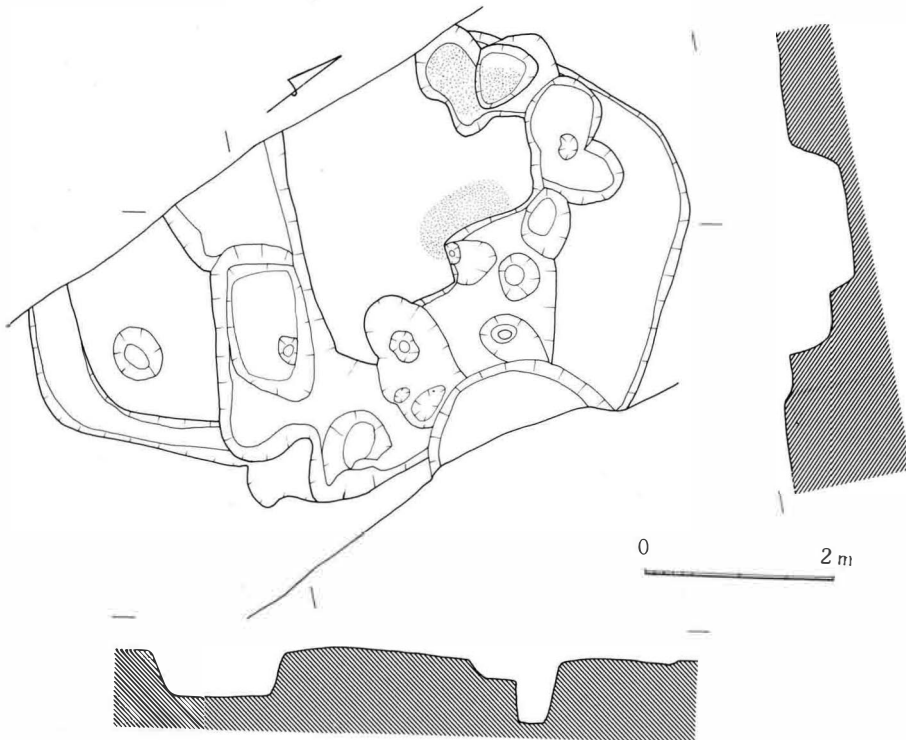




III-320 2号・4号住居址



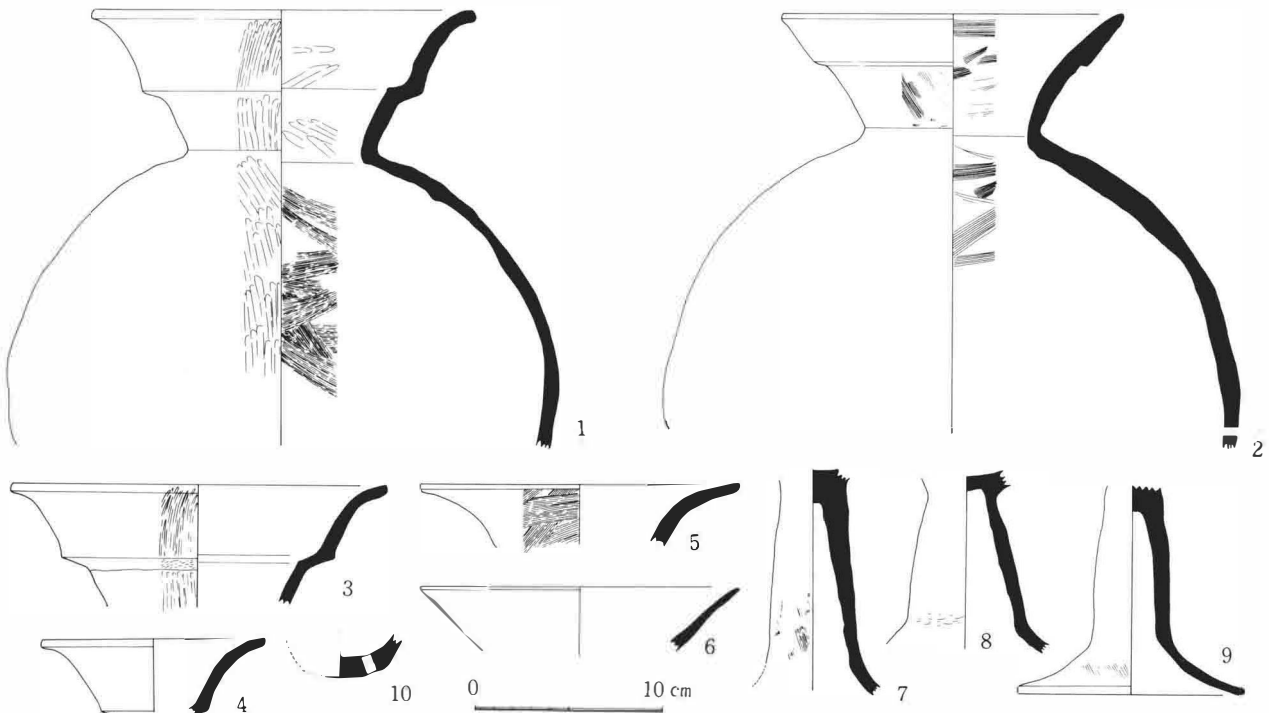
13号住居址の北に位置し、9号住居址の南壁から東壁に沿って1号溝址が検出された。9号住居址の形態は隅丸長方形を呈し、規模は長軸約6.2m・短軸4.4mを測り、主軸はN37°Eになる。壁高は北壁8cm・南壁17cm・東壁10cm・西壁約10cmを測る。床面は堅緻なところと軟弱なところとあり、東側へ傾斜する。中央やや北に炉址と思われる焼土がある。貼床及び東壁から南壁に沿う隆帯部を掘り下げたところ、幅30cm～55cm・深さ28cm程のU字形溝になった。また、住居址内南側から東壁に沿い幅1.2～1.5m・深さ0.4～1.02m程の濠状の掘り込みがみられ、上面の焼土の付近では北西にかなり広く厚い焼土の堆積があった。東側の深いピット内からは高坏形脚部や壺形土器が落ち込む形で出土している。また東の道路壁際の土壌内からは獣骨と思われる骨片が出土した。柱穴は4個方形配列になるとと思われる。



III-321 9号住居址(上・下), 1号溝址実測図



III-322 9号(上)住居址



III-323 9号住居址出土土器

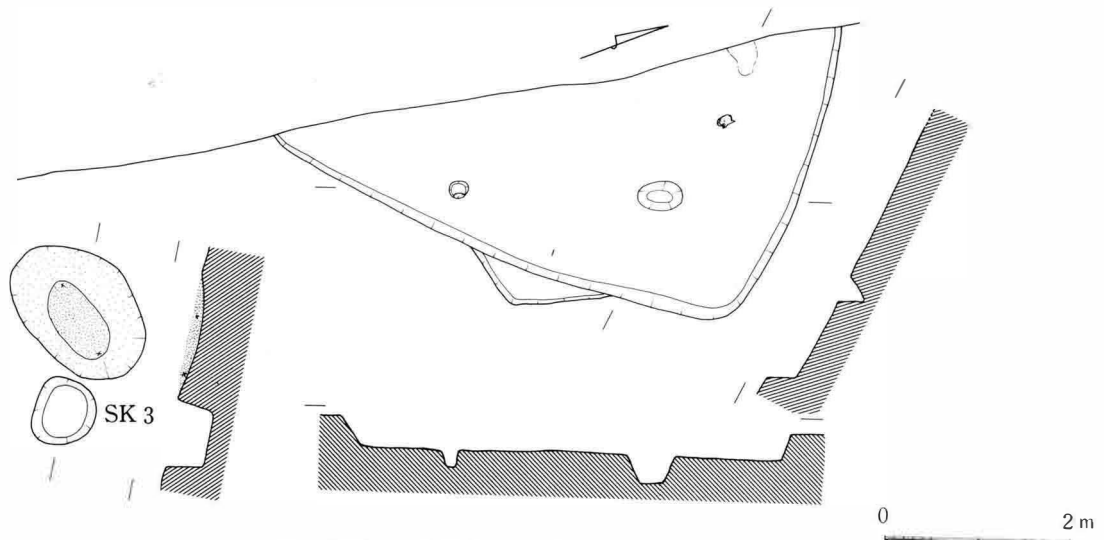
図示したものは、床面及び直上から出土した。壺形土器(1~5)。ともに有段口縁土器で、体部は球形になり、最大径は体部中位にある。1・3・4の内面にも段をもち、4は小形である。整形は口縁部においては1・3・4は縦へラミガキ、2と5はハケナデされている。体部はいずれも外面へラミガキ、内面ハケナデ整形される。高坏形土器(6~9)6の坏部は浅鉢形で口縁部はゆるやかに外反する。内外面ともにハケナデ後へラミガキされる。7~9の脚部は筒状で裾部は鋭く外反して広がる。10は甑形土器で多孔になるものと思われる。このほか小形丸底形土器・坏形土器片のほか、砥石(III-171-15・16)が出土している。15は軽石製で磨面は多角形を呈する。



III-324 9号(下)・13号住居址

13号住居址(III-205) 10号住居址の北側上面から検出され、東西両端が調査区外にある。形態は東西にやや長い長方形を呈するものと思われ、規模は東西軸およそ5m、南北軸4mを測り、主軸はN66°Wになる。壁高は約5~7cmと浅い。主柱穴は4個である。床面は平坦で、貼床が認められた。

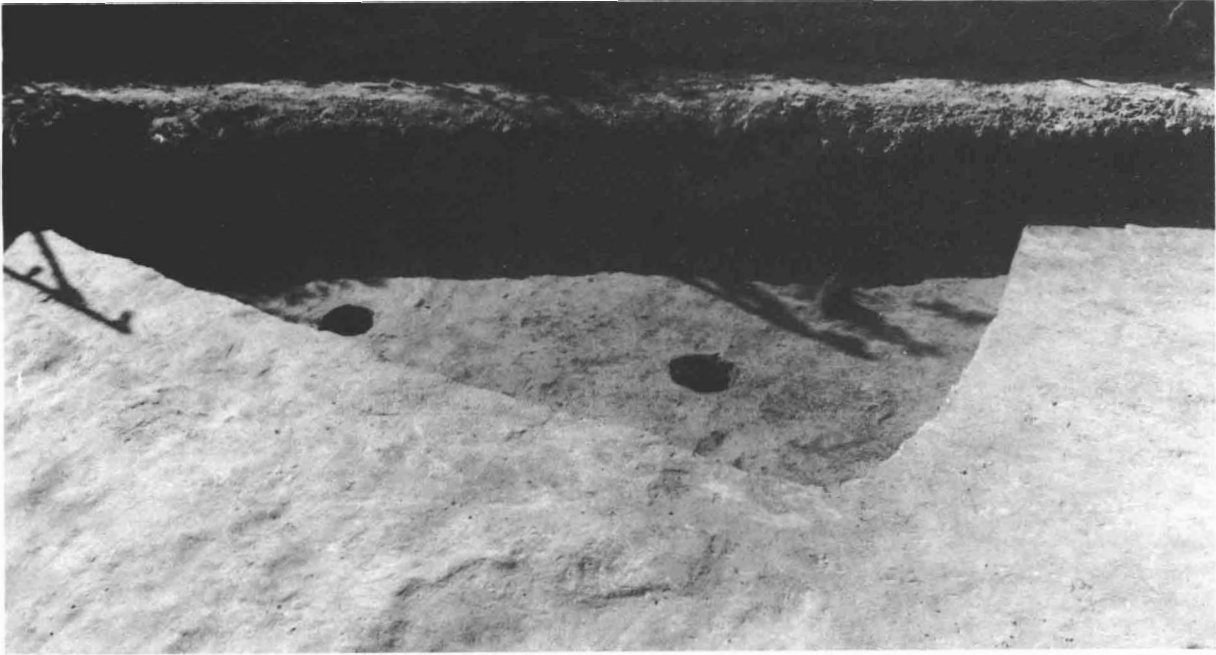
出土土器は10号住居址のものと同様であり、柑形土器口縁部、坏形土器片等が出土しているにすぎない。



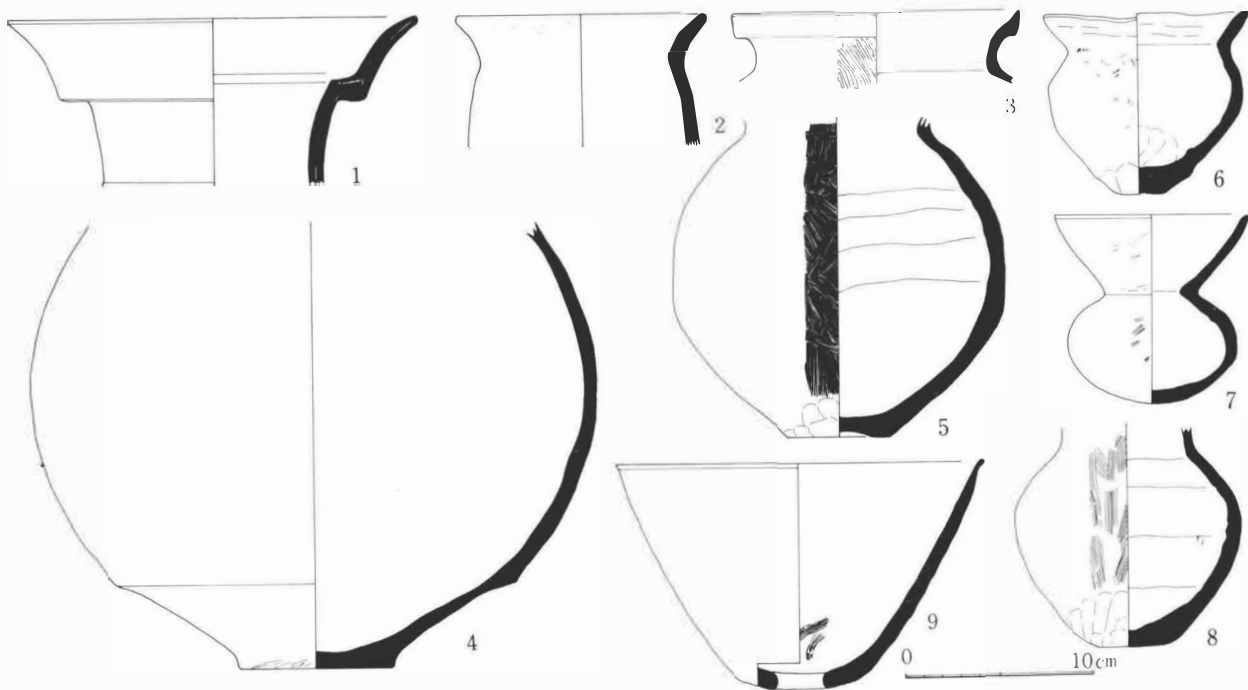
III-325 14号住居址, 1号ファイアーピット実測図

15号住居址の南側上面から、東壁及び南壁の一部を検出したものの西側半分は調査区外に延びる。そのため形態・規模等の詳細については明確でないが、形態はほぼ長方形を呈するものと思われ、主軸方向はN35°W前後になる。主軸規模は約5.6m位と推定される。掘り込みは東壁28cm・南壁28cmと一定しており、割合に深い住居址である。床面は平坦で中央付近には黒褐色粘質土の貼床が認められた。主柱穴は東南隅内側に楕円形を呈するものが1個検出され、深さ16cmを測る。炉は東壁沿いの調査地際付近に炭化物が集中していた箇所があり、この付近に求められる。



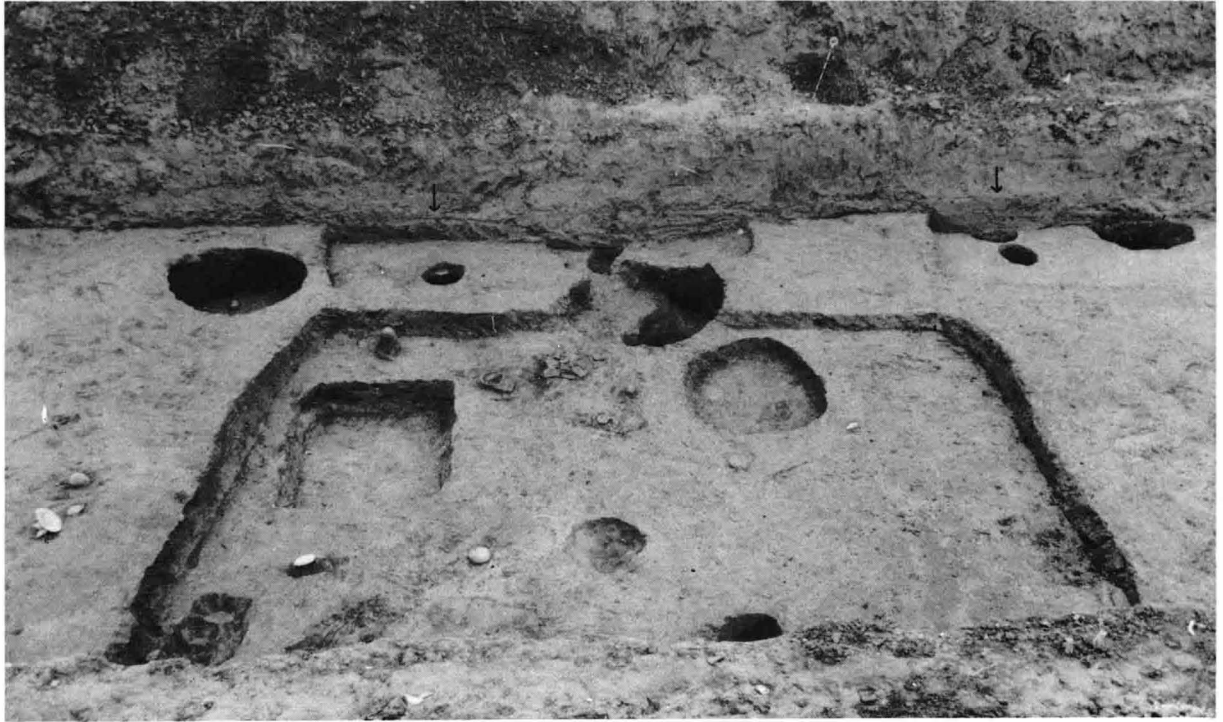


III-326 14号住居址

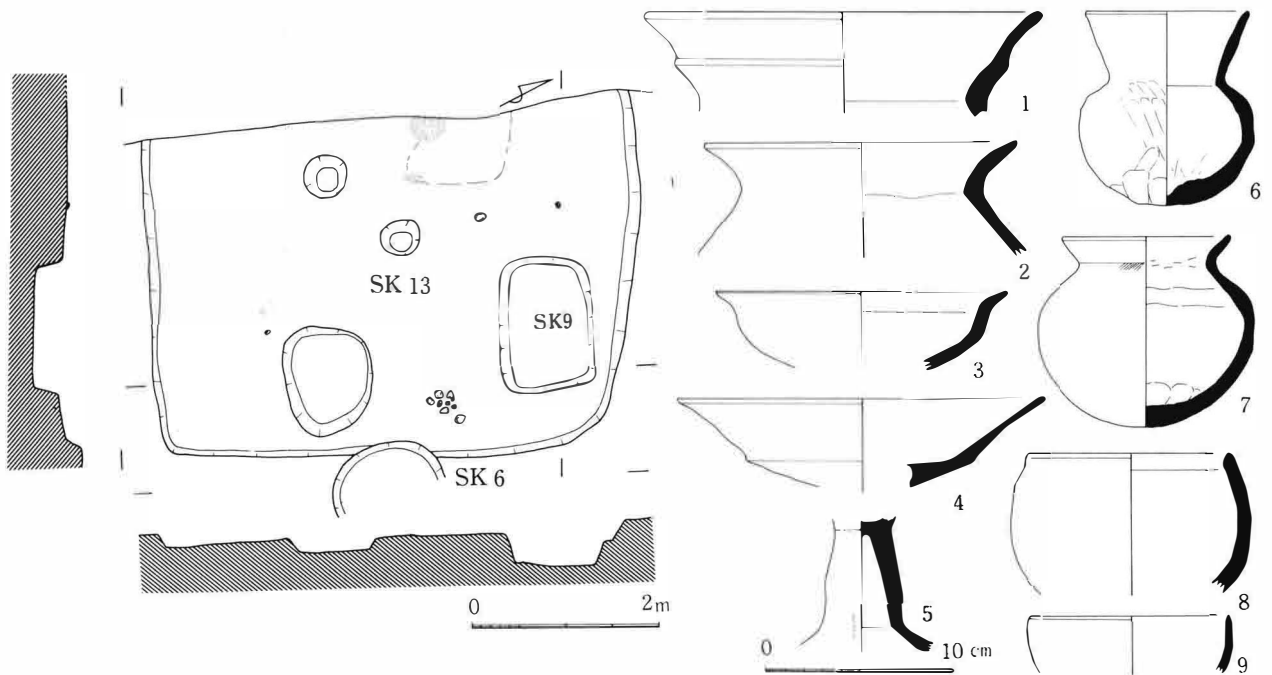


III-327 14号住居址出土土器

覆土及び床面から多くの土器が出土した。壺形土器(1・4・5・8)1は有段口縁になり、外面上段は横ハケナデ、下段はヘラナデ整形が施され、内面は横ハケナデされる。4は球形の体部をなし、底部近くでくびれ稜をつくるもので外面は縦ヘラミガキ整形される。5・8は小形の壺で、外面はハケナデ整形され、底部の立ち上りに指頭痕が顕著にみられる。5の内面には粘土輪積痕が認められる。2は前記したものと異なりやや胴長を呈し、口縁は外反するもので、口縁部外面は横ハケナデ、体部は縦ヘラ整形される。3は口縁がほぼ直に立ち上り段をつくるものである。6は小形で鉢形に近く、整形は粗く指頭痕が目立つ。小形丸底形土器(7)は赤みを帯びた茶褐色を呈し、口縁部は内弯気味に外反しており、体部はやや扁平をなし底部は丸底である。甑形土器(9)は鉢形で底部に径2.3mの円孔が1孔うがたれている。外面はヘラナデ整形し底部近くはハケナデされている。内面はハケナデ及びヘラナデ整形される。胎土に大小の石英粒・小石粒を含む。



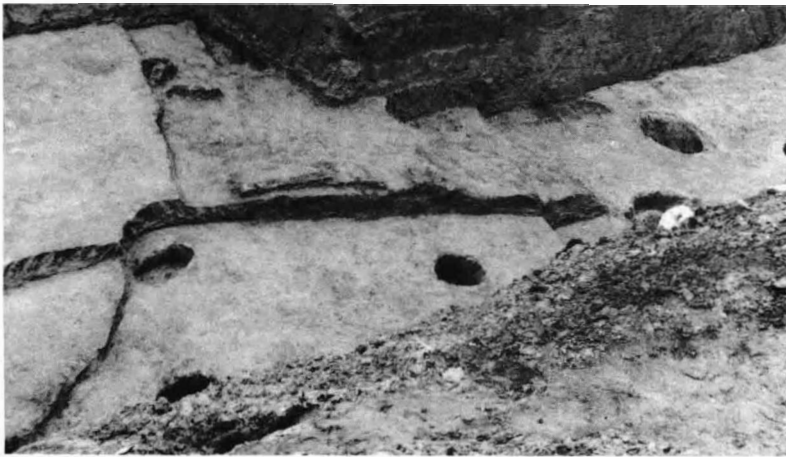
III-328 20号住居址



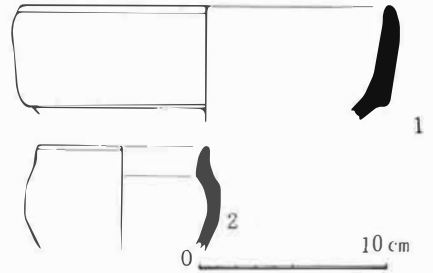
III-329 20号住居址実測図・出土土器

15号住居址の北側上面から検出され、西側は調査区外にある。形態は方形を呈すと思われ、規模は南北で約5.1 mを測る。壁高は北壁15 cm、南壁22 cm、東壁は16 cmである。床面は貼床で西側道路壁際に焼土と炭化物が認められた。土壙9・13より古い。

弥生時代の土器と混在し全体の出土量が多い。壺形土器の1は有段口縁になる。2の頸部はくの字形になり、内面に稜を残す。高坏形土器の3は坏部が腕形のもので、4は鉢形で体部との接点に稜をもつ。5の脚部は筒形で裾部が鋭く外反する。6の小形丸底形土器は口縁部が緩く外反し、外面底部近くに指頭痕が顕著に残る。7は小形甕形土器で内面に成形痕が認められる。8は鉢形土器で整形は丁寧にはラミガキされている。9は坏形土器で外面は横へラミガキ整形されている。

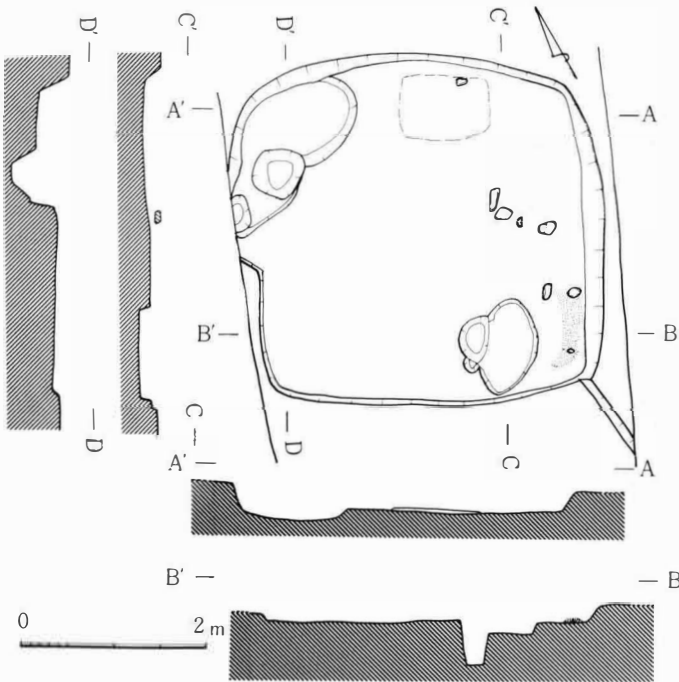


III-330 35号住居址



III-331 35号住居址出土土器

検出面とほぼ同レベルで炭化材の出土をみた。住居形態は隅丸方形を呈するものと思われるが、規模等は不明である。壺・坏形土器が出土した。

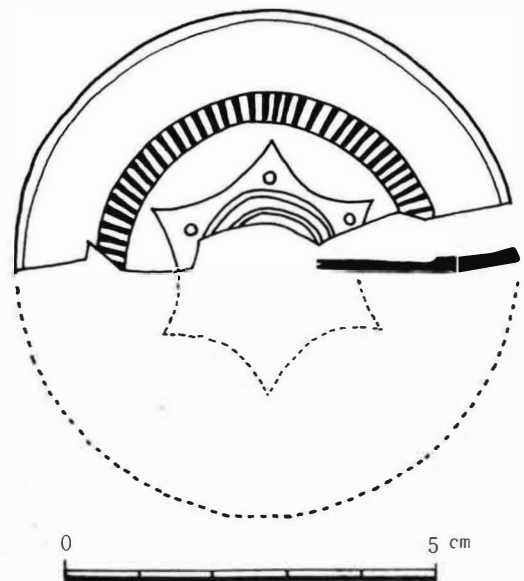


III-332 48号住居址出土土器

46号住居址の北側下面から検出されほぼ全容がうかがえる。形態は隅丸方形を呈し、規模は3.7mと3.8mを測る。主軸はN 33°Eを指す。壁高は北壁15cm・南壁3cm・東壁18cm・西壁17cmを測り、南壁は46号住居址により削られており僅かに残存していた。床面は貼床がしてあり、支柱穴が2個確認された。床面には炭化物が散在し、東南隅には小礫と焼土が認められた。また中央北壁寄りには長方形を呈し、70~100cm、厚さ約10cmを測る炭化物が検出され、地床炉と思われる。注目すべきは内行花文鏡の出土である。中央東側に礫で囲むかのようにして床面上に裏面を上にして出土した。白銅製で径6.7cmの半欠品である。他の出土遺物は極めて少なく甕・高坏・埴形土器の破片が出土しているものの図上復元できるものはなかった。

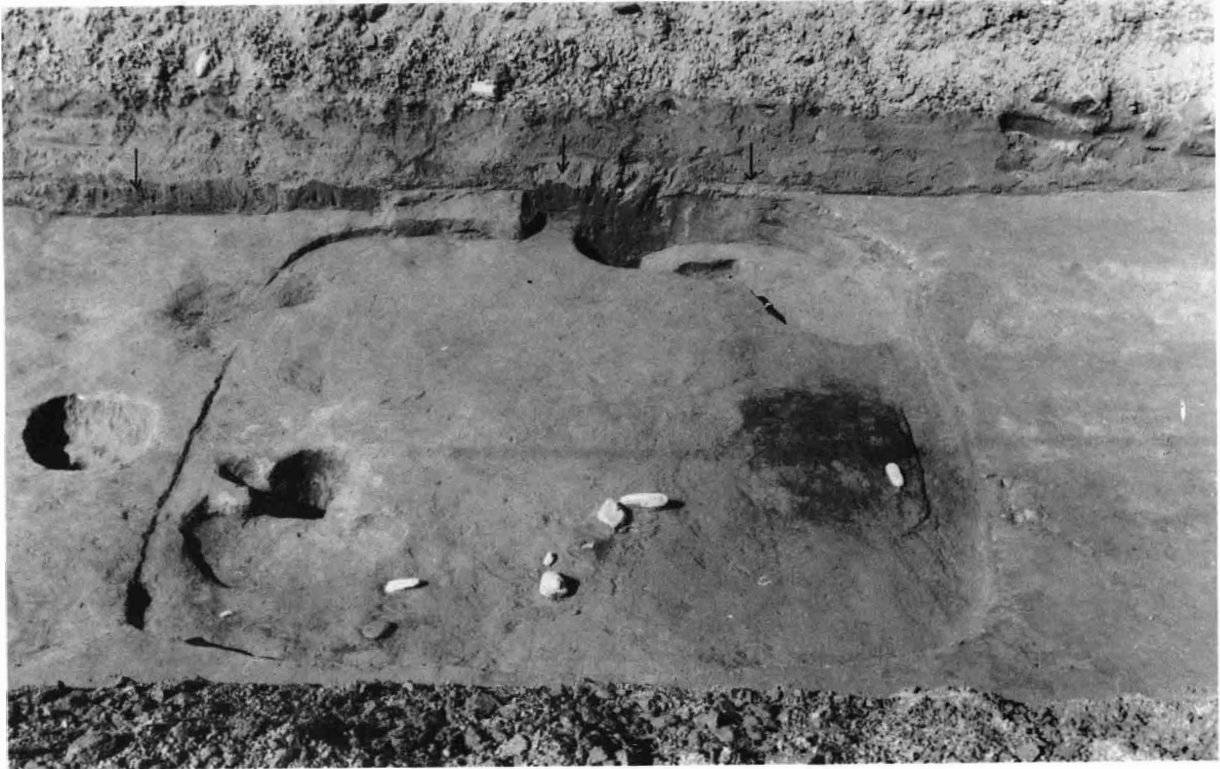


III-333 内行花文鏡出土状態

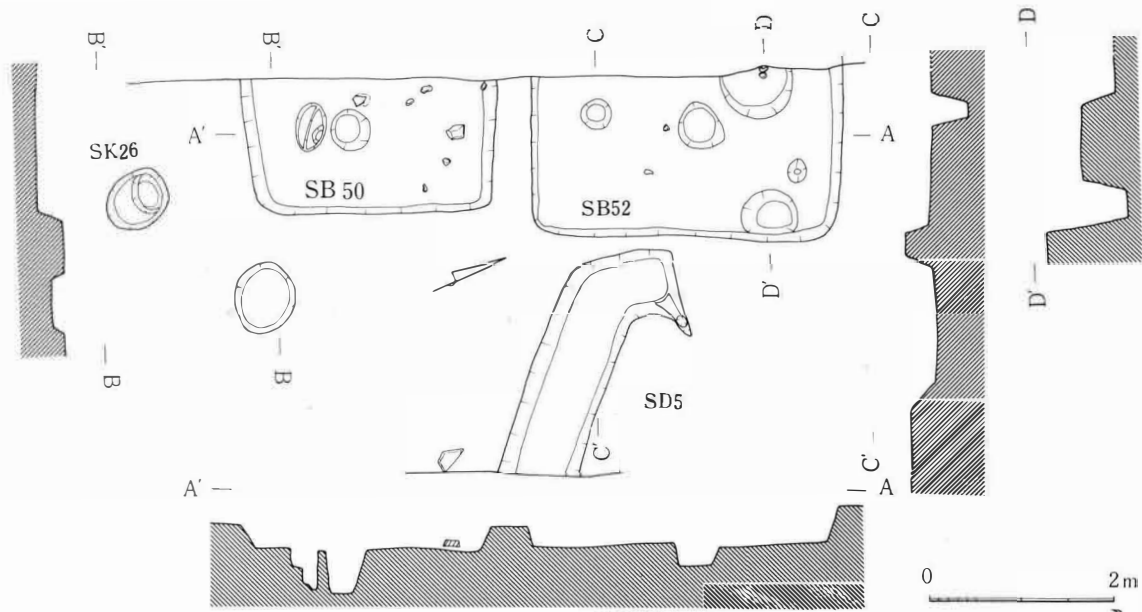


III-334 内行花文鏡実測図





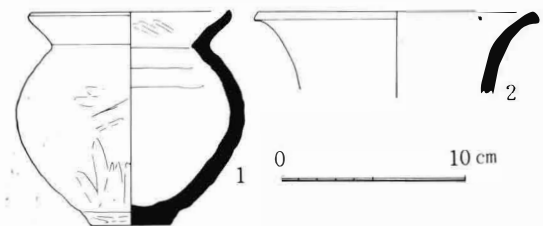
III-335 48号住居址



III-336 50号・52号住居址, 5号溝址実測図



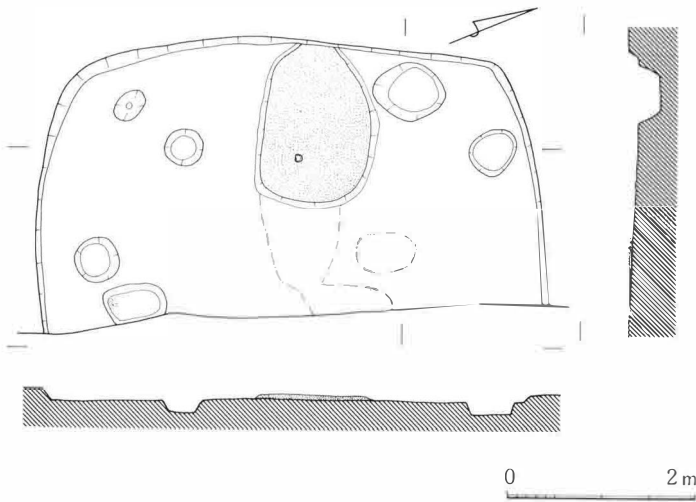
III-337 50号・52号住居址, 5号溝址



III-338 52号住居址出土土器

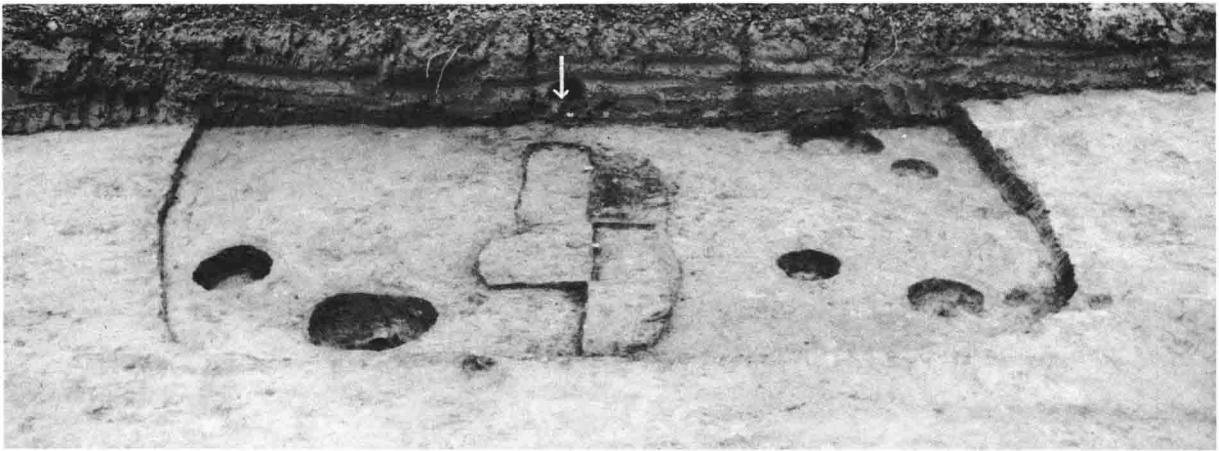
52号住居址 西半分は調査区外にある。形態は方形を呈すと思われ、規模は南北3.3mを測り、壁高は北壁44cm・南壁23cm・東壁31cmである。主軸はN 24°Eを指す床面は貼床である。

出土土器はピット内より小形甕形土器(1)の完形品が、その他器台・坏・高坏形土器片が出土している。



III-339 58号住居址実測図

8号溝址の北側に検出され、東半分は調査区外にある。形態は隅丸方形を呈すと思われ、規模は南北5.4mを測る。主軸方向はN 68°Wである。壁高は北壁6cm・南壁14cm・西壁8cmを測る。主柱穴は3個確認された。床面は貼床であり、かなり広範囲に焼土と炭化物が散在していた。西壁中央に沿い1.3×1.7mのカマドがつくられ焼土が約10cm近く堆積していた。出土遺物は管玉(III-166-41)が出土し注目される他、弥生時代の土器が多く、該期のものでは甕・坏形土器の破片が出土した。



III-340 58号住居址



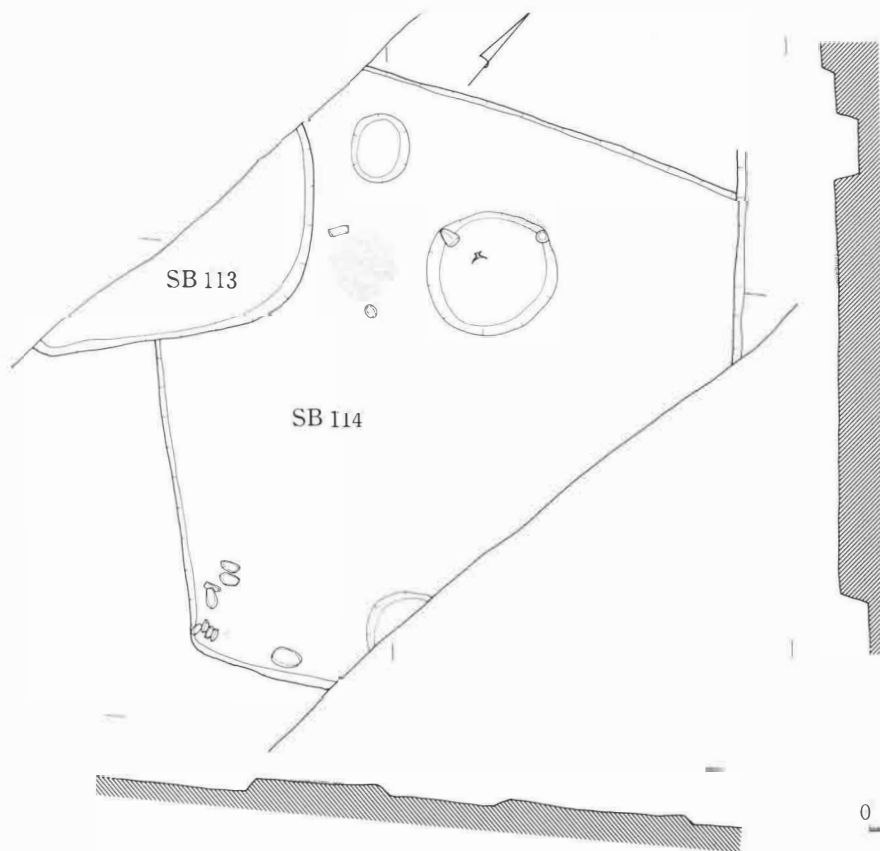
III-341 86号~90号住居址

86号住居址(Ⅲ-383) 87号・89号住居址によって破壊され、南壁と西壁の一部を検出したにすぎない。形態は隅丸方形を呈し、掘り込みは南壁38cm・西壁22cmを測る。床面は東側に高くなり、壁高8cm程になる。支柱穴は南西隅に1個検出し、87号住居址内の柱穴を考えると4個方形配列になる。カマド等の施設は確認できなかった。

出土遺物は少なく、小形甕・小形丸底形土器片を検出したにすぎない。

90号住居址(Ⅲ-383) 86号・87号・89号(上・下)住居址に切られ、北壁と南壁の一部を検出したにすぎない。形態は(隅丸)方形を呈するものと思われ、南北軸は5.84mを測る。検出面からの掘り込みは北壁で36cm・南壁で9cmである。床面は平坦で軟弱である。支柱穴は、89号(下)と86号住居址内のものと87号住居址東側調査区際のものをも想定する。カマド等の施設は確認できなかった。

出土遺物は、各時期のものが混在していたため南壁沿いから出土した土器をもって当住居址の時期比定したが、土師器の球形胴甕形土器が数点出土しているにすぎない。



113号住居址に切られ、135号住居址、4号木棺墓の上に貼床をして構築されている。方形を呈すると思われ、約6.55×6.3mを測る、主軸はN34°Wを指す。壁高は北壁16cm・南壁10cm・西壁24cmになる。中央北側に焼土が認められ炉址と思われる。西南隅に礫が集中していた。

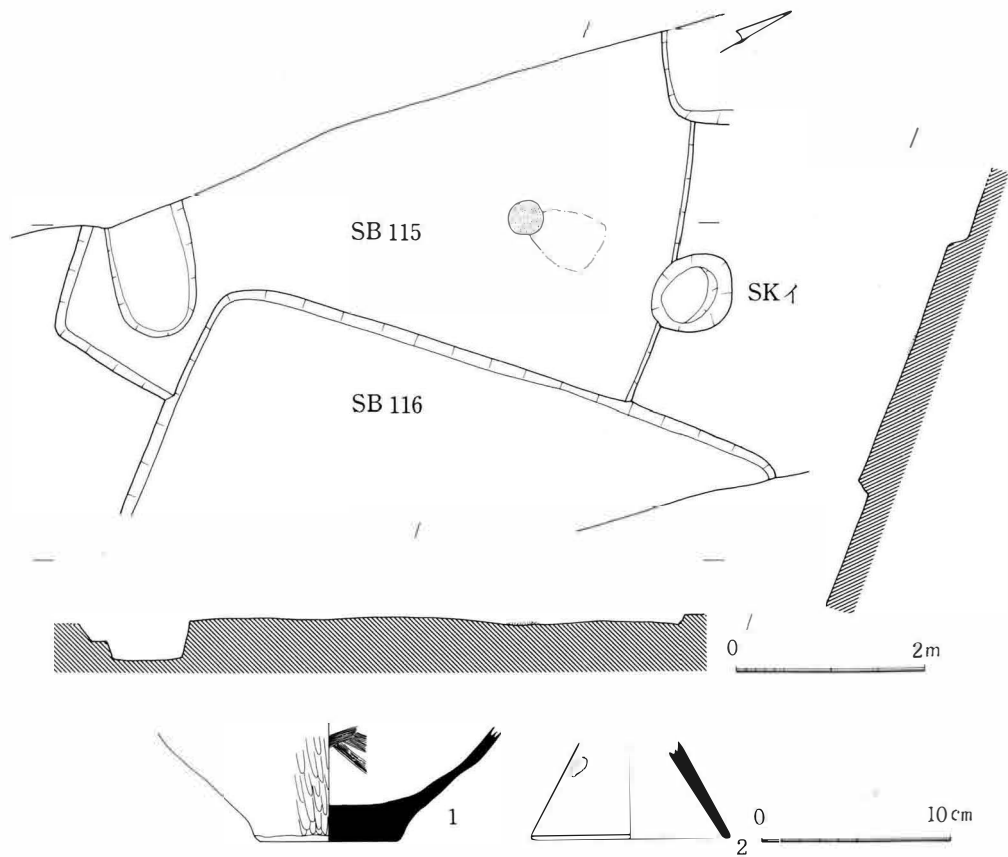
遺物は135号住居址のものと混在し、甕・小形埴・高坏形土器の破片を抽出するが、図示できるものはない。

Ⅲ-342 113号・114号住居址実測図

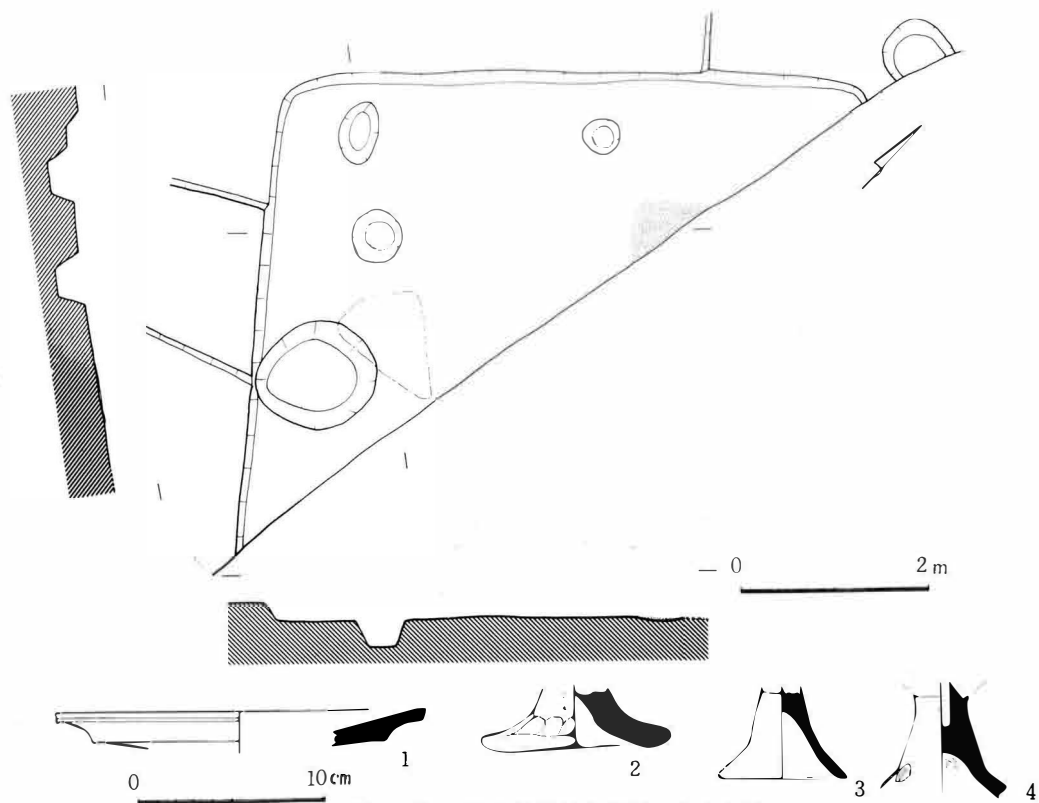


Ⅲ-343 113号・114号住居址





III-344 115号住居址実測図・出土土器



III-345 116号住居址実測図・出土土器

115号住居址 116号住居址の西から検出されたもので形態は方形を呈すると思われ、規模は南北で6.1mを測る。主軸方向はN 39°Eである。壁高は北壁6cm・南壁18cm・東壁15cmを測る。中央北寄りに径36cmの地床炉がある。柱穴は不明である。

出土遺物は少なく、1の甕形土器底部と2の器台を図示するだけである。整形はへら状工具によっている。



III-346 115号・116号・128号住居址

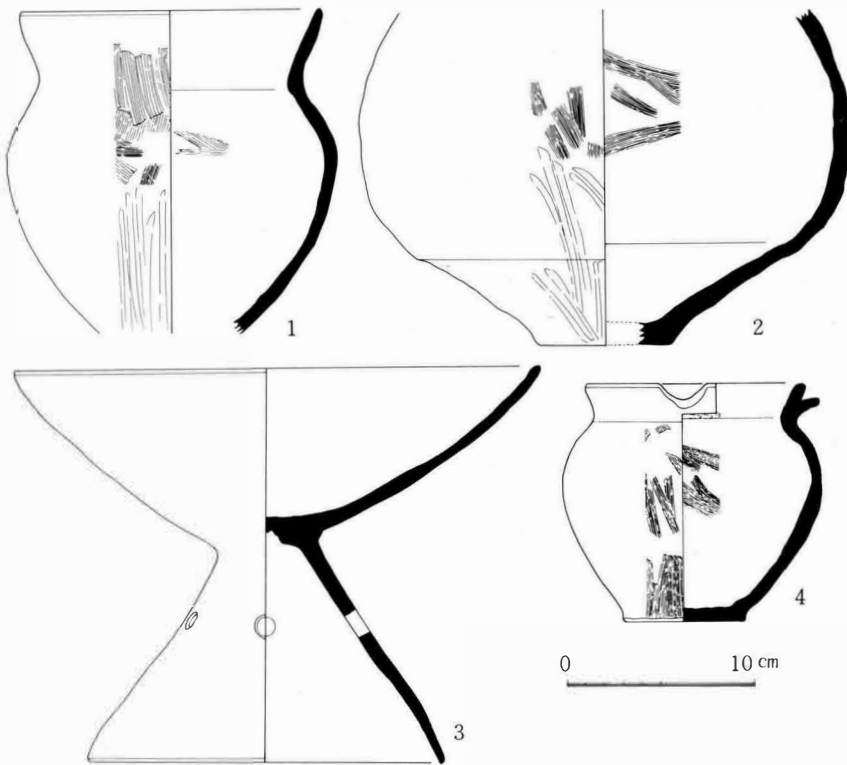
116号住居址(III-182) 115号住居址を切って構築されたもので、形態は方形を呈すると思われる。規模は東西6.1mを測る。主軸方向はN39°Wになる。壁高は北壁14cm・西壁17cm・東壁16cmになる。床面上に炭化物が散在し、東北寄りに炉址と思われる焼土が認められた。主柱穴は6個と考えられる。

遺物は各期のものが混在する。1は大きく外開する壺形土器である。2～4は器台形土器であろう。



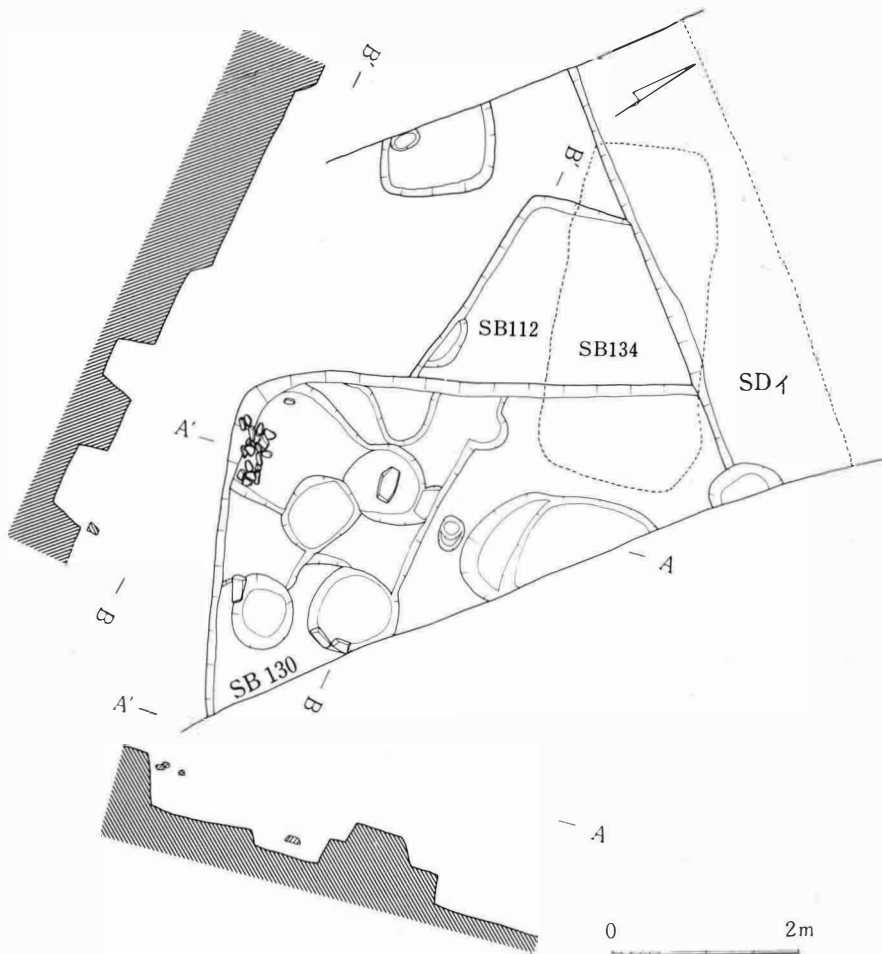
III-347 124号住居址

124号住居址(III-217) 123号住居址の西側上面に検出され、西半分は調査区外にある。133号住居址より古く、122号・123号住居址より新しい。形態は隅丸方形を呈すると思われるが明確ではない。規模は不明である。壁高は北壁4cm・南壁13cmを測る。床面は全体に貼床が認められるが、東側は123号住居址の上面に貼床をしておりやや軟弱で黒褐色を呈し、壁も良好ではなかった。南側の床面は122号住居址とほぼ同一レベルにあって、双方の壁高及び境界線も明確につかむことは出来なかった。



III-348 124号住居址出土土器

床面近くからまとも出土した。1の甕形土器は、長胴形で、口縁部はゆるく外開する。体部外面上半はハケナデ、下半は縦方向にヘラミガキが施される。2は体部下半が下膨れ状になり、大きく屈曲し底部に至る。屈曲部は内外とも稜をなす。整形は、ハケナデのち縦のヘラミガキになる。3は大形の高杯形土器で、床面直上から逆位で出土した。杯部は素直に内弯する浅鉢形を呈し、脚部はやや内弯気味に外開し、裾部に至って立ち上がる。4孔がうがたれる。黄褐色を呈し、内外面ともヘラミガキされる。4は片口の甕形土器である。

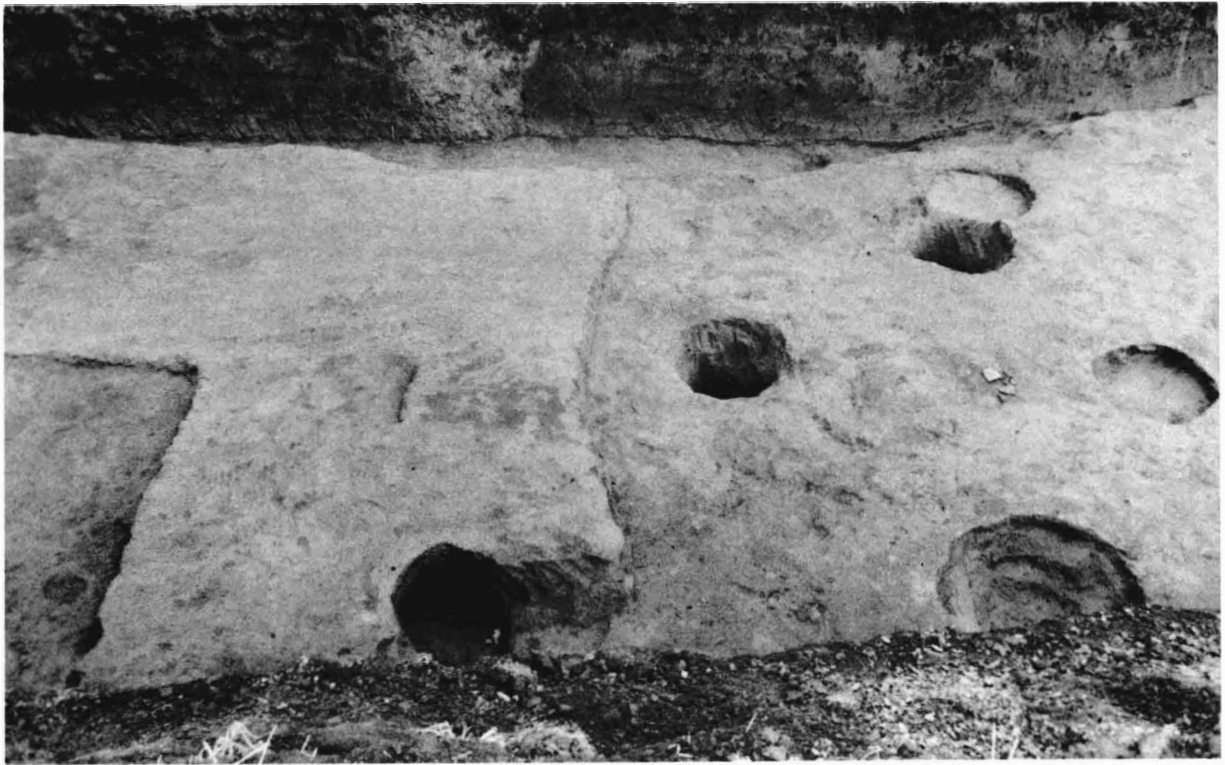


III-349 130号住居址実測図

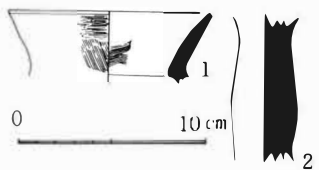
111号・112号住居址の下、134号住居址の上面から検出され、東側は調査区外にある。形態は隅丸方形を呈すと思われる。規模は不明である。壁高は西壁で18 cmを測るが、南壁は凹凸著しい。床面は土壌や落ち込みが多く状態は悪い。土壌は礫を伴う深いもので中から炭化物や獣骨片が出土している。西南隅に楕円礫が集中している。

遺物は111号・112号住居址と混在して出土する。甕形土器・器台形土器片（脚部に凹線文が施され、2円孔がうがたれたもの）が出土している。





III-350 143号(イ・ロ)住居址



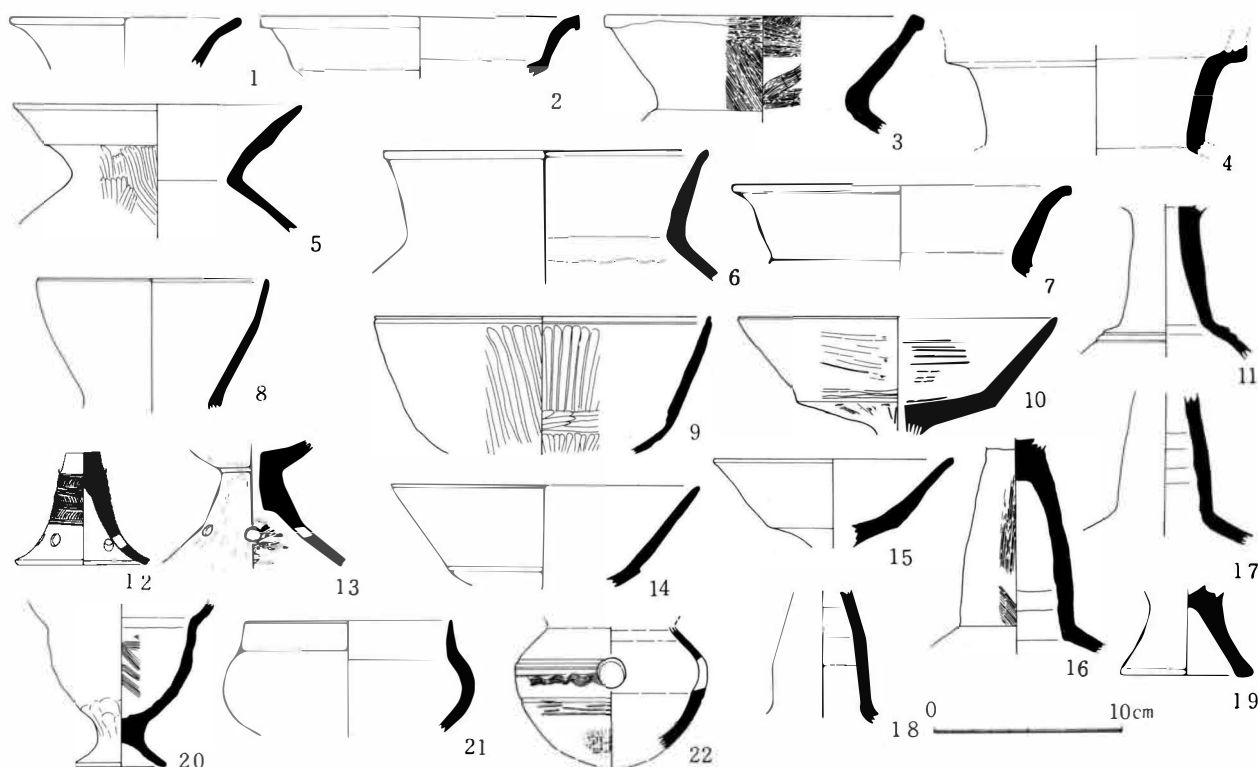
143号住居址は、その検出形態からイ・ロに分けた。殆どが調査区外にあり、形態・規模等は不明である。イ・ロの床面はほぼ同一レベルにある。出土遺物は142号住居址のものと同在するが、甕(1)・坏・高坏(2)小形丸底形土器を抽出することができる。

III-351 143号住居址出土土器



III-352 149号・150号住居址

150号住居址(III-286) 形態は隅丸方形を呈し、南北規模は5.1mを測る。床面は上・下二面あり、南壁では下面まで15cmで、上面との差は6cmである。上面では、火災を受け垂木と思われる炭化材が壁際から中央に向け散在する。床面は平坦で貼床である。炉は下面から径30cmの地床炉を確認した。出土遺物の時代差は認められなく、上面から器台・甕・坏形土器片が、下面から円孔器台・甕・高坏・坏・甑形土器片が出土している。



III-353 その他遺構出土土器

1 (SD 10)。2 (SB 12)。3 (SK 11)。4 (SB 12)。5 (SB 90)。6 (C区)。7 (SB 27)。8 (SB 108)。9・10・16・19 (A区)。11 (SB 111)。12 (SB 20) 裾部赤色塗彩、横位2孔三対。13 (SB 136) 4孔。14 (表採)。15 (C区)。17・18 (SB 207)。20 (M区)。21 (SK 11)。22 (SK 22)。

22は須恵器で他は土師器である。

90号住居址 (III-383) 形態は隅丸方形を呈するものと思われ、主軸はほぼ南北方向になり、南・北壁の一部を残すだけである。深さは検出面から北壁 35 cm・南北が 14 cmである。床面は 87号住居址により切られるが、平坦で軟弱である。柱穴は周辺のピットになると思われるが確定できない。カマド等の施設も認められなかった。

出土遺物は甕形土器片が出土したにすぎない。

5号溝址 (III-336) 53号住居址内にあり、西側先端は北に曲がり終結する。上面の幅は 80 cm前後で、東に広がる。

出土遺物には頸部がくの字形に屈曲する該期の甕形土器片が出土しているほか箱清水期のものが多い。

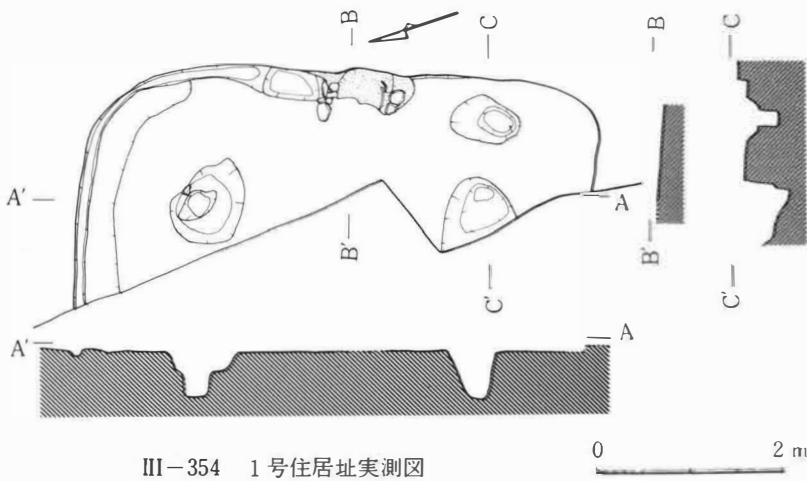
12号溝址 (III-382) 80号・81号住居址床面から検出した遺構で、幅 65 cm・深さ 15 cm程のU字溝で、東西方向の流路になり、底面は西が低くなる。出土遺物は、甕、坏形土器片が数点出土したにすぎない。

土壌 10 (III-3) 25号住居址の上面より確認され、径 50 cm・深さ 42 cmの円形を呈する。

土壌 11 (III-14) 土壌 10と同じ検出面から確認され、長軸 65 cm・深さ 30 cm程の不整円形を呈する。

(矢口 栄子)

## 第6節 古墳時代後半の遺構と遺物

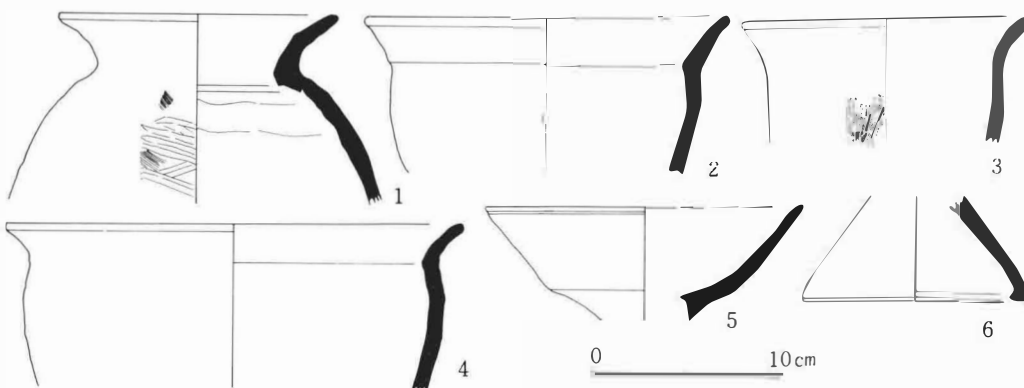


III-354 1号住居址実測図

調査では東側の一部を検出したにすぎない。形態は隅丸方形を呈し、南北軸5.35mを測るが、主軸は不明である。掘り込みは北壁5cm・東壁10cmで、南壁は床面レベルになる。支柱穴は2個あり4本方形配列になるであろう。カマドは石芯製のもので東壁中央に構築される。北壁及び東壁下には、幅15cm・深さ8cmの周溝がめぐる。床面上面に炭化物層があった。



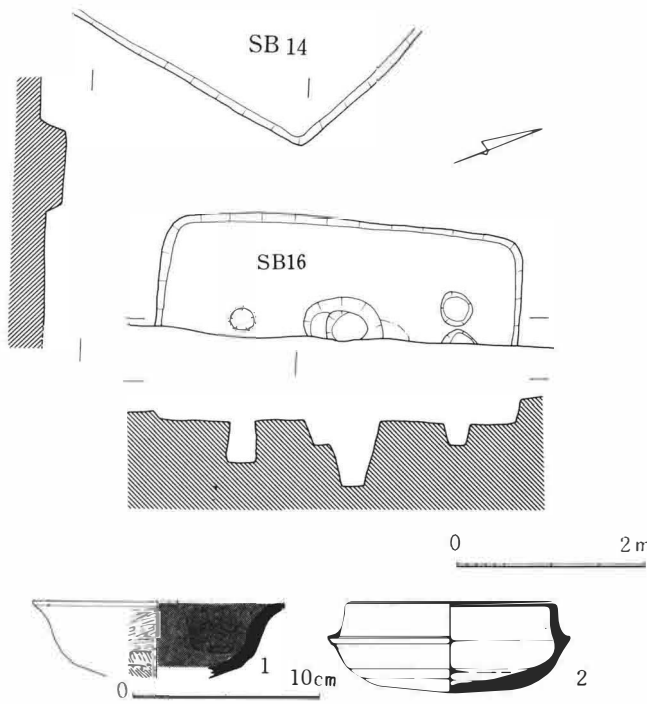
III-355 1号住居址



III-356 1号住居址出土土器

出土量はそれ程多くなく、カマド付近から出土している。器種に甕(1~4)・高坏(5・6)・坏形土器がある。東南壁下より鉄鎌(III-403-10)が出土した。

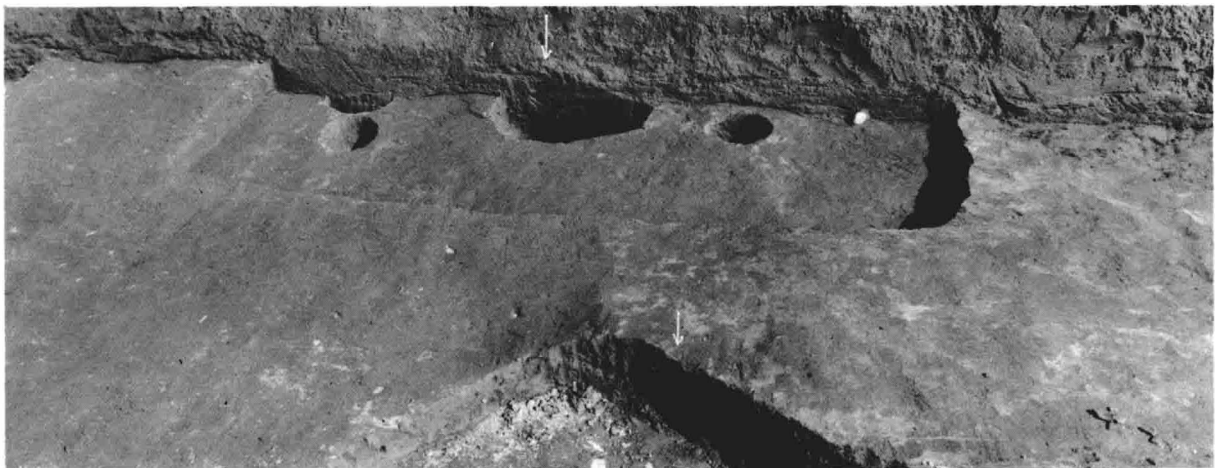




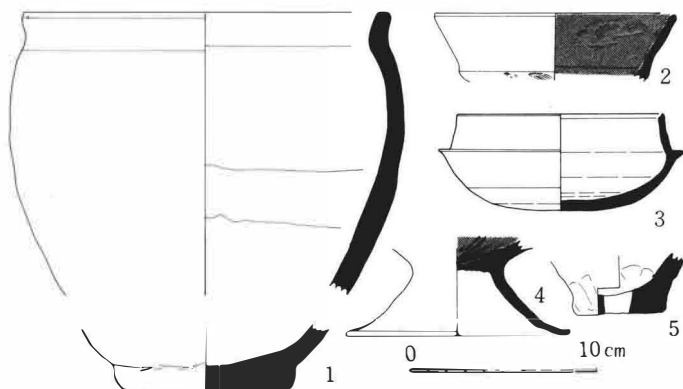
III-357 16号住居址実測図・出土土器

27号住居址の上部にある遺構で、調査では西側半分を検出したにすぎない。形態は方形を呈し、南北間の規模は3.84mである。掘り込みは北壁で23cm・南壁で8cm・西壁で18cmを測る。床面は平坦で軟弱である。支柱穴は2個確認され、4個方形配列になるものと思われる。カマド等は確認できなかった。

出土遺物は多くないが、弥生時代後期のものが多く含まれる。1は高坏坏部で、体部が内弯気味に立ち上がった後、口縁部は外反する。整形はヘラミガキによっており、内面は黒色処理される。2は須恵器の蓋坏の身部で、体部が内弯気味に立ち上がり、口縁部はいくぶん内傾する。蓋受部は内弯気味に仕上げている。底部は丸味を有し、回転ヘラケズリ痕を残す。青灰色を呈し、焼成は良い。このほか砥石(III-171-17)が出土している。



III-358 16号住居址

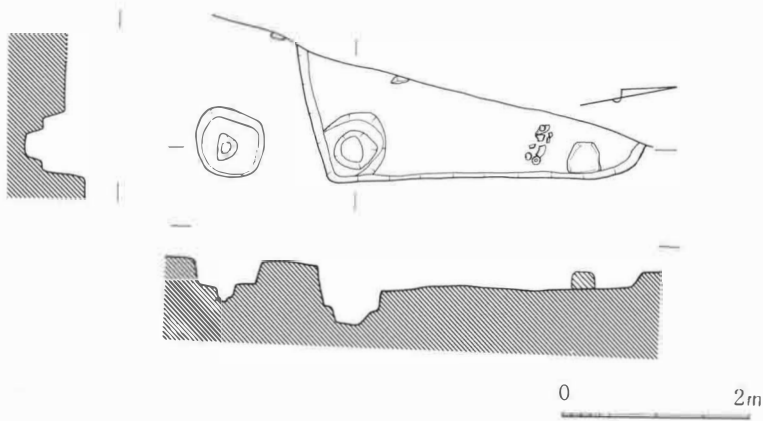


III-359 19号(1), 30号(2~3)住居址出土土器

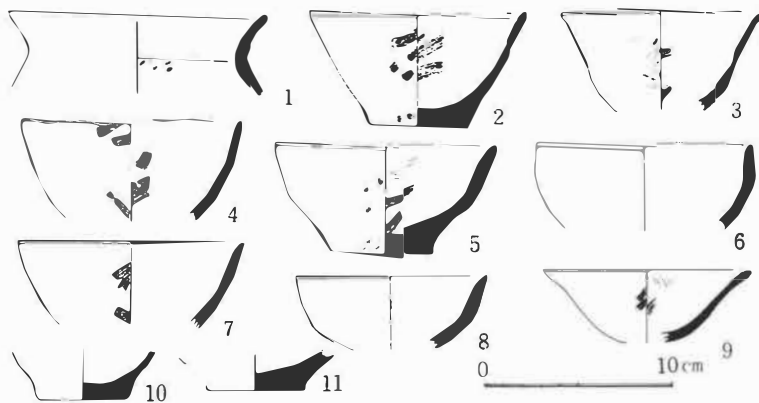
19号住居址出土土器(1) 遺物の出土量は少なく甕形土器片だけである。最大径が肩部にあり、頸部からくの字形に屈開する口縁部になる。外面ヘラミガキ整形される。

30号住居址出土土器(2~5) 2は土師器の坏形土器で、3は須恵器蓋坏の身部、4は高坏形土器、5は甑である。2・4の内面は黒色処理される。

19号住居址 21号・25号住居址の上部にあった遺構であるが、重機によって破壊され、貼床だけ確認できた。  
28号住居址(III-3) この住居址も上部にあったもので、カマド(焼土)と貼床を確認したが、規模等は不明。  
30号住居址(III-3) 31・34号住居址の上部にあった住居址で、やはり貼床だけを確認したにすぎない。



31号・33号・35号・36号・47号住居址と重複し、これら一群の中で一番新しい。調査では南東部のみの検出である。形態は方形を呈し、南北間の規模は3.4mである。掘り込みは北壁と南壁20cm・東壁18cmを測る。床面はほぼ平坦である。カマドは確認できなかった。南東隅に中段を有するピットがあるが柱穴であるかどうか疑わしい。東壁北寄りに長軸30cm程の角礫があった。



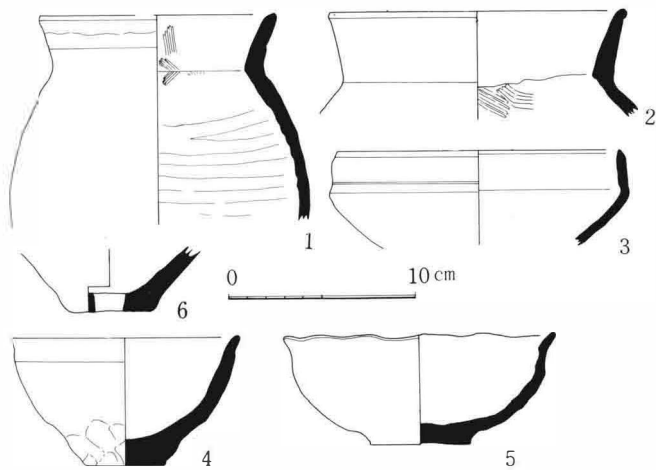
III-360 32号住居址実測図・出土土器

該期の土器量は多い。1は甕形土器で、頸部はくの字形に屈する。内外面ともハケナデ整形される。2～8・10は坏形土器で、2・5の体部は直線的に立ち上がるのにたいし、3・9は口縁部が外反し、8は端部が薄くなり短かく外反する。いずれも内外面はヘラナデまたはヘラミガキ整形である。11は甕、9は高坏形土器である。



III-361 33号・35号～37号・42号・60号住居址実測図

33号住居址 32号住居址に南側を切られるが、他の住居址を切って構築される。また西側は調査対象区外に延びるため、北壁と東壁の一部を検出したにすぎない。形態は方形を呈するものと思われる。規模は不明で、北壁の掘り込みは20cm・東壁22cmになる。床面は平坦で軟弱である。柱穴・カマド等の施設は確認できなかった。



III-362 28号(1~4)・33号(5)住居址出土土器

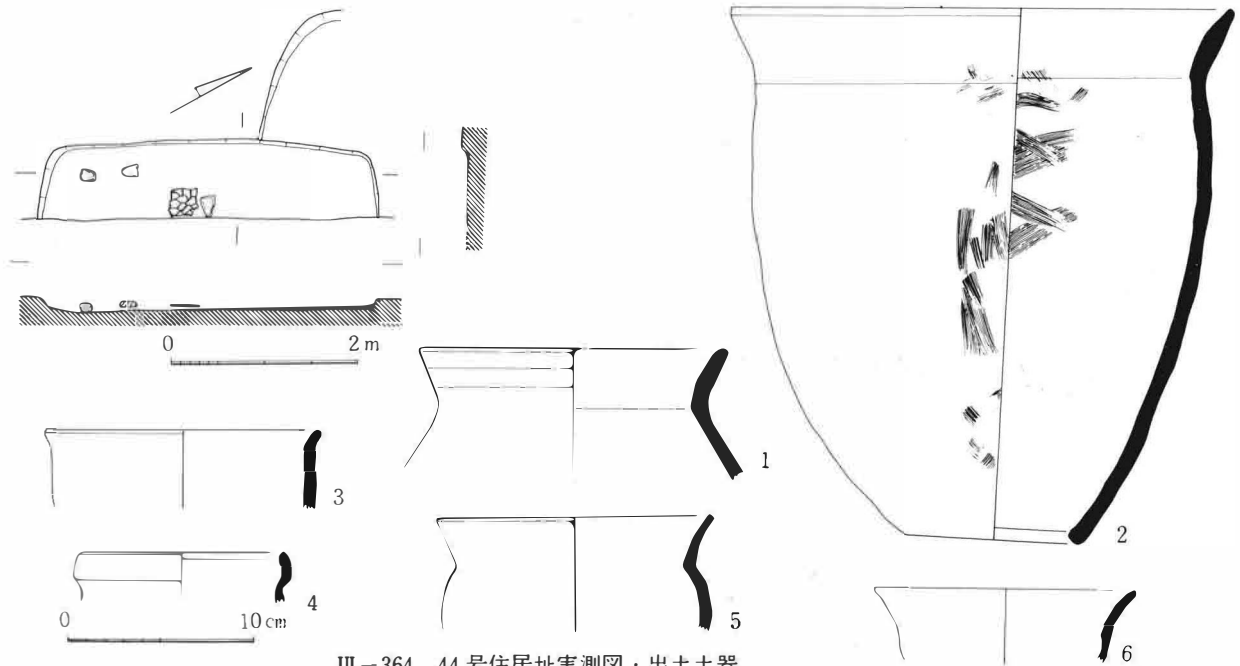
28号住居址出土土器(1~4) 1・2は甕形土器で、1の口縁部はくの字形に頸部から立ち上がり、体部中位に最大径がある。2の口縁部はゆるく立ち上がる。整形はハケナデのちナデ調整される。3は坏形土器で、体部中位に稜をもち、口縁部は内弯しながら立ち上がる。4は浅鉢形になる。

33号住居址出土土器(5・6) 図示した坏形土器(5)・甑形土器(6)のほか、甕・坏・高坏土器片が出土しているが、少量である。5は手捏土器に近く、器体は一定していない。外面はハケナデ整形で、内面はヨコナデ整形である。



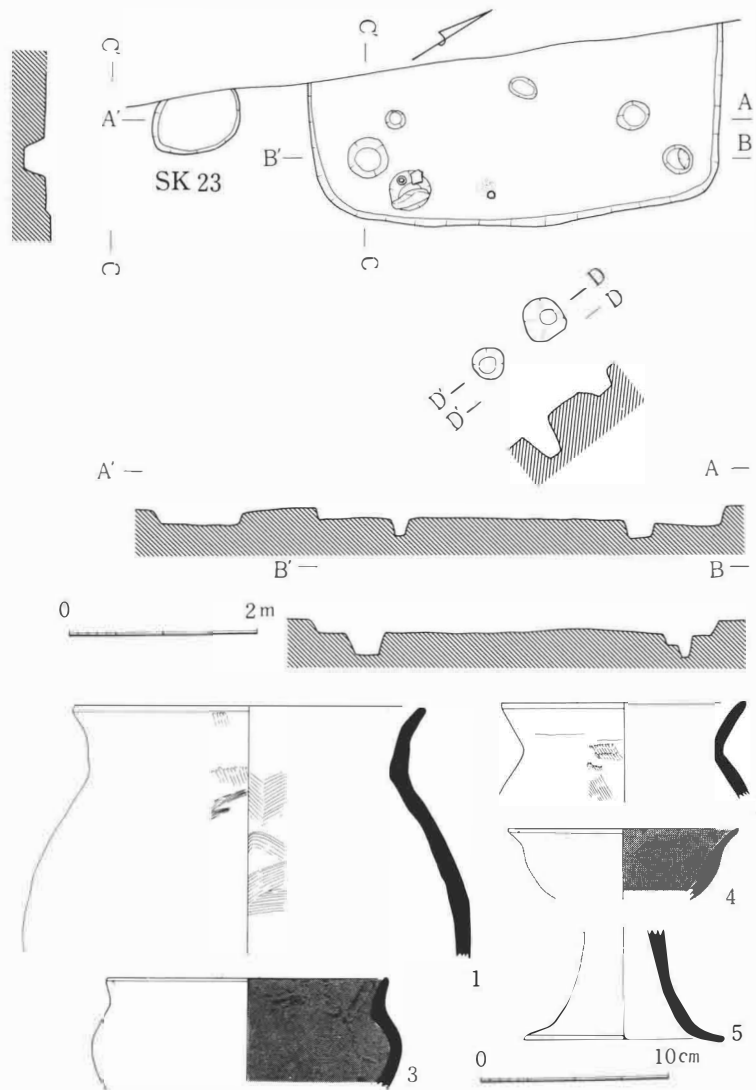
III-363 44号住居址

43号住居址を切って構築されており、本址の東側は未調査区に延びる。形態は方形を呈するものと思われ、南北軸はN 28°Eをさす。規模は南北3.62 mを測る。壁高は北壁10 cm・南壁10 cm・西壁10 cmである。床面は黒褐色土層になり、ところどころに貼床が残存していた。柱穴・カマド等は認められない。



III-364 44号住居址実測図・出土土器

出土土器は43号住居址と混在していた。甕形土器(1・5)は図示したもの他に有段口縁をもつものもある。2・3は甑形土器で、2はほぼ床面上に押つぶされた形で出土した完形品である。4は短頸の壺形土器、6は丸底形態の坏形土器である。図示出来なかったが、脚部が筒形を呈し、坏部に段をもたない高坏形土器、須恵器の蓋形土器が出土している。また床面上から生粘土が焼けた塊りや鹿の歯が出土した。



III-365 45号住居址実測図・出土土器

46号住居址に切られて検出され、西側半分以上は調査区外にある。南北軸4.38mを測り、方形を呈するものと思われる。主軸はN32°Eである。壁高は北壁17cm・南壁15cm・東壁14cmを測る。床面は貼床で東壁付近に焼土が認められた。主柱穴は2個確認されている。東南隅のピット上面に15×40cmの河原石が置いてあり中から土器片が出土した。なお東壁外の北側のピットからは小形砥石が出土している。

出土土器はあまり多くなく、甕形土器は口縁が緩く立上り外面タテヘラミガキされるもの(1)と口縁がくの字に近く外開し、外面ハケナデ整形されるもの(2)とある。坏形土器は椀形で内面黒色処理され、外面は横ヘラミガキされるもの(3)、内面は黒色処理され、外面は横ハケナデされるもの(4)が出土している。他に高坏土器脚部がある(5)。緩かに底部に向い裾部で鋭く外開するものである。また須恵器蓋坏の身部片が出土したが図示出来るものではなかった。

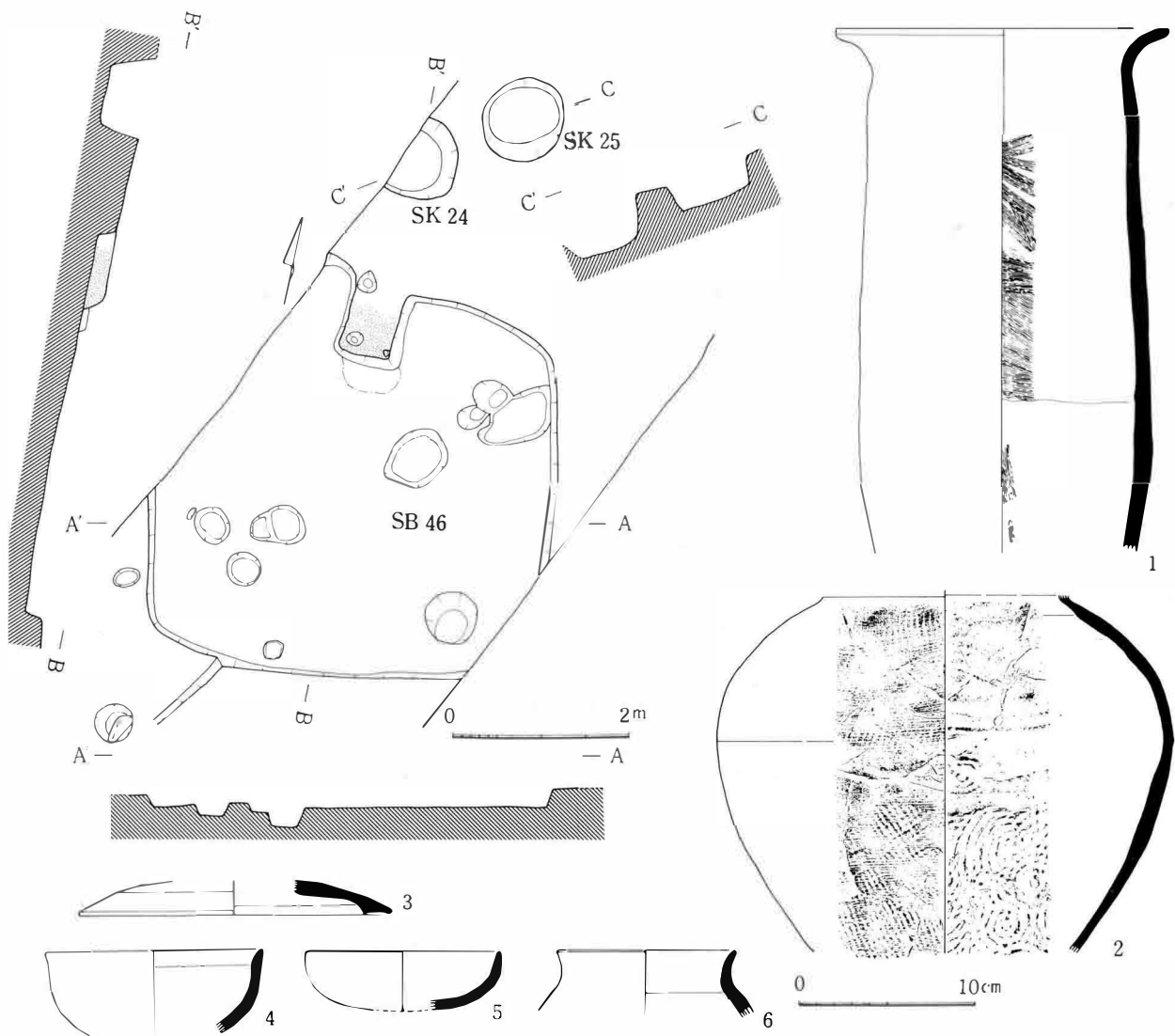


III-366 45号住居址





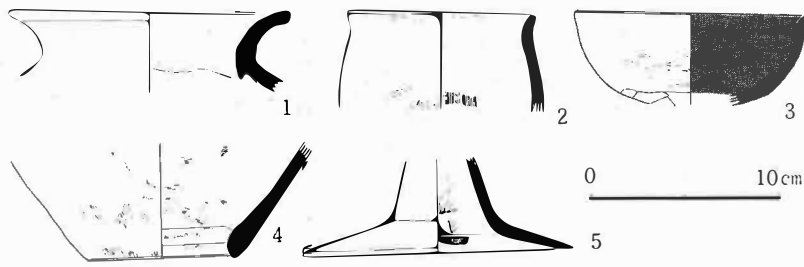
III-367 46号住居址



III-368 46号住居址実測図・出土土器

方形を呈し、南北4.35 m・東西4.6 mを測り、主軸方向はN 6°Wである。壁高は北壁18 cm・南壁21 cm・東壁14 cm・西壁12 cmになる。支柱穴は対角線上にあり3個確認された。北壁中央にカマドが構築されている。

出土土器は、カマドから長胴の甕形土器(1)が出土し、須恵器甕形土器(2)、同じく蓋形土器(3)、坏形土器(4、5)、小形甕形土器(6)が出土している。

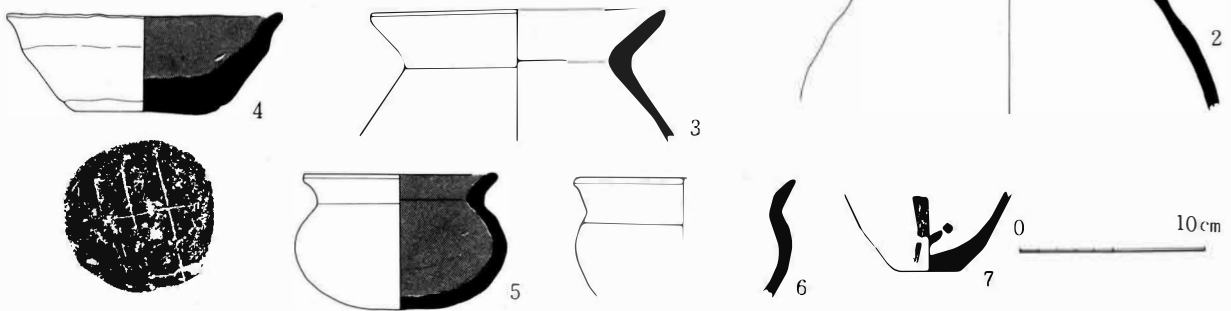
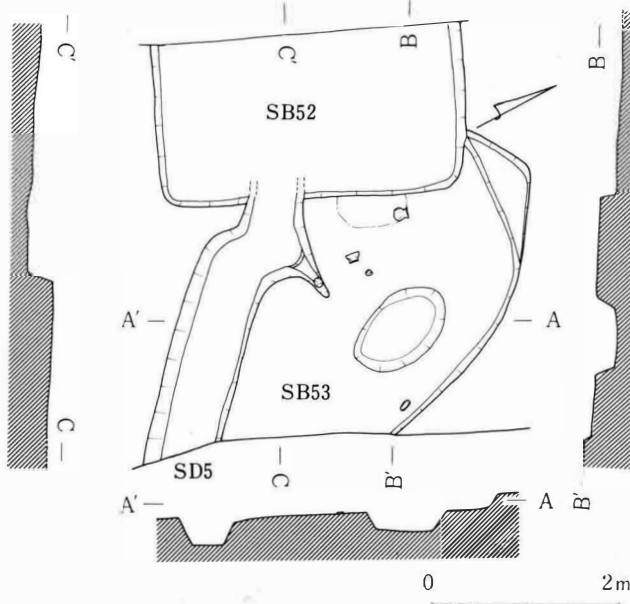


III-369 50号住居址出土土器

50号住居址 (III-336)

出土量は少なく、1の甕形土器は覆土上面より出土のものである。3は内面黒色処理された坏形土器、4は甑形土器、5は高坏形土器の脚部で、裾部が鋭く広く外開するものである。他に滑石製紡錘車 (III-403-2) が出土している。

4号溝址に切られ、52号住居址の南から検出された。西半分は調査区外にある。南北軸2.73mを測り、隅丸方形を呈するものと思われる。主軸はN 24°Eになる。壁高は北壁31cm・南壁25cm・東壁27cmの深い住居址である。床面は黒褐色土層を貼床をしたものでほぼ平坦であるが、北側が高く緩斜面になる。



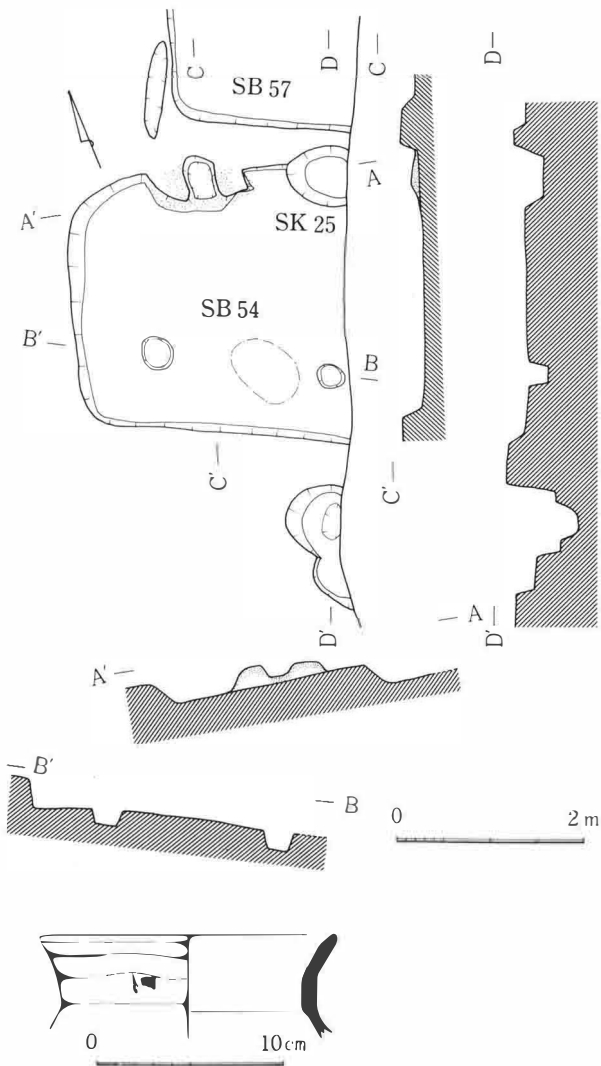
III-370 53号住居址実測図・出土土器

5号溝址に切られ、52号住居址の上面に構築されたもので、形態・規模は不明確である。床面も軟弱で炭化物が多く散在し、土器出土面でそれとわかる程度で一部僅かに貼床が残存していた。

出土土器は少なく、甕形土器(1~3)は口縁部がくの字形に外開し、体部はやや丸味を帯びるもの、坏形土器(4~6)の4は内面黒色処理され、底部外面にヘラ刻文がある。タテヘラナデ整形され、肉厚で成形痕が顕著である。5は内面黒色処理された椀形のものでヘラミガキが施される。6は赤茶褐色を呈し口縁内外面はヨコナデ、体部内面はヨコヘラミガキされる。7は甕形土器の底部である。



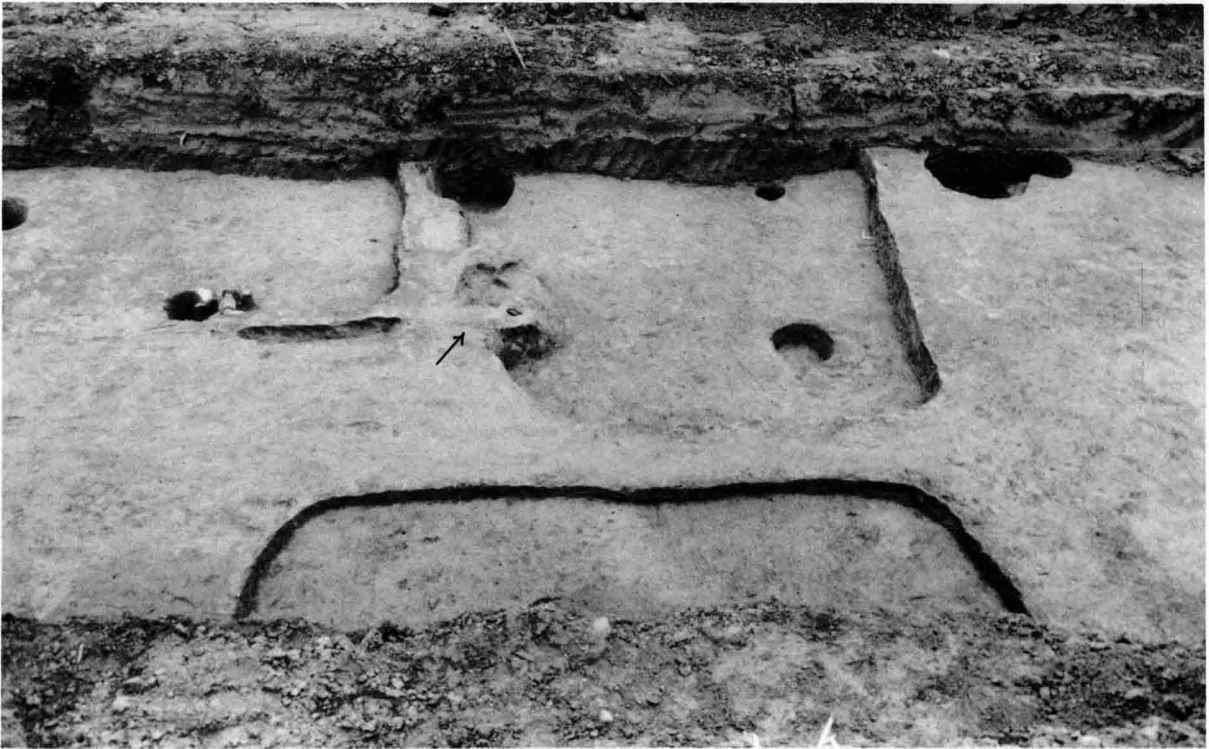
III-371 52号・53号住居址



III-372 54号住居址実測図・出土土器

55号住居址の東側に検出され、8号溝址の上面に構築されたものである。東壁が調査区外にある他はほぼ全容を知り得る。隅丸方形を呈すると思われ、南北2.8m・東西約2.9mを測り、主軸はN 20°Eをとる。壁高は北壁14cm・南壁22cm・西壁19cmになる。床面は貼床で炭化物が散在していた。支柱穴は2個確認され、対角線上に配置されているものと思われる。カマドは北壁中央やや西寄りに構築されているが、残存状態はあまり良好ではなく、50×110cmの範囲に焼土が認められ、左右両袖部と焚口が残存している。

出土土器は、8号溝址や他の遺構のものが混在していた。本住居址のものは少なく、甕形土器と坏形土器が出土しているだけである。甕形土器はカマド付近から出土したもので、口縁が緩く外開し、外面はヨコハケナデ整形され成形痕が顕著にみられる。弥生時代中期の土器片の出土量が多く認められ、近くに当時の遺構がある可能性がある。



III-373 57号・54号・55号住居址

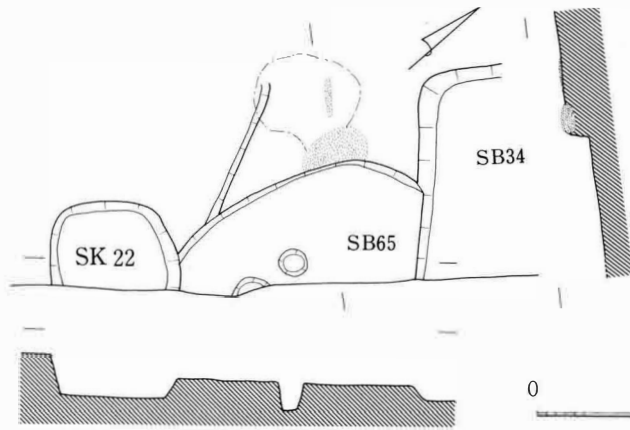
55号住居址 (III-245) 56号住居址を切って構築されたもので、西側のほとんどが調査区外にある。56号住居址と重複しているため、形態は不明確であるが方形を呈するものと思われる。主軸はおよそN 30°Eになる。壁高は南壁 11 cm・東壁 6 cmを測る。床面は黒褐色土層にあり、貼床が認められるが状態はあまり良くない。

出土土器は非常に少量で、甕・坏形土器片が数点出土したが、図示出来るものはなかった。



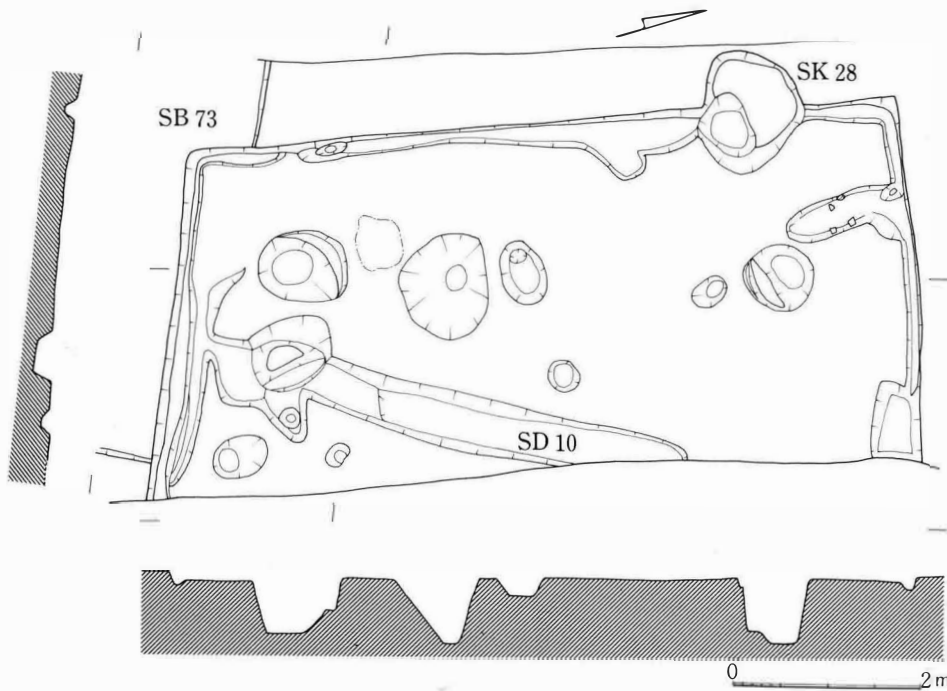
III-374 55号・56号・57号・58号住居址





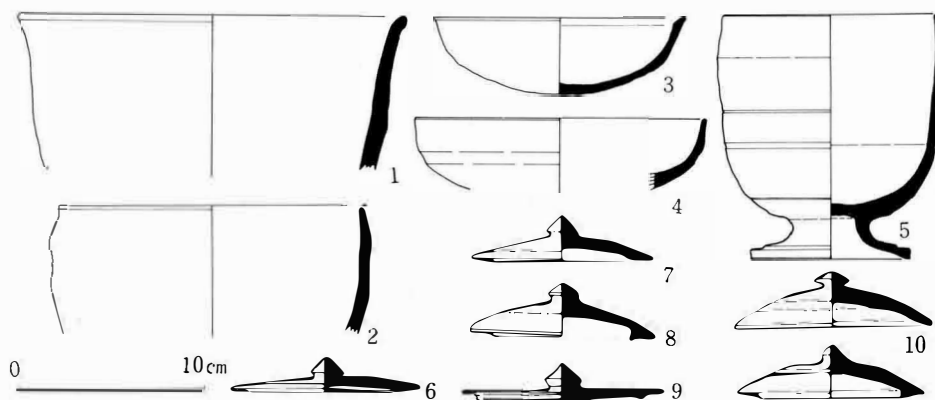
III-375 65号住居址実測図

34号・64号住居址の上面に検出されたもので、灰黄褐色砂質土層に貼床をして構築されている。西北部のみ残存している状態で、形態・規模等共に不明である。壁高は西壁で20cmを測る。西壁上面から堅い焼土が認められたが上部の遺構のものである。支柱穴・カマド等は不明である。出土土器は少なく、甕・高坏・坏形土器の破片が出土しているが、図上復元できるものはなかった。



III-376 75号住居址実測図・出土土器

73号住居址を切って北側に検出され、東側は調査区外にある。形態は方形を呈するものと思われ、規模は南北で8.0mを測る。壁高は北壁9cm・南壁10cm・西壁3cmを測り、ほとんど床面が近くまで削平されており浅い。床面は貼床が堅緻で灰黄褐色砂質土層上に構築されたものである。支柱穴は3個確認された。北壁と西壁下に周溝がめぐらされており、幅20~25cm、深さ約8cmを測る。南壁に沿った凹みから東北へ向かって幅60cm、深さ18cmの10号溝址が走っている。

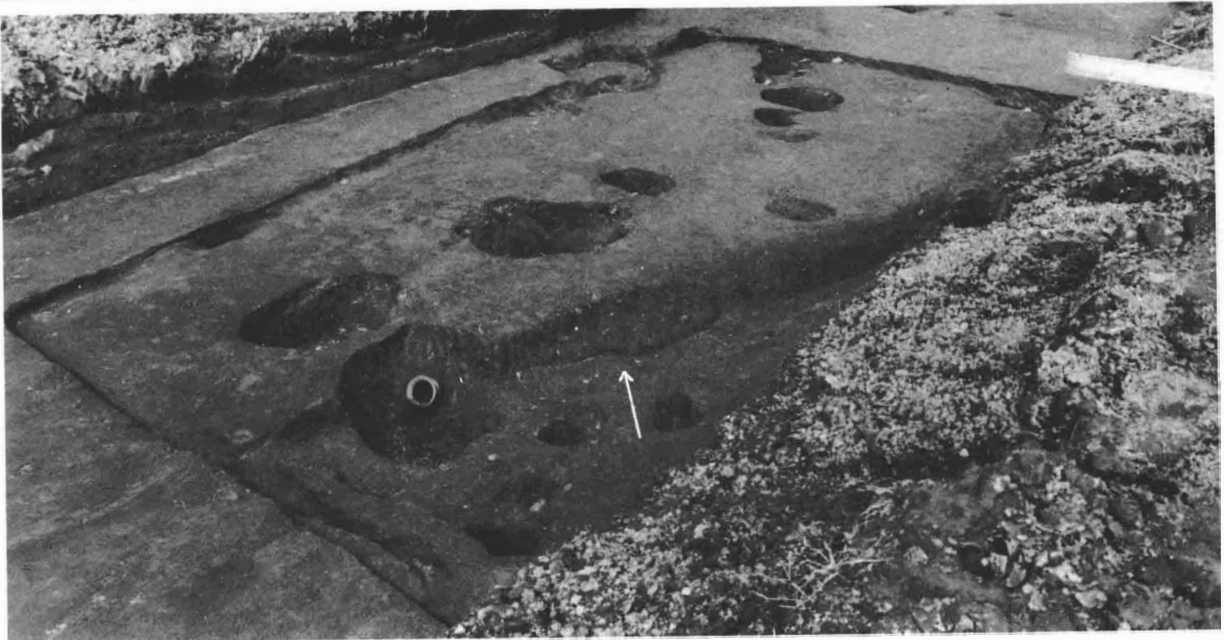
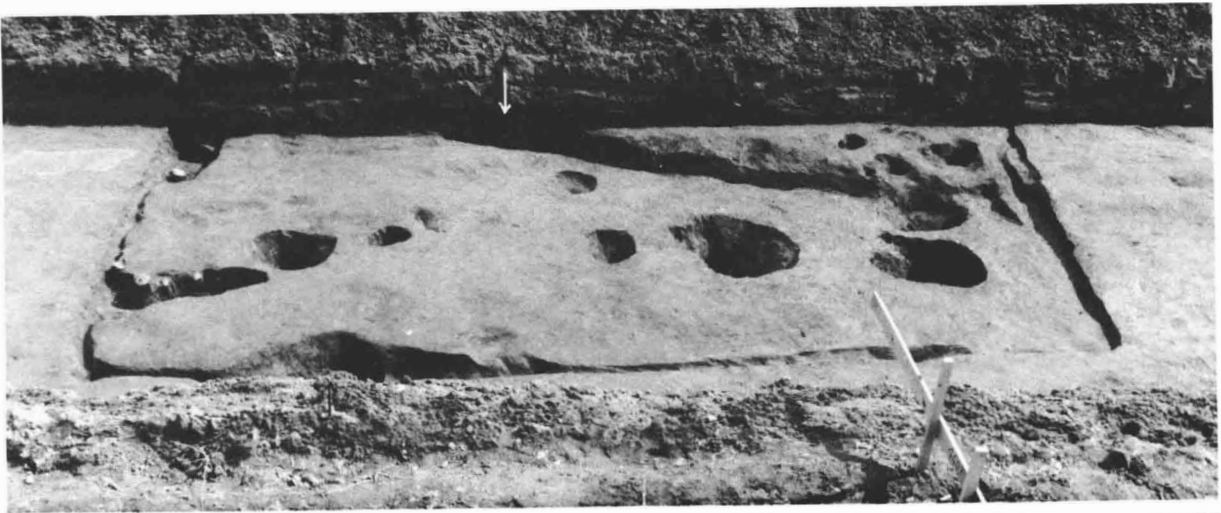


出土土器は弥生時代の土器が多く混在したが、本址に伴う特記すべきものに須恵器の蓋形土器(6~11)があり、うち3

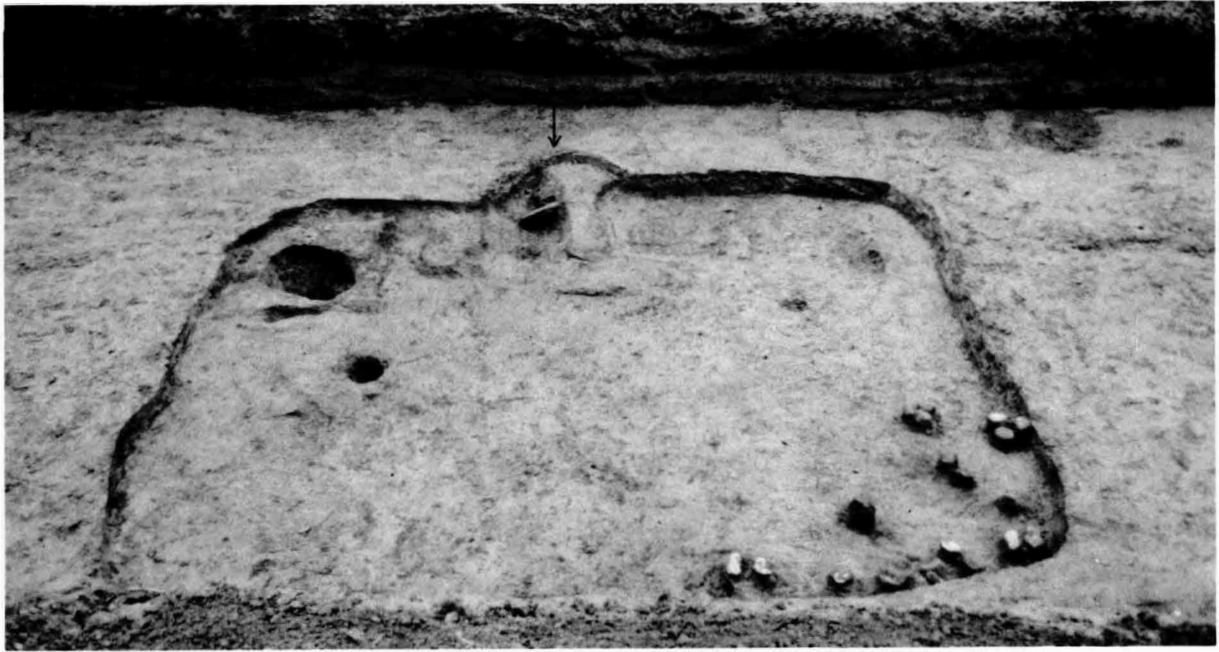
個はピットに落ち込む形で出土し、他の3枚もほとんど北側床面直上から出土している。いずれも外面回転ヘラケズリされる。4は須恵器の坏形土器で灰青色を呈しロクロ成形される。5は須恵器の台付カップ形土器で床面から出土してほぼ完形である。灰青色を呈しロクロ成形される。1~3は土師器で、1は甑形土器、2・3は坏形土器である。このほか砥石(III-171-19)と釘状の鉄製品の小片が出土している。



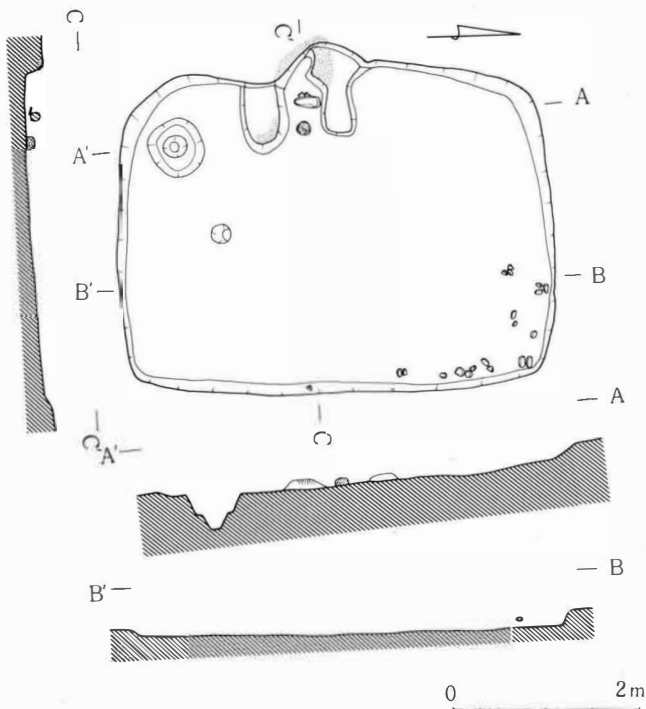
III-377 65号住居址



III-378 75号住居址

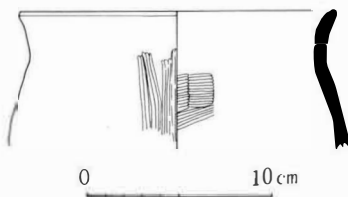


III-379 78号住居址



今回の調査の中では珍しく単独でそれも全面を検出された住居址である。重機により削平されてはいたが残存状態はほぼ良好である。形態は隅丸長方形を呈し、規模は主軸方向が3.3 mで、南北軸4.55 mを測る。主軸はN 2°Wでほぼ真西を向く。壁高は北壁15 cm・南壁7 cm・東壁7 cm・西壁17 cmを測り、北壁と西壁が深く残存状態は良好である。床面は貼床され、ほぼ平坦である。支柱穴は1個確認された。カマドは西壁中央やや南寄りに構築されているが袖部の残存状態はあまり良くない。残存部の規模は約1.2×0.8 mを測り、粘土製両袖形のものと思われる。焼土はあまり多く認められなかったが、焚口中央の粘土塊は硬く焼けており、支柱に使用されたものと思われる。北東隅の床面近くに約10 cmの大きさの小礫があった。

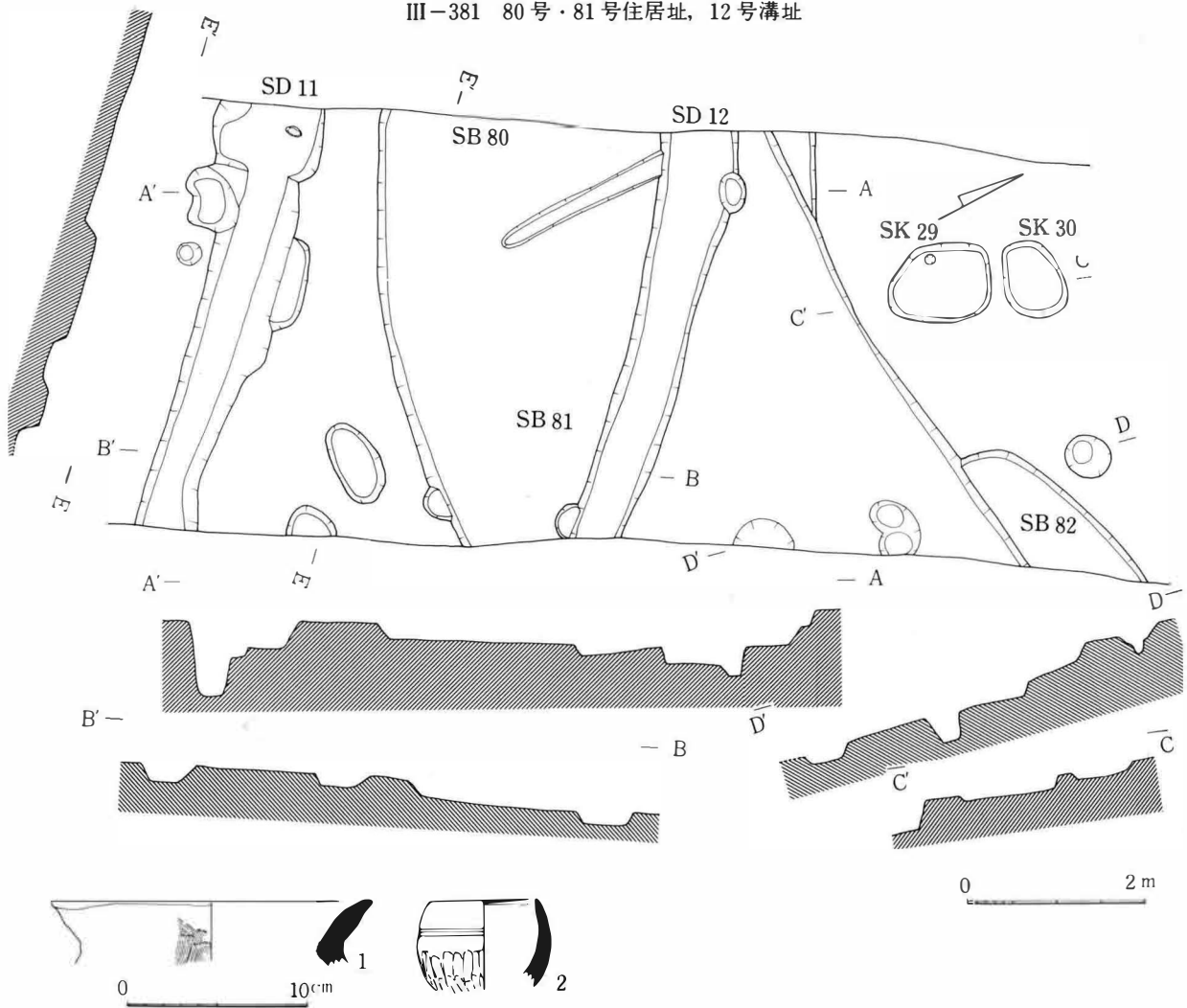
出土土器は少なく、カマドから長胴形の甕形土器が出土したほか、覆土より甑形土器片が出土している。混入物品と思われる土製品に土偶(III-165-3)がある。



III-380 78号住居址実測図・出土土器



III-381 80号・81号住居址, 12号溝址



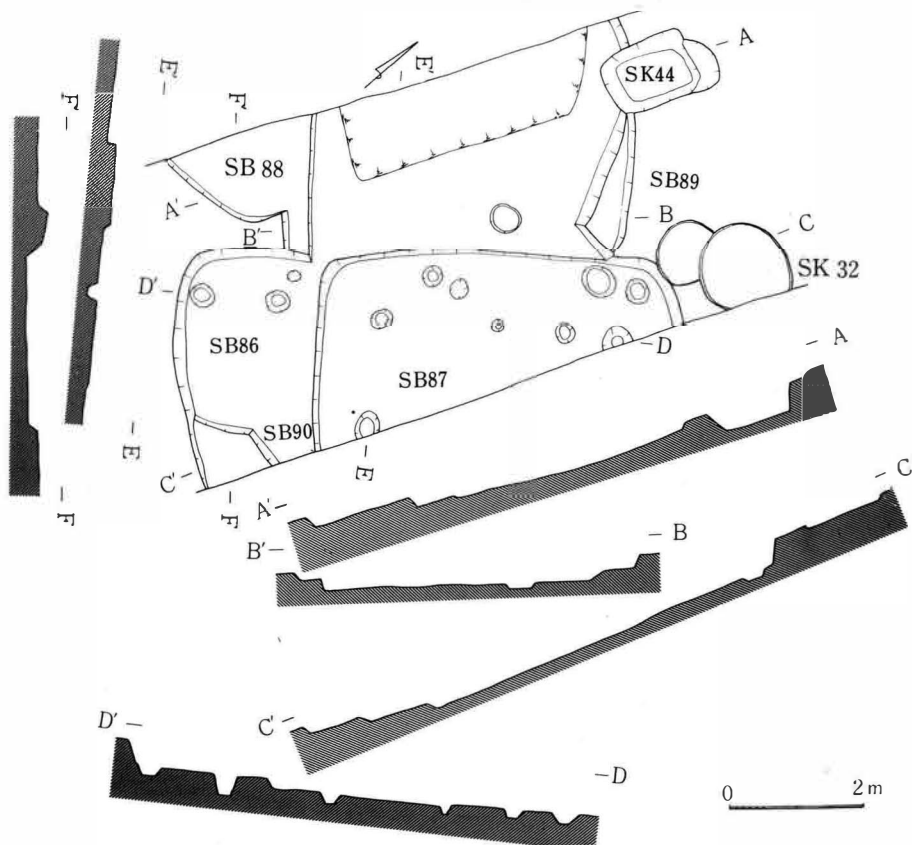
III-382 80号・81号住居址, 11号・12号溝址実測図, 80号住居址出土土器

80号住居址 81号住居址と重複し、12号溝址に切られて検出されていた。一部に貼床があったが不明瞭で検出が困難であった。形態は方形を呈するものと思われるが、規模は南北で4.8 mを測るものの他は不明である。壁高は北壁22 cm・南壁20 cmを測る。床面は81号住居址とほぼ同一レベルにある。

出土土器は非常に少なく、甕形土器口縁部(1)と小形坏形土器片(2)だけで、2は口縁部に凹みめぐらせた椀形のものである。

81号住居址 80号住居址と同じく12号溝址に切られて検出されたが、床面は軟弱で不鮮明であった。形態はほぼ方形を呈すると思われ、南北約5 mを測る。壁高は北壁26 cm・南壁4 cmで南壁は非常に浅かった。西側に巾約20 cm・深さ約10 cmの溝が走り、周溝と思われる。炭化物や黒褐色土層混じりの黄色土層が覆土で、地山直上に獣骨粉が僅かに検出された。出土土器に甕・坏・高坏形土器片と横刃石器(III-169-20)がある。





III-383 86号~90号住居址実測図

87号住居址 複雑に重複しあった遺構中の一遺構である。形態は方形を呈するものと思われ、規模は南北軸約5.45mを測る。壁高は北壁32cm・西壁13cm・南壁14cmを測るが東壁は調査区外にあり不明である。床面は貼床が部分的に認められた。

出土土器は、覆土から他の遺構のものと混在して多く出土したが、本址に伴うものは少なく、甕・高坏・坏形土器片及び、須恵器甕、小形甕形土器片が出土しているが図示出来るものはなかった。

88号住居址 後世の攪乱及び、住居址の殆どが調査区外にあるため全容はつかめない。形態は方形を呈するものと思われるが、規模は不明である。残存する壁高は南壁で約20cmを測る。床面は軟弱である。

出土土器は坏・甕形土器片だけである。

83号住居址 (III-267) 84・85号住居址の上面から検出されたもので、西側は調査区外にある。形態は方形を呈するものと思われ、規模は南北軸で約4.0mを測る。壁高は北壁16cm・南壁17cm・東壁18cmで、北壁は85号住居址と共有するものである。床面は貼床がわずかに認められたが、84・85号住居址と重複する。床面は平坦で軟弱である。

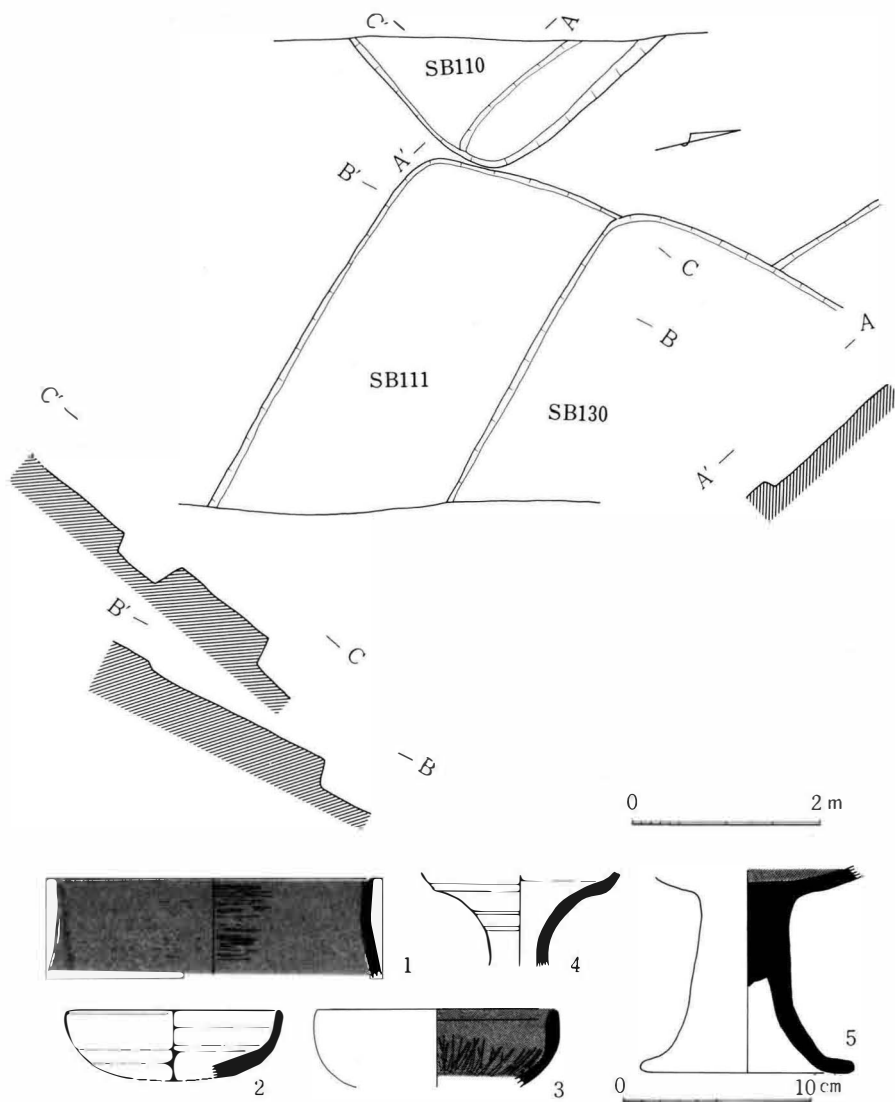
出土土器は、重複する遺構の弥生時代中期のものが多く混在し、本址に伴うものは少ないが、甕・高坏形土器片が出土している。

98号住居址 (III-293) 91号住居址の北側上面にわずかに検出されたものであるが、一部壁面が残存していた他は不明である。壁高は北壁13cmを測るが、床面は不良である。

出土土器は甕形土器片が少量出土しただけである。

106号住居址 (III-440) 104・105号住居址に切られて検出されたもので、隅丸方形を呈すると思われる。規模は不明である。壁高は北壁20cm・東壁12cmを測る。

出土土器は少なく、甕・高坏形土器片が出土している。



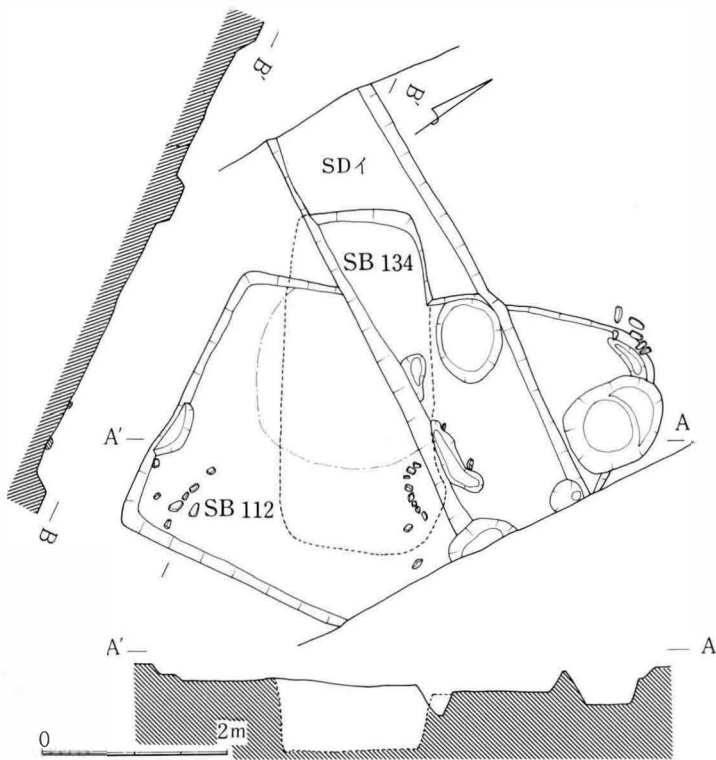
111号住居址 130号住居址の上面から検出された。形態は方形を呈するものと思われるが規模は不明である。床面は黒褐色土層に貼床をしてあり、130号住居址上面に至っては軟弱となっている。壁高は南壁で約8cmと浅いものである。

出土土器は少ない。1は内外面共に黒色処理された鉢形土器、2は須恵器坏形土器でロクロ成形される。3は内面黒色処理され、暗文がある。4は須恵器甕形土器の頸部である。5は高坏形土器で坏部内面は黒色処理される。他に覆土から鹿の歯と土製紡錘車片、土師器甕形土器片、須恵器細口壺片が出土している。

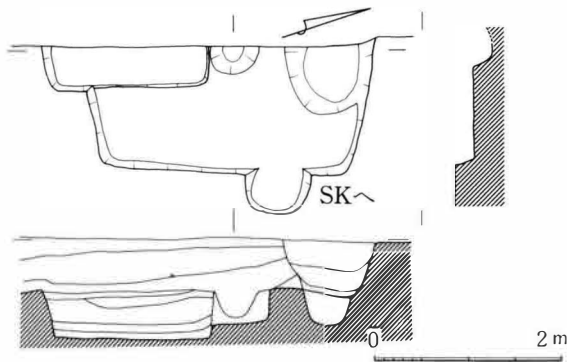
III-384 110号・111号住居址実測図・111号住居址出土土器



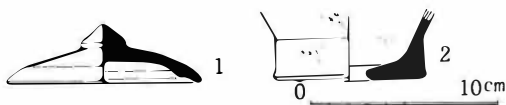
III-385 112号住居址, イ号溝址



III-386 112号住居址, イ号溝址実測図



III-387 119号住居址実測図・出土土器



III-388 125号住居址出土土器

出土土器は105号住居址のものと同様に混在しており、本址に伴うものは非常に少ない。甕形土器片の他、図示出来るものは2点にすぎない。いずれも須恵器で、1は蓋坏の身部で、短く内屈する口縁部、体部の立ち上りが低く浅く蓋受部が張り出した形になっている。2は蓋形土器で宝珠形のつまみを有するものと思われ、体部は膨らみをもつ。

112号住居址 134号住居址・イ号溝址上面に構築される。形態は長方形を呈するものと思われ、規模は長軸4.5m・短軸3.15mを測る。壁高は北壁19cm・南壁14cm・東壁2cm・西壁15cmになる。床面は黒褐色土層に貼床がしてあるが、状態はあまり良くない。覆土上面より炭化物が混入し、床面にも散布していた。覆土及び床面からは小礫が散在して検出された。

出土土器は、弥生時代中期のものが多く、本址に伴うものは甕・坏・高坏形土器が確認できたにすぎない。

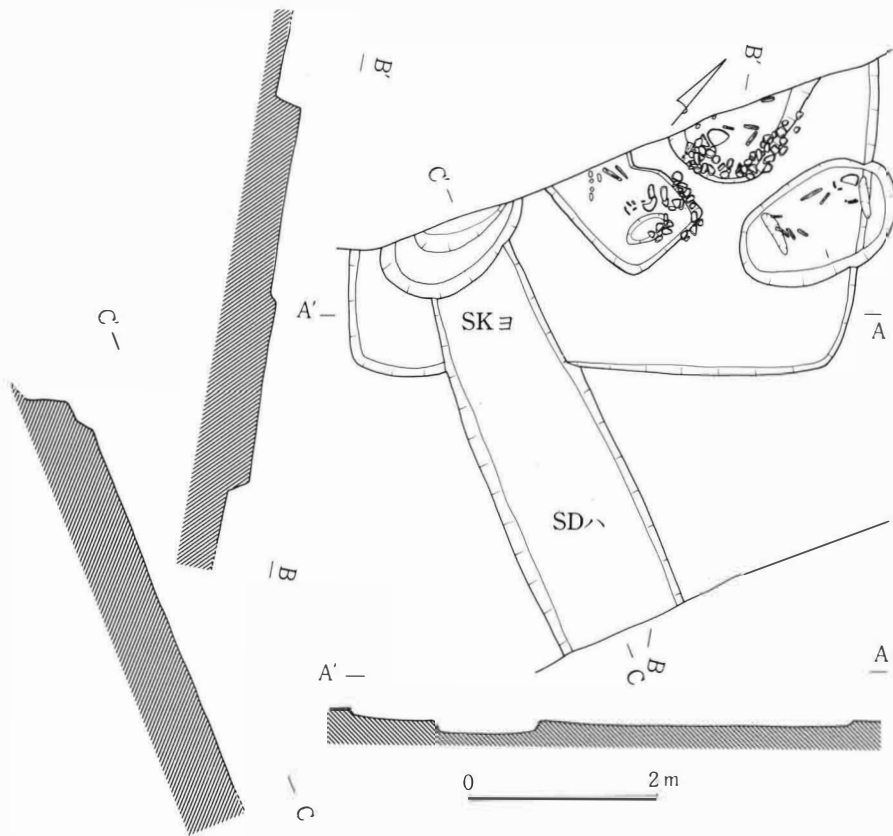
### 119号住居址

118号住居址の北側に検出され、西半分は調査区外にある。形態は方形を呈するものと思われ、規模は南北で約3mを測る小形のものである。壁高は北壁11cm・南壁24cm・東壁21cmを測るが、北壁は床面に土壌があり不明確である。床面は貼床してあるが、均一でなく凹凸している。南の道路路際に南北約3.9mの小堅穴状遺構が重複して検出された。

出土土器は、前記の小堅穴遺構に伴うと思われる弥生時代中期のものも多く混在して出土した。本址に伴うものとしては、甕・甑形土器(2)、須恵器蓋形土器(1)がある。このほか土錘(III-403-1)が出土している。

### 125号住居址 (III-440)

105号住居址に切られており、ほとんど床面が露呈し、壁面は削平されてしまっていた。貼床の広がり範囲から形態は隅丸方形を呈するものと思われるが、規模等は不明である。



III-389 126号住居址、ハ号溝址、土壙ヨ実測図

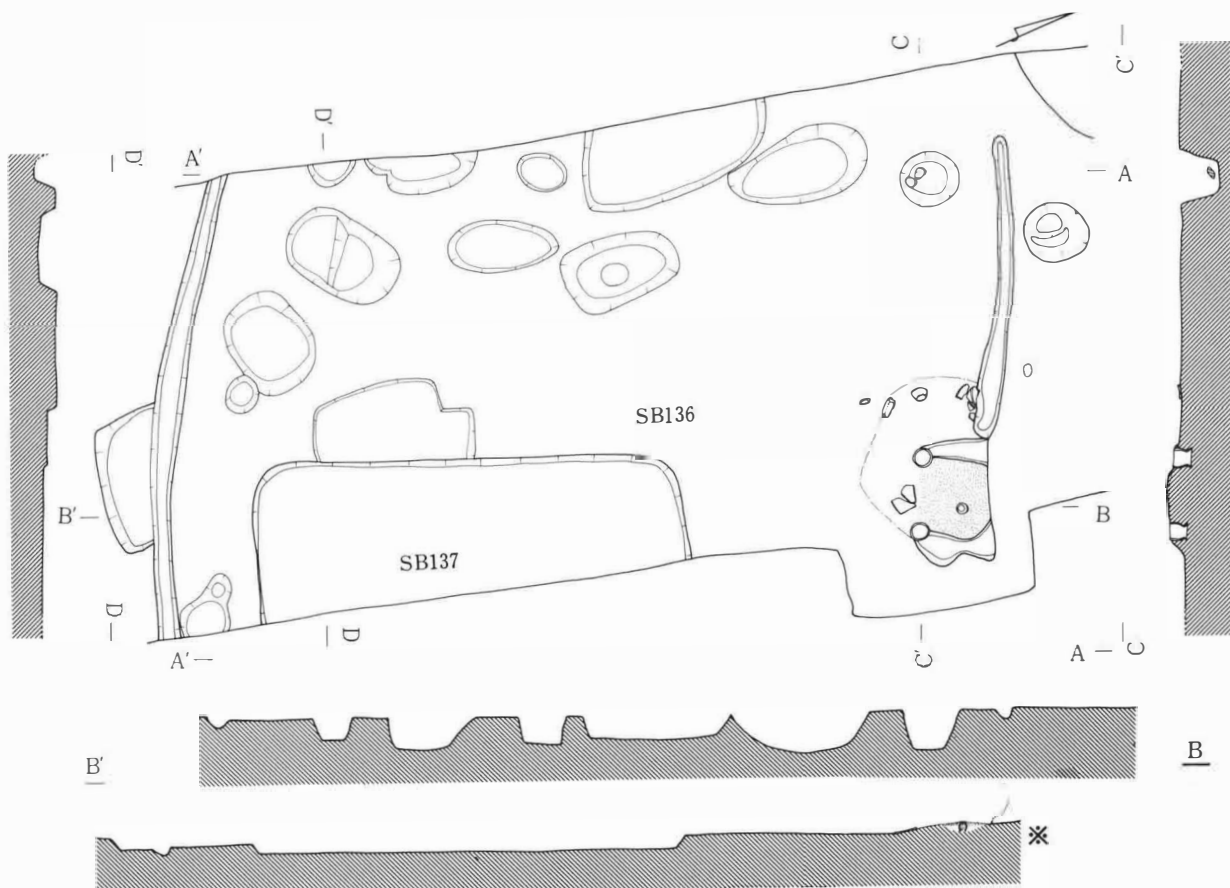
126号住居址 J地区南端、第I墓壙群上面に位置する。ハ号溝址、土壙ヨに切られるが、形態は一辺約5.3mの方形と呈するものと思われる。壁高は5cm～10cmと比較的浅い。土壙ヨ 長径約1.7mの楕円形を呈すると思われ、深さは65cmを測る。ハ号溝址 北西-南東方向で幅1.0～1.5m、壁高は27cmを測る。1号～3号木棺墓は126号住居址床面を検出する際に確認された。126号住居址の床面は軟弱であり、平面レベルでは、浮石が認められなかったことから、貼床の存在が考えられる。



III-390 126号住居址、第I墓壙群

136号住居址 第III墓壙群の北側に位置する。主軸方向はN 24°Eである。形態は一辺約9mの(隅丸)方形を呈すると思われる。重機による削平のため検出時に黄色粘土ブロック混じりの貼床面が露呈し、住居址の存在が明らかとなった。北側と南側に東西方向に周溝がある。主柱穴は西側調査区壁寄りに並ぶ3個が検出された。床面に小堅穴状のピットが多数確認されたが性格は不明。北壁中央にカマドが構築されており、遺物の大部分はカマド周辺から出土した。なお137号住居址(III-392)は一辺4.5m程の方形住居形態と思われる。





I 焼土塊

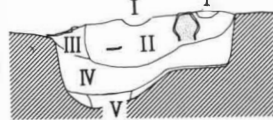
II 暗赤褐色砂質土層

III 暗褐色粘土層

IV 暗黒色粘土層

V 明黄褐色粘質層

2 m

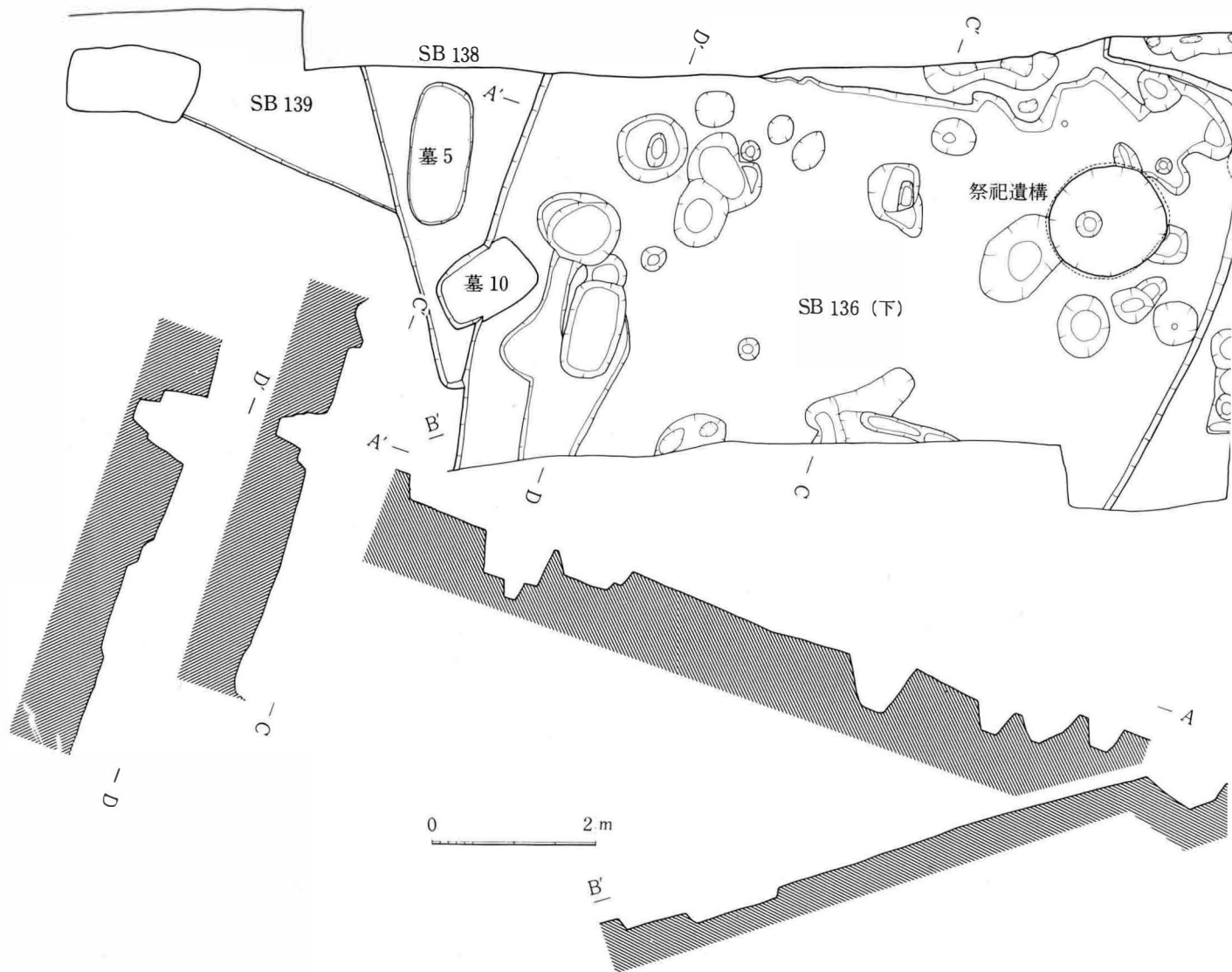


カマド 両裾部に土器を逆位に埋設されたもので、支脚として小形の甕形土器が用いられる。この施設間は、土壙状になる。I～IIIがカマド土層と推定する。

III-391 136号(上)住居址実測図



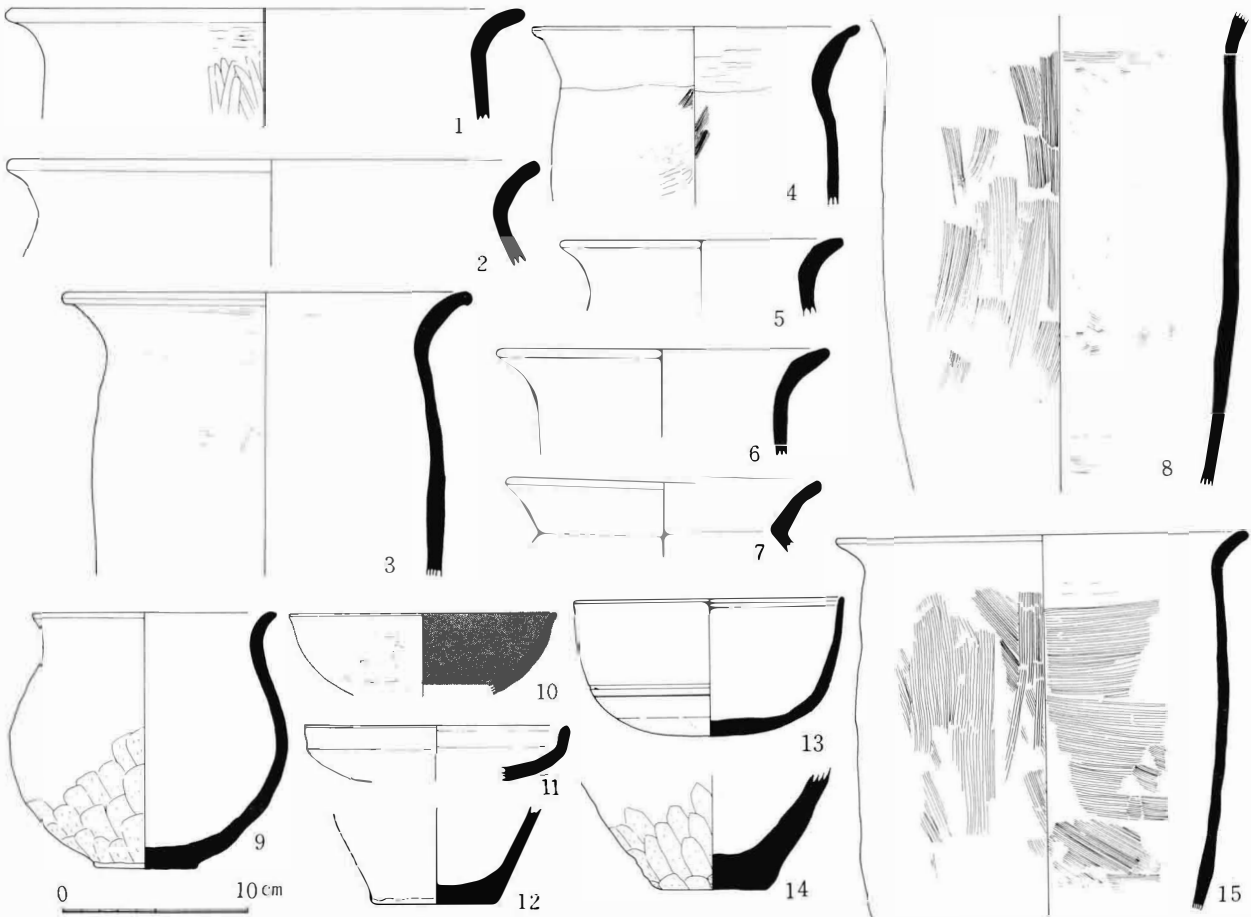
III-392 136号(上)・137号住居址



III-393 136号(下)住居址実測図



III-394 136号(下)住居址



III-395 136号住居址出土土器

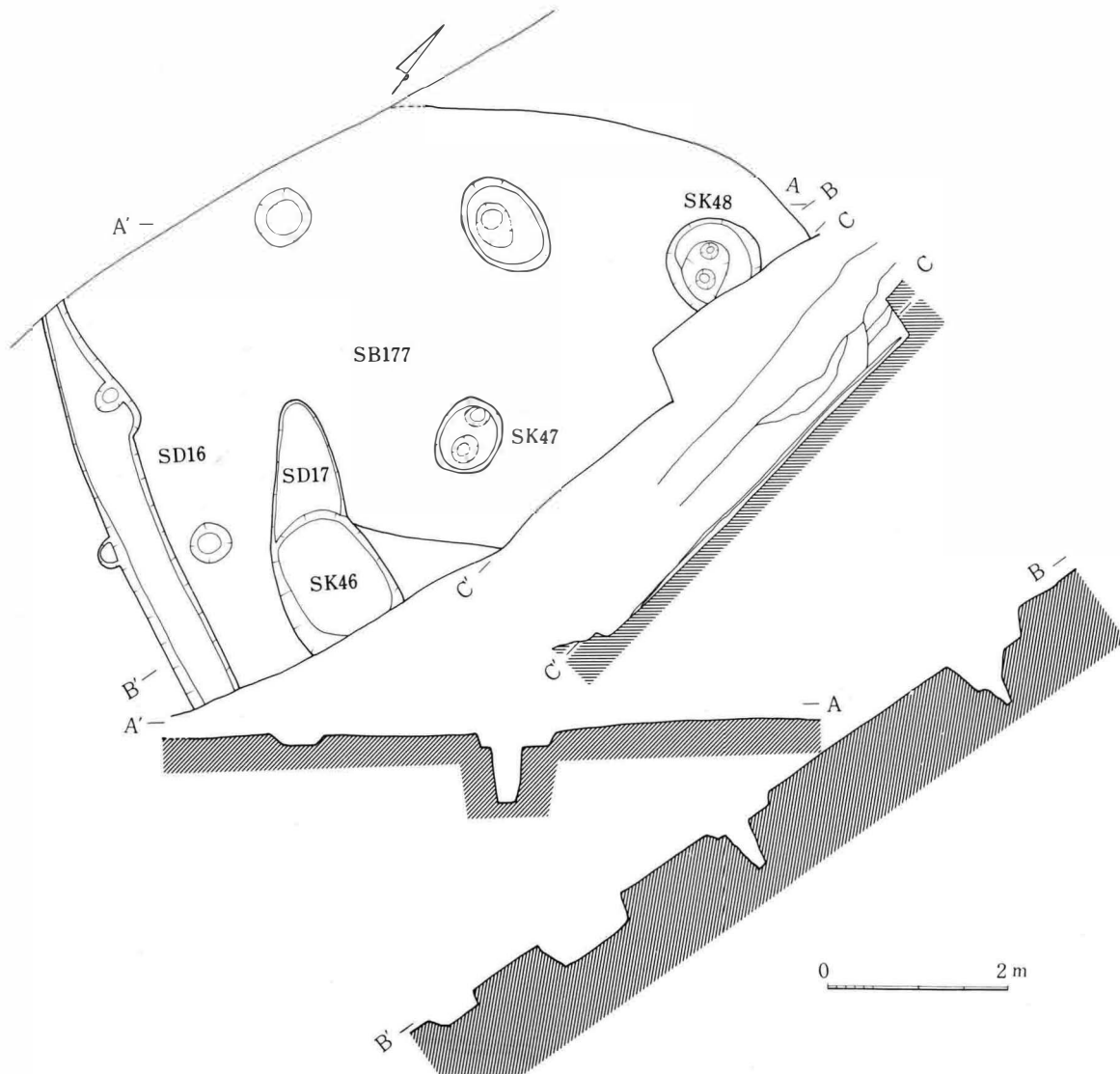
本址下の状況を把握するため、約10cm程の貼床を除き、貼床下を検出した。小堅穴状のピットや溝状遺構が多数確認されたが、時期的に明確なものは、北寄りの円形祭祀遺構のみで、弥生中期前半の土器が出土している(III-148)。その他墓址的な遺構は検出できなかったが、不整形の土壌の中には墓壇になる可能性のあるものもある。なお、祭祀遺構と18号木棺墓の中間に、2号井戸址が存在した。形態は袋状で、上面部径65cm、袋状部最大径110cmである。深さ135cm付近で最小径35cmとなり湧水をみる。



III-396 136号住居址カマド

このカマドは、両袖形で、袖部先端に土師器甕を逆位に埋設し粘土で固めてつくられる(III-395-8・15)。袖間には焼土とともに小形甕(III-395-9)が同じように逆位に設置され内部には焼土がつまっていた。支脚と考えられる。

出土土器は甕形土器を中心として大部分がカマド周辺の床面から出土したものである。3はへら状工具によるナデ、15がハケによるナデによってそれぞれ仕上げられる。1～3の甕は口縁部ヨコナデ、体部へラケズリを基本とし、2の内面はへらミガキされる。10・11の土師器坏は内外面ともにへらミガキされる。13の須恵器は碗形で体部下半に沈線がめぐる。底部はナデ整形である。

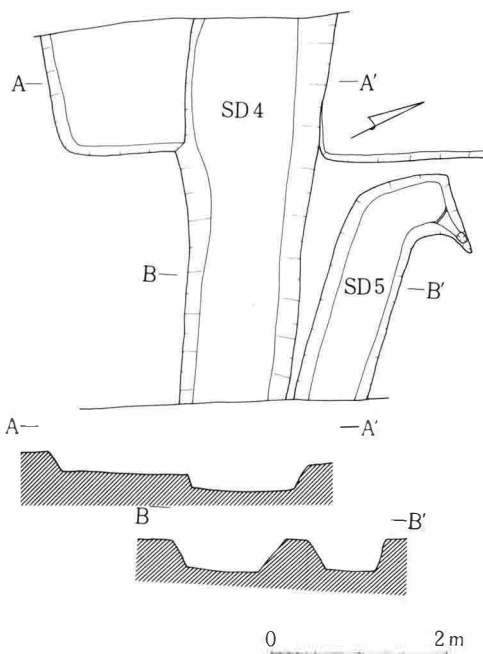


III-397 177号住居址実測図





III-398 177号住居址，土壙47・48



III-399 4号溝址

177号住居址 F区、16号溝址北側に位置する。重機による削平を受け、貼床面が直接露呈し、壁高等は不明である。形態は短辺約4.75 m（南北方向）の隅丸長方形を呈すると思われる。土壙47・48等は土層観察などから、本址覆土を掘り込んでおり、本址に伴うものではない。よって主柱穴の個数、配列等は不明である。

以下、該期に属すると思われる遺構を列挙する。

161号住居址 F区北の箱清水式期の160号住居址南側に位置する。床面のみが検出され、大部分が調査区外となることから、規模、形態等は不明である。

174号住居址 土壙55、平安期の171号住居址に切られ、大部分が東側調査区外になる。規模、形態等は不明。

207号住居址 K区、奈良期の182号住居址東側に位置する。大部分が調査区外となり、土壙94に切られるものの、形態は一辺3.2 m程の方形を呈するものと思われる。

4号溝址 本溝は50・51号住居址を切り、ほぼ東西方向に走る。西側覆土に礫が比較的多く検出され、底面は西側に緩やかに傾斜している。

土壙2号（III-209） 径1.2 mの円形、深さ50 cm以上、井戸址（？）、土師器甕・高坏・坏片出土。

土壙9号（III-3） 1.5 m×1.0 mの長方形、深さ30 cm、20号住居址内、土師器甕・高坏片出土。

土壙13号（III-218） 1.15 m×0.9 mの楕円形、深さ15 cm、土師器甕・高坏・坏片出土。

土壙14号（III-14） 1.6 m×1.3 m（？）の楕円形。深さ40 cm、甕・坏の破片、土錘が1点出土（III-403-5）。

土壙18号（III-3） 1.5 m×1.5 m程の不整形円形、深さ50 cm、土師器坏・高坏片出土。

土壙19号（III-250） 1.4 m×1.4 m程、不整形円形、深さ50 cm。

土壙20号（III-250） 1.6 m×1.1 mの楕円形、深さ50 cm、土師器甕・坏片出土。



III-400 土壙 18~22

1~7が土製品又は石製品で8以下はすべて鉄製品である。1・2は紡錘車で、1は119号住居址から出土している。2は滑石製で断面は台形を呈し、50号住居址からの出土である。3・4は紡錘車型の石製品と土製品で、3は軽石製である。5の筒状土製品は用途不明。土壙14号出土。6・7はいずれも土錘と考えられ、6は土壙39、7は集石址から出土している。鉄製品で出土遺構のわかるものをあげると、10の鉄鎌が1号住居址、8・9・11~16の釘形鉄製品が139号住居址、23・24が75号住居址、28の鑿形鉄製品が173号住居址からそれぞれ出土している。なお17~22・25~27はすべて検出面で確認されたもので、17~20・22は刀子形鉄製品と考えられる。

土壙22号(III-255) 径1.2mの円形、深さ1.4m、覆土上部に集石有り、集石中から鉄製品とともに須恵器罍(III-353-22)・土師器高坏が出土。

土壙29号(III-382) 1.15m×0.9mの楕円形、深さ15cm。

土壙32号(III-383) 径1.4mの円形、深さ10cm。

土壙37号(III-3) 1.58m×0.95mの楕円形、深さ20cm。

土壙54号(III-185) 0.95mの円形、深さ30cm。

土壙80号(III-457) 0.5m×9.85mの楕円形、深さ20cm。

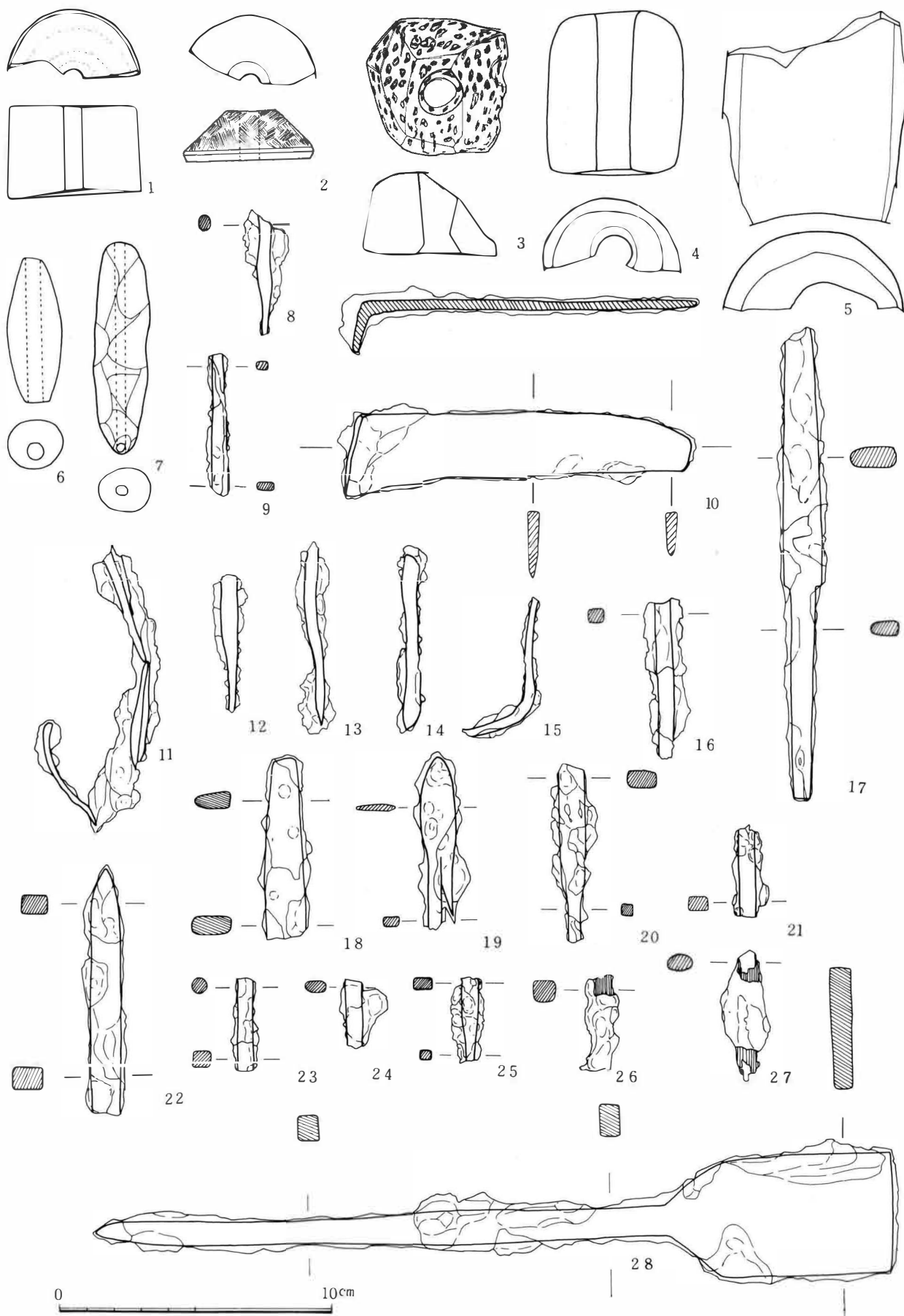
土壙93号(III-303) 径1.2mの円形、深さ110cm以上、井戸址(?)。

土壙102号(III-4) 0.45m×(0.8m)の楕円形、深さ32cm。

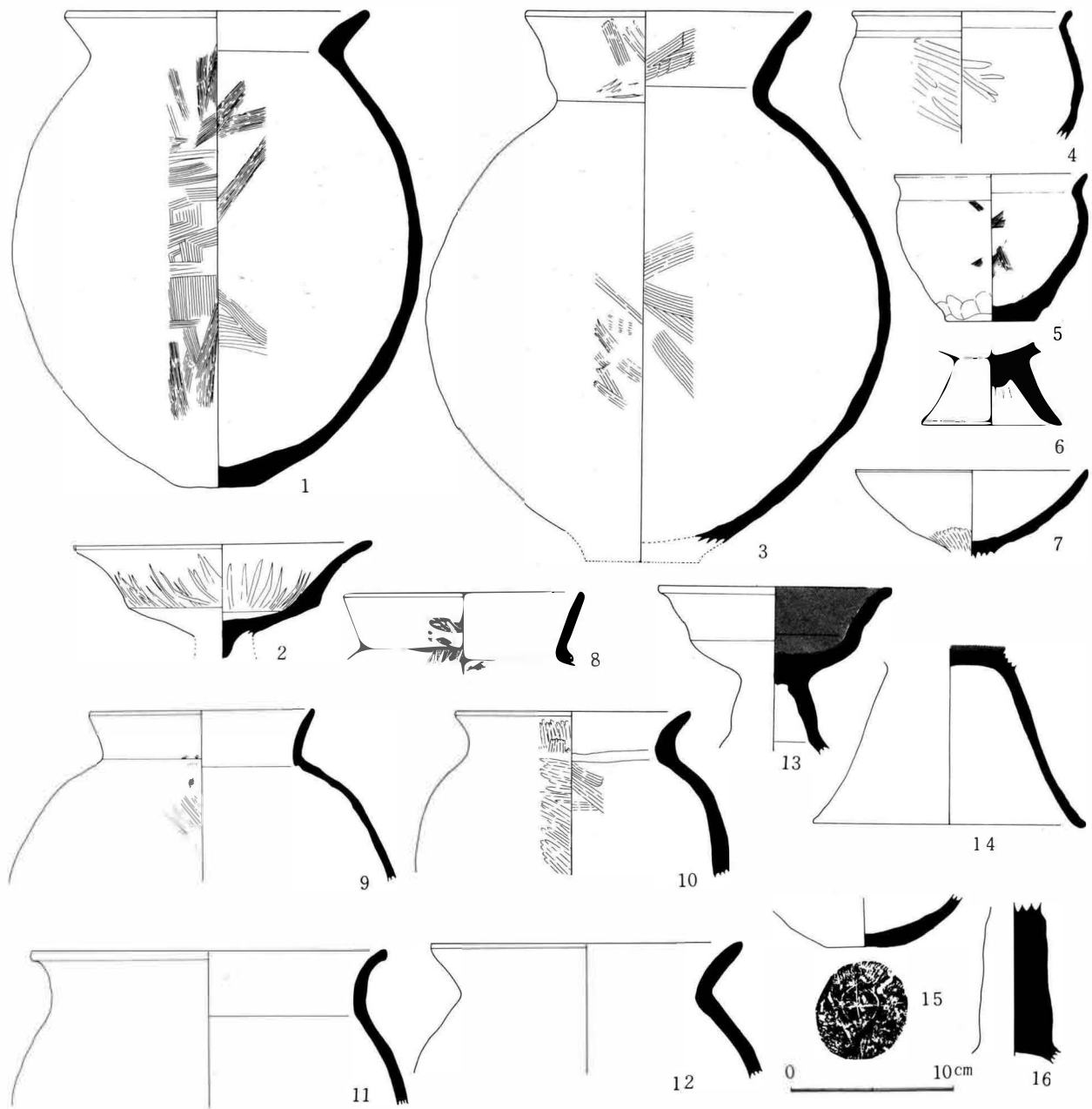
土壙105号(III-4) 不整形、深さ20cm、土師器坏・須恵器坏片出土。



III-401 土壙 17~22



III-403 土製品 (1, 4~7), 石製品 (2·3), 金製品 (8~28)



III-402 その他の遺構出土土器

古墳時代に属する土器で、他の時期の遺構から出土したものや、各遺構で載せられなかったもの、また検出面から出土したものをまとめた。1・2は20号住居址から出土している。1の甕は内外面ともハケによる整形を基本とし、2の高坏は内外面ともヘラミガキされる。3の球形胴甕は1号溝址出土で、内面はハケ整形、外面はヘラミガキされ、黄褐色を呈する。8～12の甕形土器は、8が130号住、9が134号住、10が5号溝、11が126号住、12が土壙27からそれぞれ出土している。整形は8が外面ハケ、口縁内面がヘラミガキ、9が外面の一部にハケ、10が外面ヘラミガキ、内面一部にハケ、11が内面ヘラミガキ、12がナデ整形をそれぞれ施される。6の高坏脚部は出土地不明。外面タテヘラミガキ。7の高坏坏部は、土壙22出土で、内外面ともにヘラミガキされる。13の高坏は脚部内面がハケナデされる他はヘラミガキされ、坏部内面は黒色処理される。14は134号住居址出土で、脚端部がヨコナデされ他はタテヘラミガキされる。坏部内面は黒色研磨。15はC地区出土の甕底部で内面は磨かれ底面に線刻がある。16は土壙51出土。高坏脚と思われる。5の浅鉢はハケナデされる。15号墓壙付近から出土している。

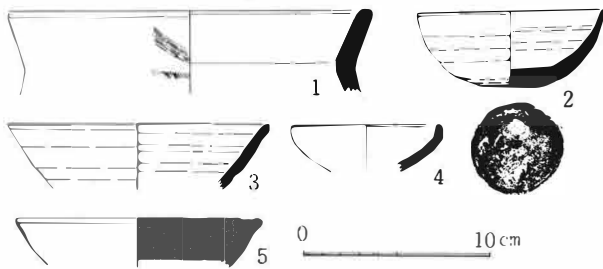
(出河 裕典)



第7節 奈良時代の遺構と遺物

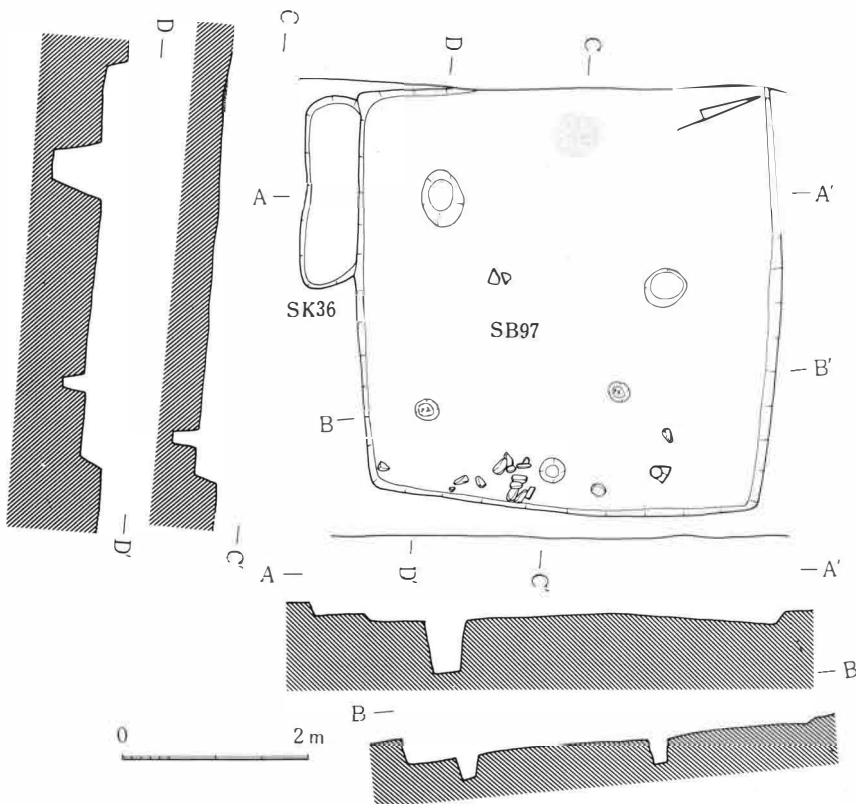


III-404 96号住居址



III-405 96号住居址出土土器

住居址の西側半分程調査区外になるため、全体の形状は不明であるが、形態は方形と思われる。覆土は黒色粘質土で、黒を帯びた黄褐色土の貼床が部分的にみられた。該期の出土土器は少なく、須恵器坏(2・3)、土師器甕及び坏(1・4・5)がある。2の坏底部はヘラケズリによっている。

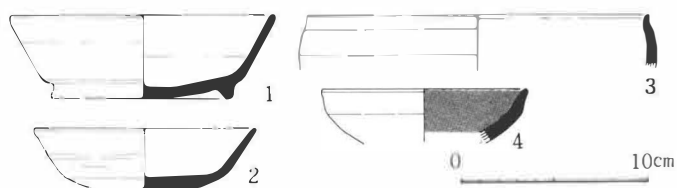


III-406 97号住居址実測図

F地区最南端に位置する。主軸方向はN 63°Wであり、南西壁に土壇 36がある。形態は一辺4.0 mの方形を呈するものと思われ、貼床面が比較的良好に残存していた。支柱穴は4個の方形配列形態であるが3個確認できた。カマドは確認できなかったが、西壁中央付近に地床炉様の焼土部分が存在した。性格等は不明である。また東壁直下床面上に楕円形を呈する自然石が12個が集中的に検出された。出土遺物は須恵器が中心で、ほとんどが、床面または床面直上で出土している。

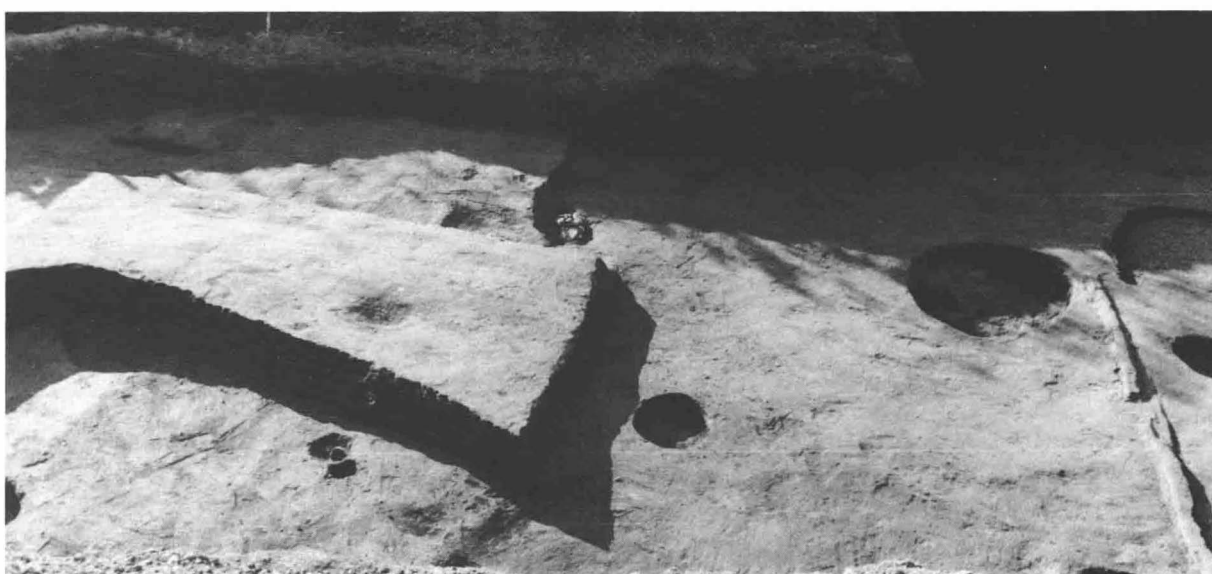


III-407 97号住居址



III-408 97号住居址出土土器

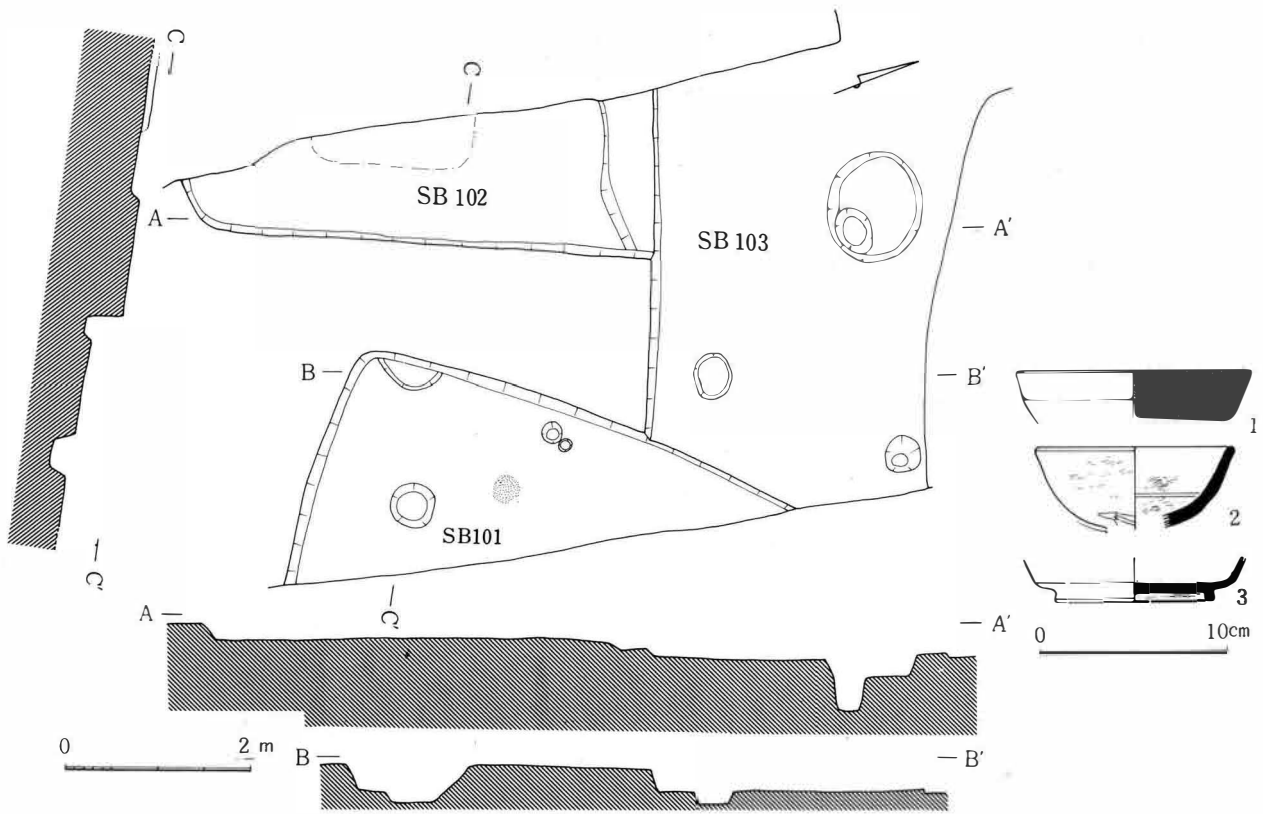
1～3は須恵器坏で、1は外開する高台が付けられ、底部は回転ヘラケズリされる。2の底部はヘラ切離で、体部に4条のカキ目様の擦痕が残る。3は椀形を呈す。4は土師器で内面はヘラミガキ整形である。



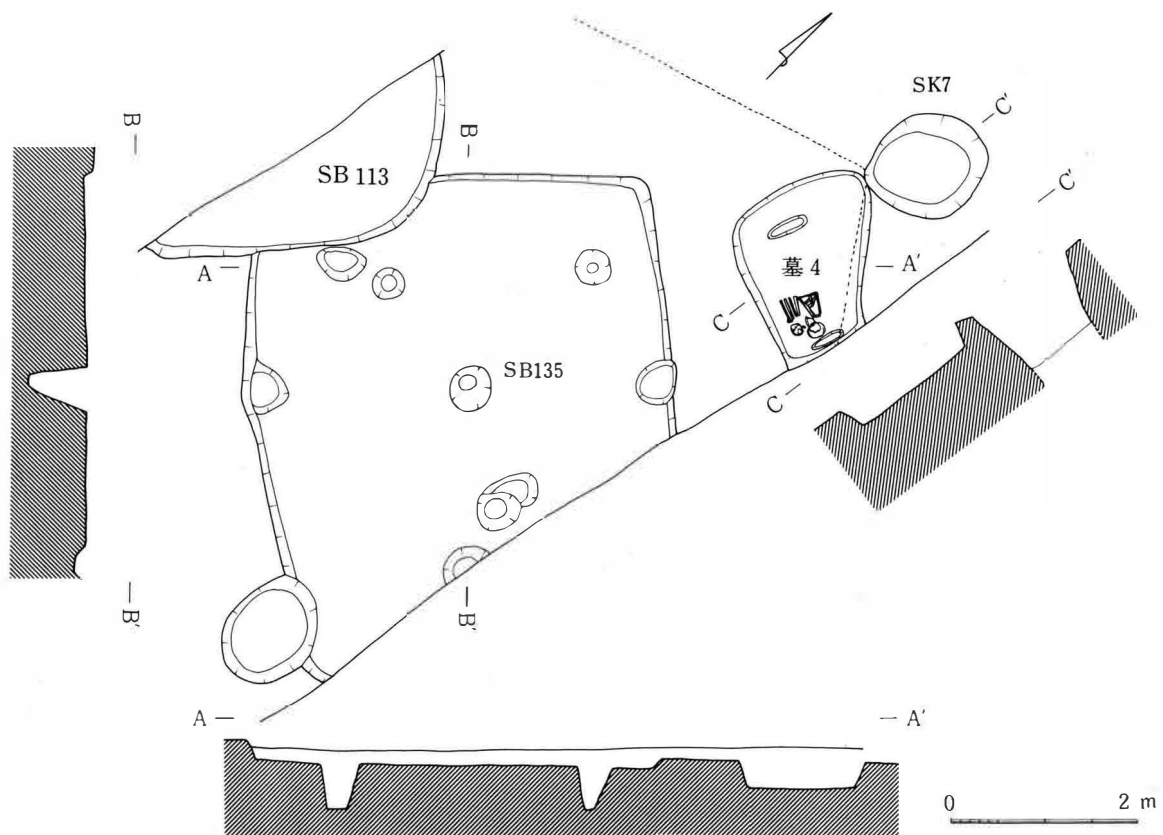
III-409 103号住居址

H地区南端に位置し、主軸方向はN 70°Wである。南東側を101号、北側を104号・105号住居址に切られているため、形態・規模等は不明である。壁も南壁の一部だけが残存し、深さ20cmを測る(III-409)。

出土遺物(III-410) 1・2は土師器、3は須恵器である。1の内面は黒色処理され、土師器はともに内外面ともヘラミガキが施され、底部はヘラケズリによる。3は高台付坏で、底部は回転ヘラケズリである。



III-410 101号・102号・103号住居址実測図，103号住居址出土土器



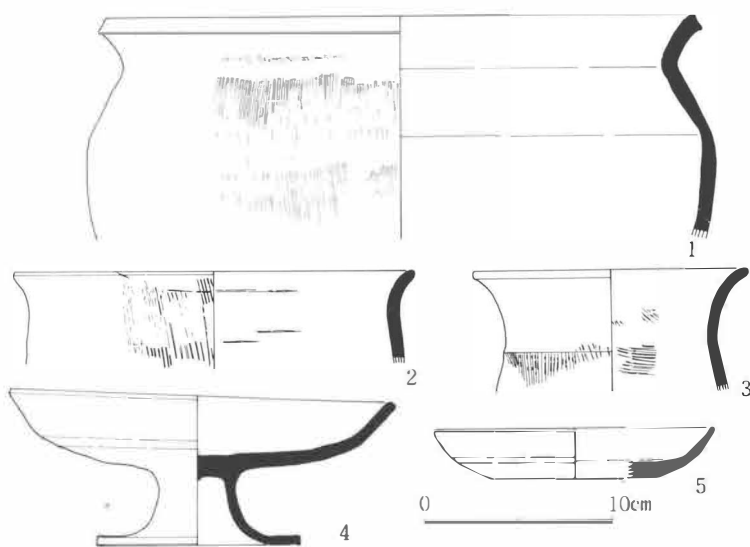
135号住居址

III-411 113号・135号住居址，土壙7実測図

113号住居址によって切られ、住居址の東側の一部が調査区外にある。形態は長方形を呈し、長軸方向はN40°Wになる。支柱穴は2個確認され、4個方形配列と考えられる。深さ45cm程になる。床面は平坦で軟弱である。



III-412 135号住居址

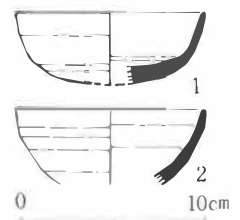


1は須恵器の甕形土器で、外面の頸部下に平行の叩目痕を残し、それ以下はナデ整形により痕跡を消している。2・3は土師器甕形土器口縁部で、2は外面に、3は内外面に、ハケによる整形が施される。また、2には成形痕が顕著に残る。4は須恵器の高台盤形になる。坏部下面は回転ヘラケズリによる整形で、全体にやや歪んだ器形になる。5は須恵器坏で器高が低く、底部は回転ヘラケズリ整形になる。

III-413 135号住居址出土土器



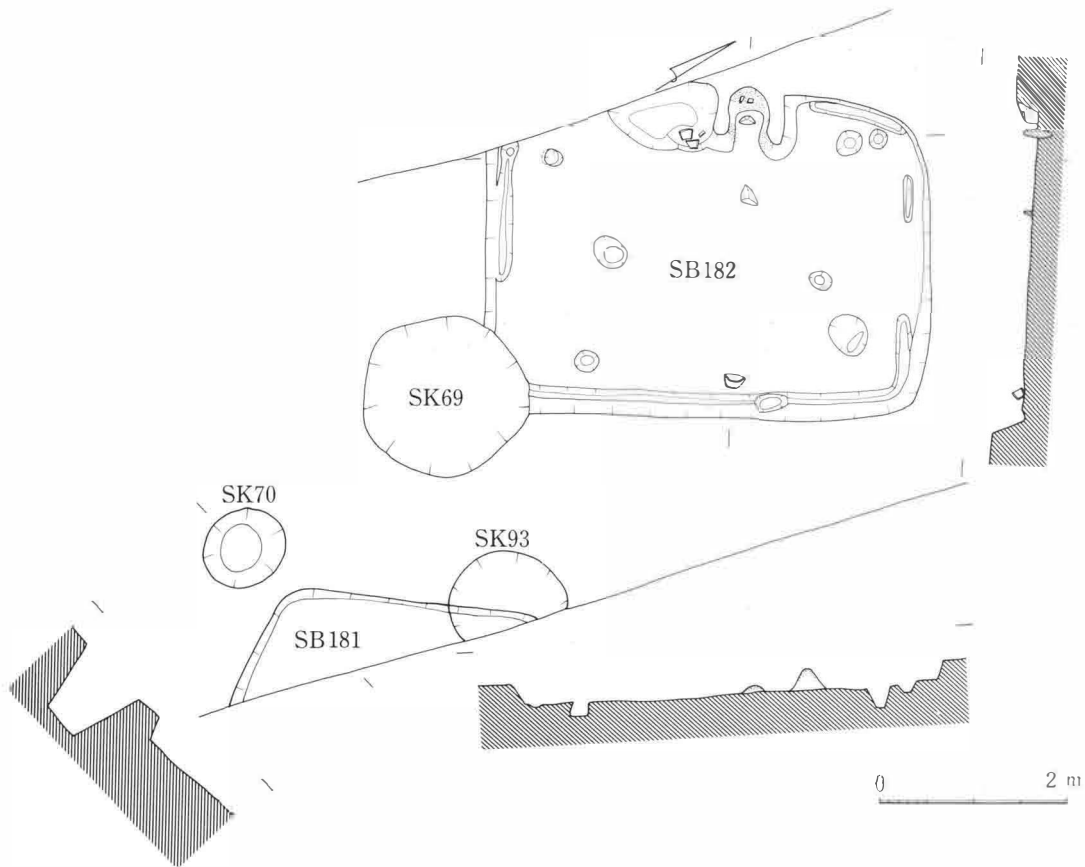
III-415 145号・150号・149号・151号住居址



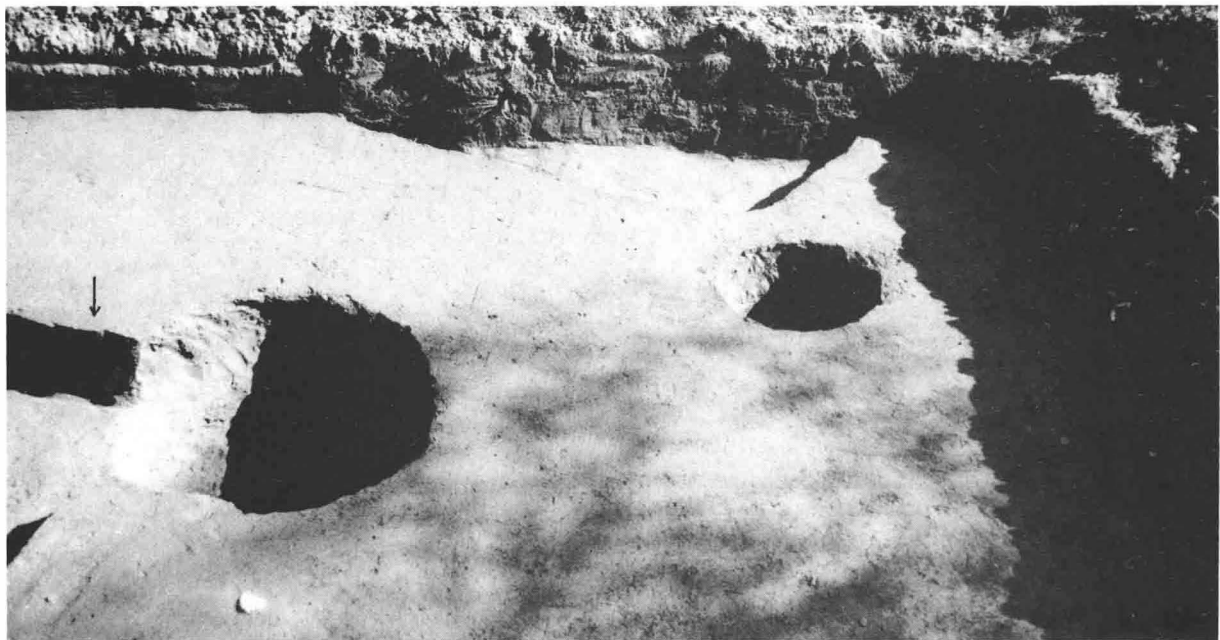
III-414 151号住居址  
出土土器

151号住居址150号住居址より新しい。規模・形態は不明である。出土遺物は少なく、1・2とも須恵器坏形土器である。1の底面にヘラ切離痕を残す。





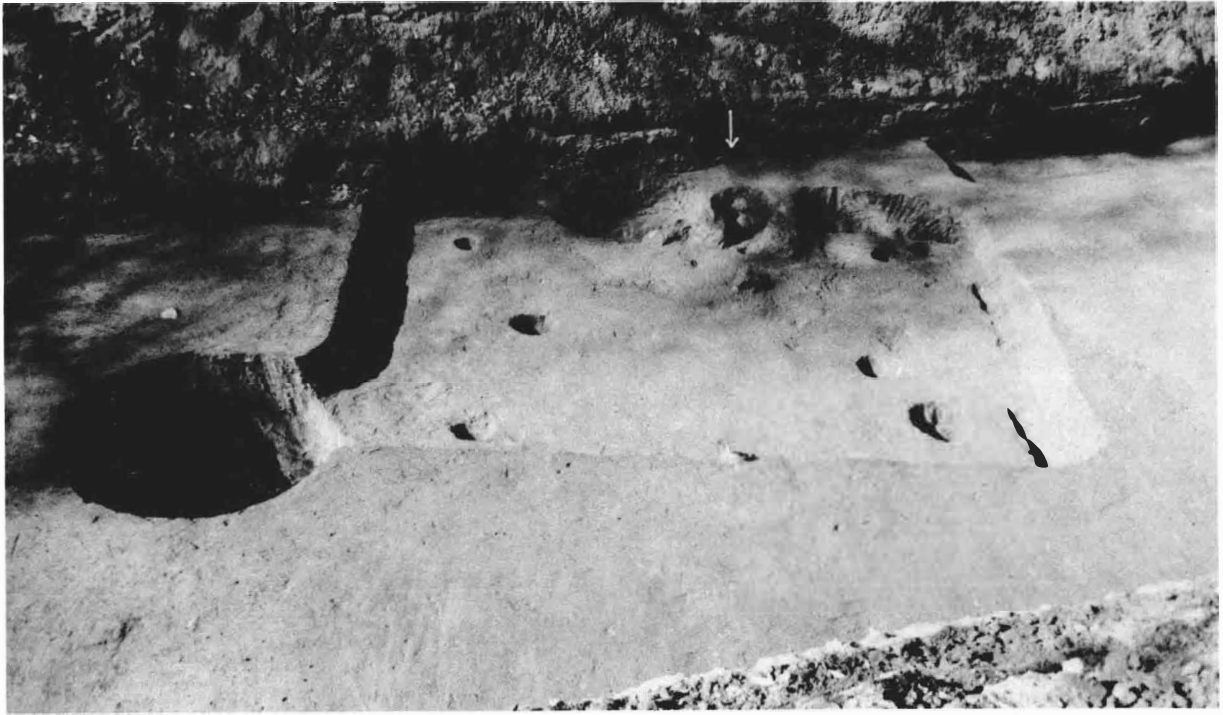
III-416 181号・182号住居址実測図



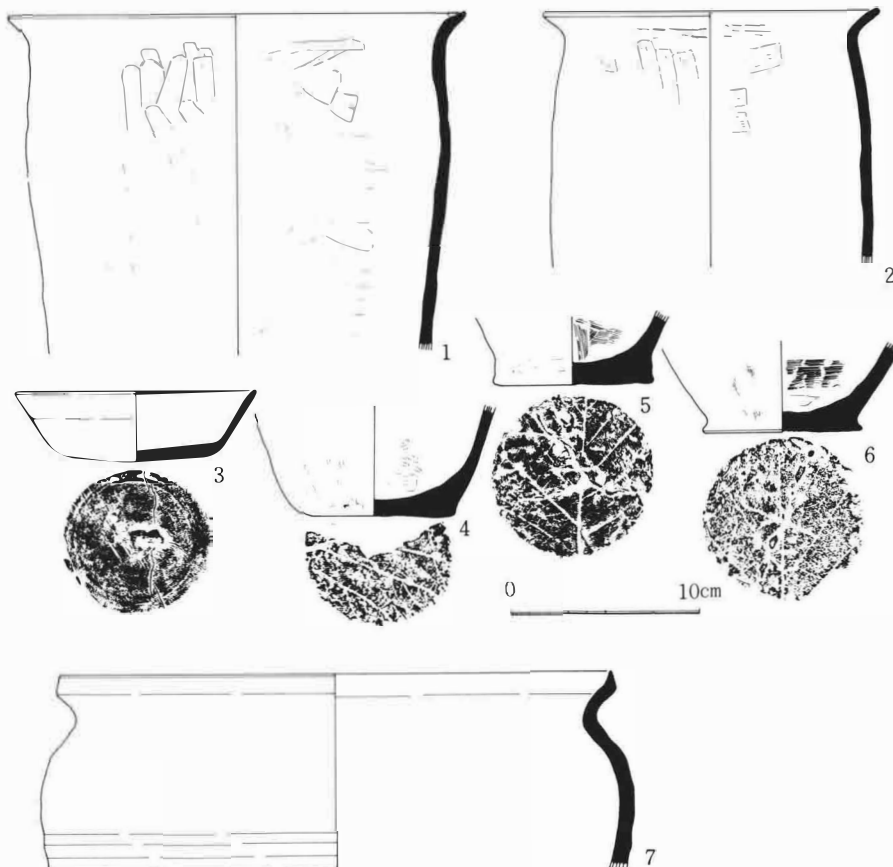
III-417 181号住居址、土壇69・70

181号住居址 北壁の一部が土壇93により破壊される。形態は隅丸方形を呈すると思われるが、ほとんどが未調査区にあるため規模等は不明である。掘り込みは北壁9cm・西壁18cmを測る。床面は平坦で軟弱である。

182号住居址 ほぼ完掘できた住居址の一つで、形態は隅丸長方形を呈する。主軸方向はN55°Wである。長軸は4.7m・主軸は3.45mを測る。掘り込みは各壁とも30cm前後になる。支柱穴は4個方形配列になる。カマドは北壁の中央付近に構築され、裾部に石が使用される他は粘土製になる。焚口に石製支柱がある。カマド左に貯蔵穴が、各壁下には断続的に周溝がめぐる。床面は平坦である。



III-418 182号住居址

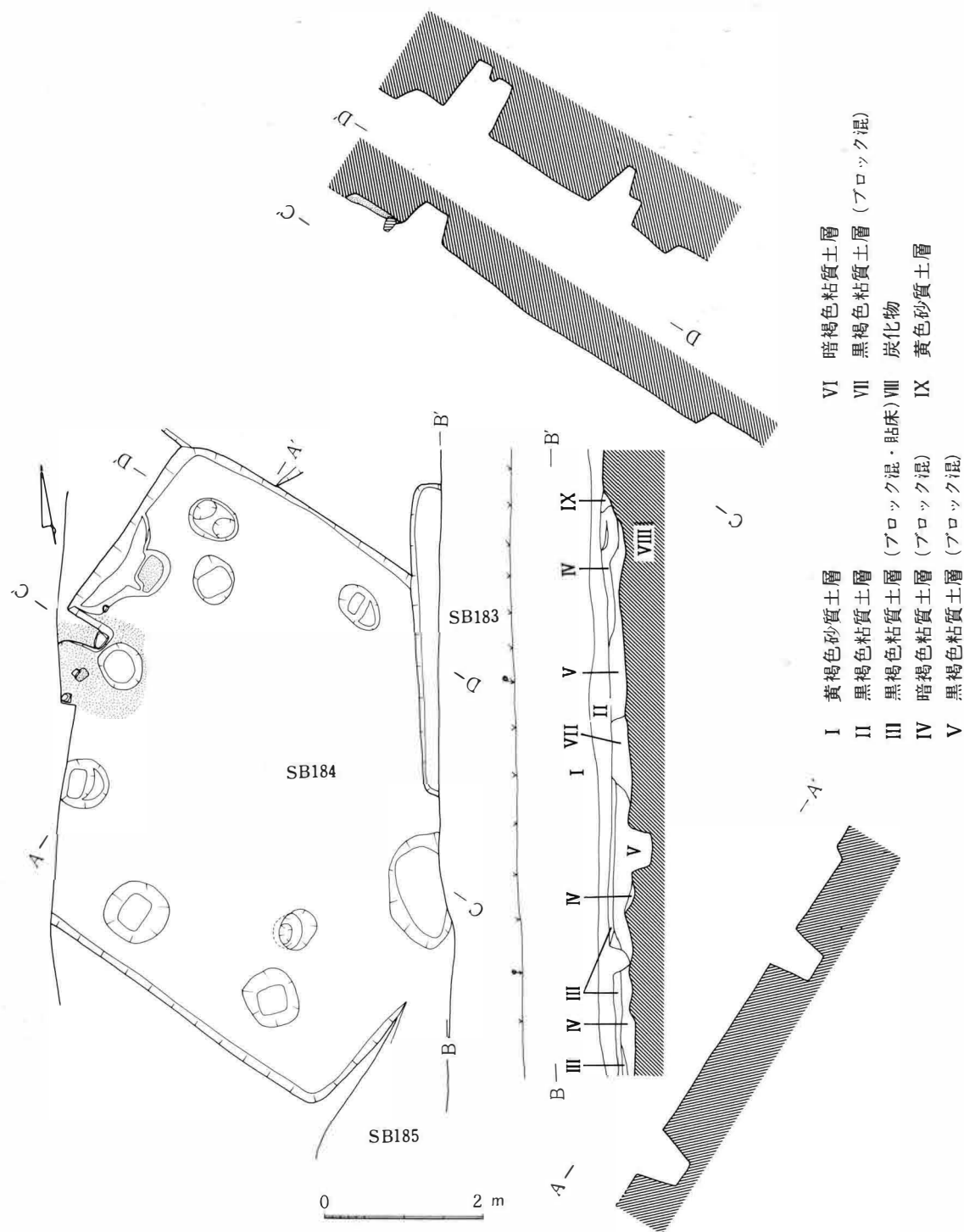


III-419 182号(1~6)・183号(7)住居址出土土器

182号住居址出土土器(1~6)器種に土師器の坏・甕形土器(1・2・4~6)があり、須恵器坏(3)・台付坏・蓋・長頸壺片が出土している。このほか片刃石斧・磨製石包丁(III-167-2)が出土している。3の底部にはヘラ切離痕を残す。4~6には木葉痕が残る。

183号住居址出土土器。土師器のほか須恵器の坏・蓋・甕形土器(7)が出土している。このほか横刃石器(III-168-21)がある。

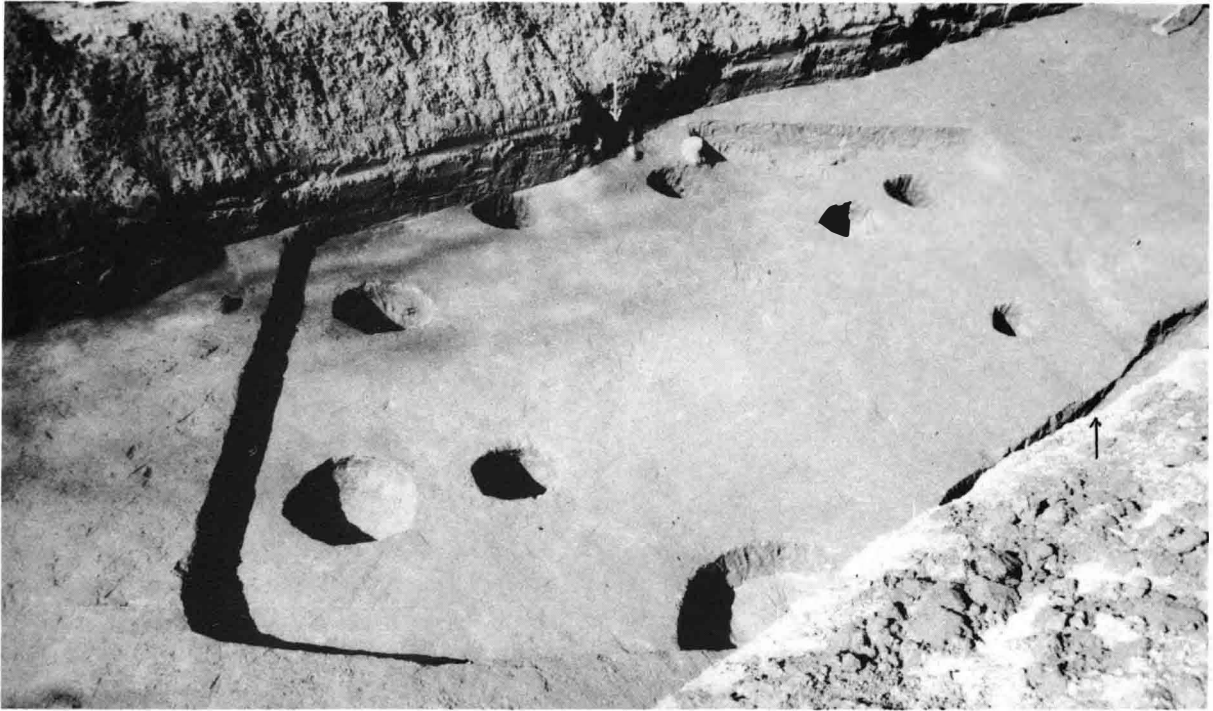
183号住居址(III-420) 184号・185号住居址と重複する住居址で、そのほとんどが、東側の調査区外にある。そのため全容は知り得ないが方形を呈する住居址を想定する。掘り込みは北壁で20cm・南壁16cm・西壁13cmを測る。南北規模は4.85mである。支柱穴・カマド等の施設は確認できなかった。



III-420 183号・184号住居址実測図

184号住居址 この住居址もほぼ全容を露呈できた遺構の一つである。形態は方形の住居址で、主軸方向はN46°Wをさす。主軸及び東西規模は6.0mを測り、その掘り込みは北壁25cm・南壁21cm・東壁22cm・西壁16cmになる。支柱穴は東・西壁沿いに3個づつ、6本方形配列になるものと推定される。カマドは北壁中央に認められ、182号住居址同様裾部に石が用いられ、焚口部中央に自然石の支柱がある。カマド右側に貯蔵穴がある。床面は平坦で、中央付近は貼床状を呈していた。

この床面の黄褐色粘土混じりの貼床を掘り下げると、下部は上部遺構を縮小した凹凸の著しい床面になり、住居址中央付近は上面と同じである。柱穴は楕円形を呈するものから下部の柱穴は、方形を呈し、深さ70cm前後になるものに変容した。出土遺物には、上下の時間差が認められなかったものの、下から出土した遺物の中に弥生中期土器片が多かった点相違がある。

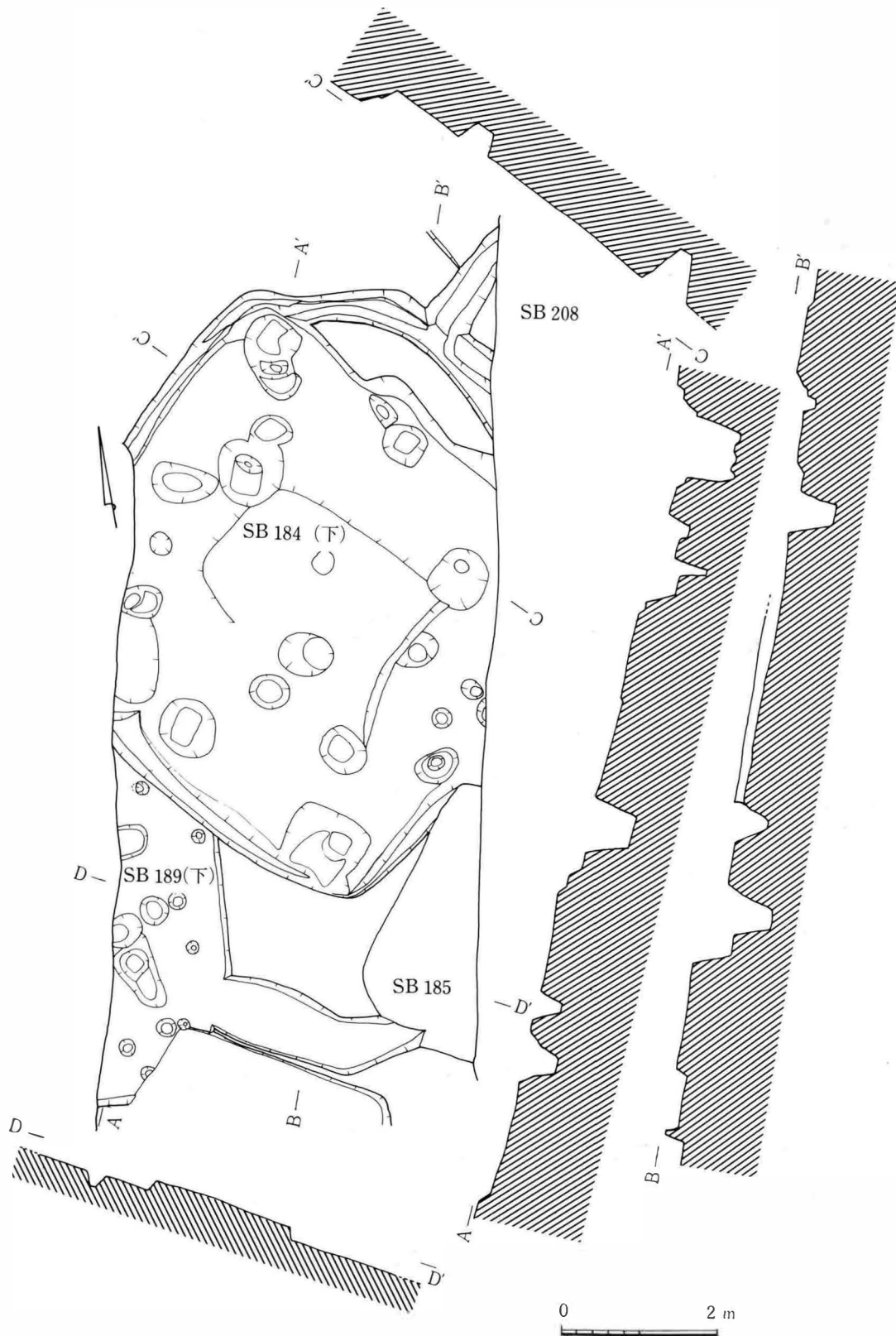


III-421 184号(上・下)住居址

110号住居址(III-384) 東壁と南壁の一部を検出したにすぎず大半は西側の調査区外にある。形態は方向を呈し、南北軸はN 30°W方向になるものと思われる。掘り込みは東壁13 cm・南壁14 cmである。尚東壁下に幅70 cm・深さ35 cm程の溝状遺構がある。南壁に接して終っていることからこの住居址に付属するものと考えられる。出土遺物は少量で土師器甕形土器片、須恵器蓋形土器片が出土している。

208号住居址(III-422) 186号住居址を覆う上部遺構である。形態は隅丸方形を呈し、南北軸方向はN 32°Eになる。規模は南北軸5.6 m・東西軸5.4 mを測る。掘り込みの深さは16~20 cmで、床面は平坦であり部分的に黒褐色を呈する堅い貼床状のものが認められたが、この黒褐色土を掘り進めたところ、186号住居址を検出した。そのため、遺物整理上、遺構番号が逆転している。出土遺物は少量で図示できるものはない。土師器甕・坏形土器片、須恵器坏形土器片と砥石が出土しているにすぎない。

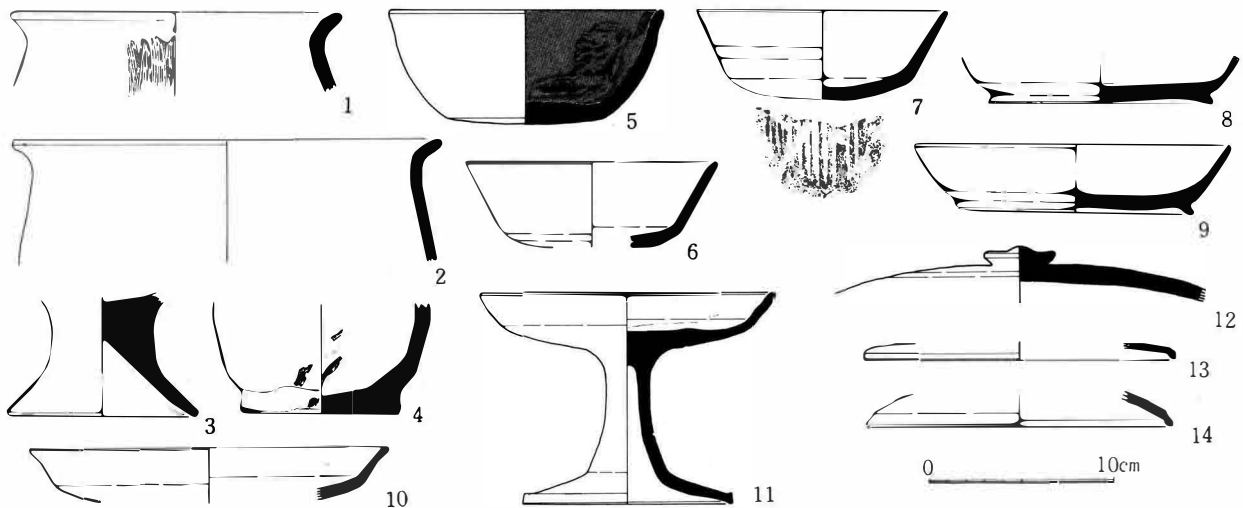




III-422 184号(下)・189号(下)住居址実測図

11号溝址(III-382) 80号・81号住居址の南側で単独で検出された。幅70cm・深さ20cm程の東から西へ傾斜するU字溝である。土師器と須恵器の甕・坏形土器片が出土している。このほか横刃石器(III-168-27)もある。

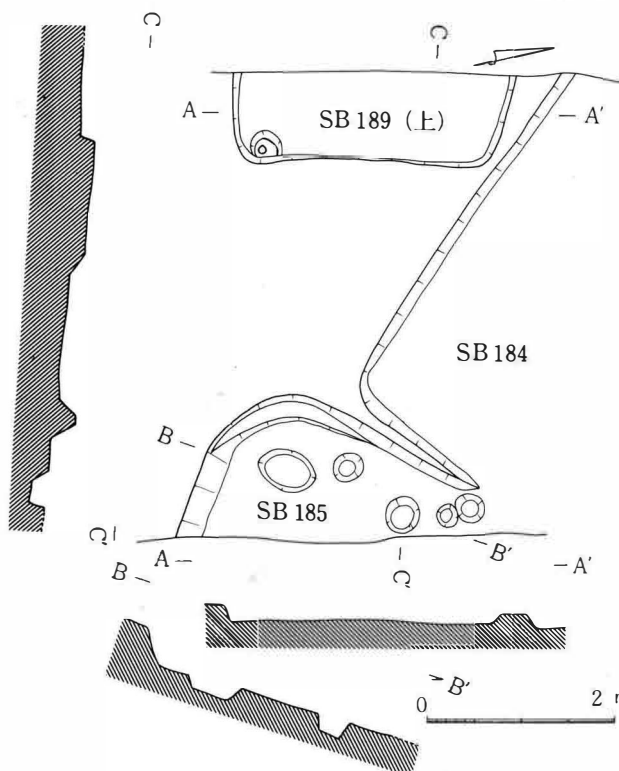
18号溝址(III-40) 172号を切る遺構で、南東から北西にかけて掘られ、高低もこれに順ずる。幅は一定でないが1.45mを測り、深さは西側で26cm・東側で16cmである。土師器・須恵器甕形土器片が出土している。



III-423 184号住居址出土土器

184号住居址出土土器 1～4は土師器甕形土器及び高台(3)である。内外面ともにハケナデ整形基本である。色調は黒茶褐色を呈する。5～9の坏は5が土師器である他はすべて須恵器である。底部が丸味を帯び、口径の小さい6・7と、外開する高台を持ち口径の大きい8・9に大別される。底部整形は7がヘラ切離後ハケナデされ、8・9は回転ヘラケズリ痕を残す。尚、前者は後者に比べ焼成は良くない。10～14はいずれも須恵器で高坏(10・11)と蓋(12～14)である。

189号(上)住居址 184号住居址の南側にあり西側大部分は調査区外に延びる。形態は隅丸方形を呈し、南北軸は3.0mを測り、北壁8cm・南壁10cm・東壁8cmの掘り込みになる。出土遺物は須恵器の坏形土器が出土しているにすぎない。尚、東隅のピットから弥生時代中期の土器(III-13-1)が出土した。



III-424 185号・189号(上)住居址実測図



III-425 199号住居址出土土器 器、凹石(III-170-26)が出土している。

199号住居址(III-424) 北壁と東壁の一部を検出したにすぎない。形態は方形を呈すると思われるが、規模等不明である。

出土遺物は、土師器甕・坏形土器、須恵器坏・高坏・長頸壺・甕・蓋形土

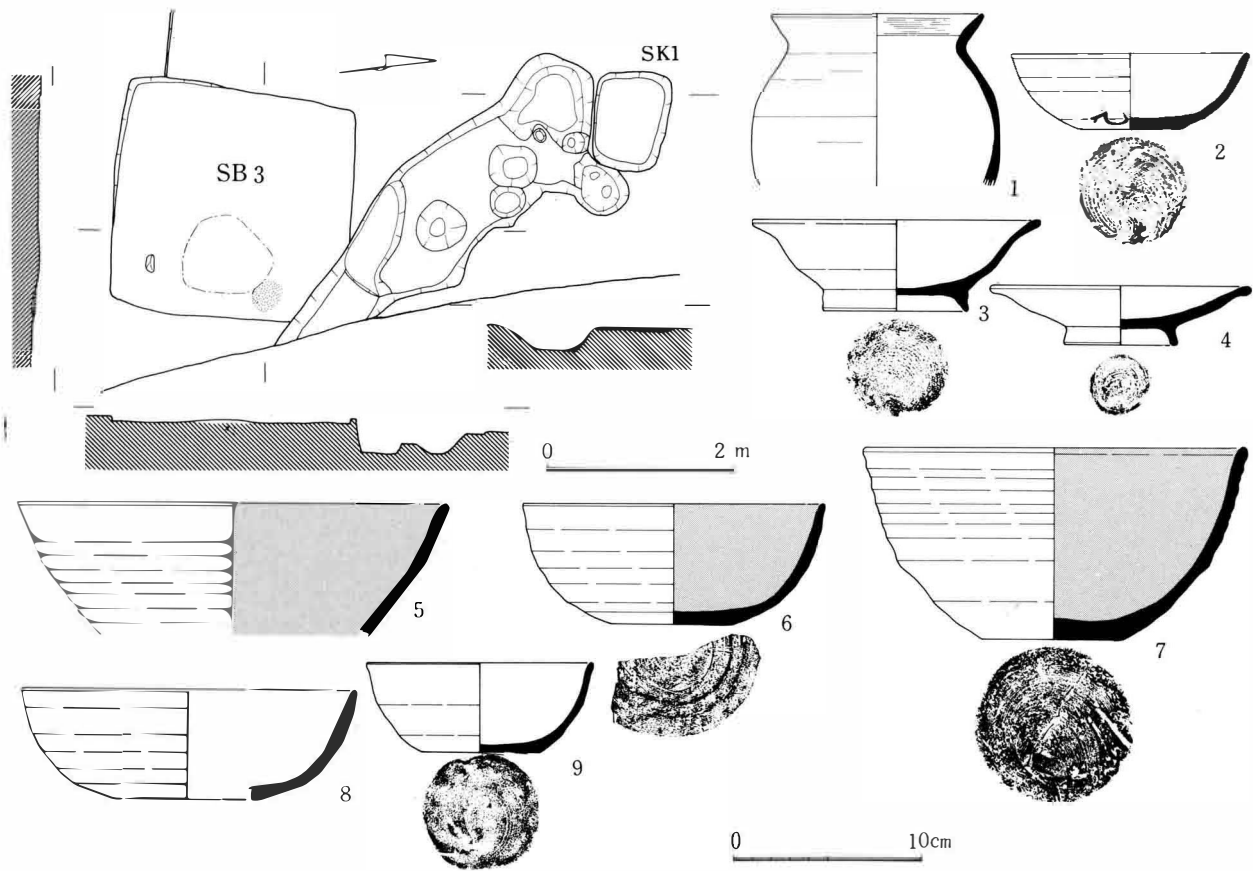
24号溝址(III-459) 198号を切る、東西のU字溝である。幅1.4m・深さ10cm内外である。覆土中より土師器甕形土器、須恵器坏・甕形土器片が出土している。

25号溝址(III-4) 幅1.25m・深さ80cmを測るU字溝で、覆土中より土師器甕形土器、須恵器坏形土器、打製石鏃(III-165-14)が出土している。

土壙41(III-272) 91号住居址の南壁にある。径1.2号の円形を呈し、深さ44cmである。

土壙51(III-4) 171号住居址の北壁にある。径1.0mの円形を呈し、深さ33cmである。(出河 裕典)

第8節 平安時代・それ以降の遺構と遺物

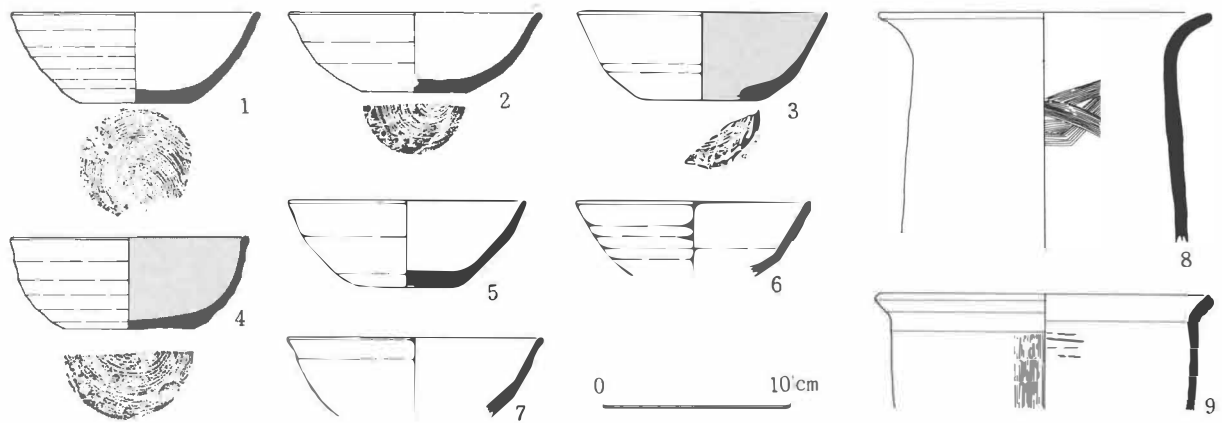


III-426 3号住居址実測図・出土土器



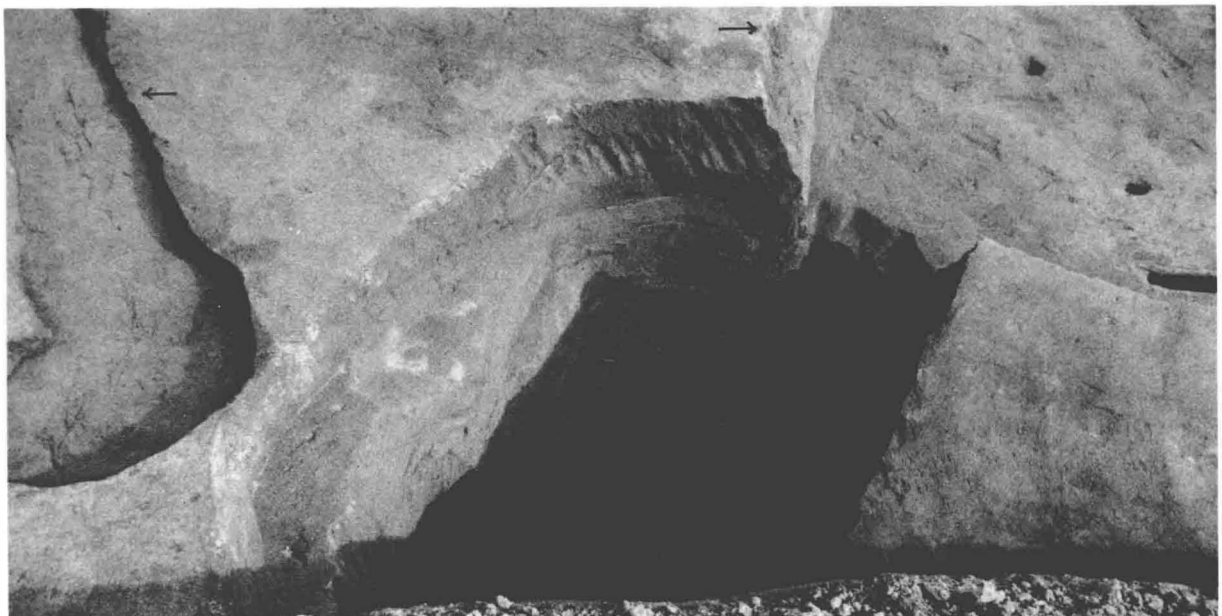
III-427 3号住居址カマド付近

同期の4号住居址上部に位置し、一辺2.4mの方形を呈する。南壁の一部と貼床面が検出できただけで、東壁下にカマドが付設され、焼土と炭化物が認められた。土器はカマドを中心に出土し、すべて土師器である。ロクロ成形を基本とし、6・8は回転糸切り後回転ヘラケズリされる。隣接する溝覆土より管玉(III-166-29)が出土している。

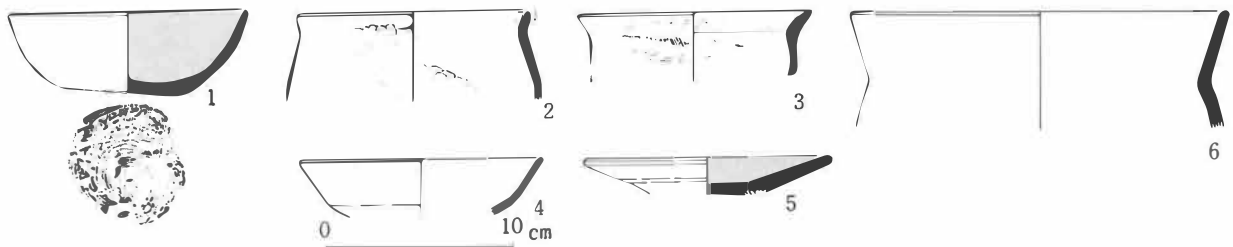


III-428 4号住居址出土土器

住居址形態(III-197)は、一辺4.5mの方形を呈し、掘り込みは南壁で15cmである。床面は平坦で貼床になる。出土遺物は、土師器杯(1~5・7)・甕(8・9)があり、6は須恵器の坏形土器である。このほか須恵器に甕・長頸壺片があり、磨石(III-172-31・32・33)と砥石が出土している。



III-429 85号住居址(上)出土土器



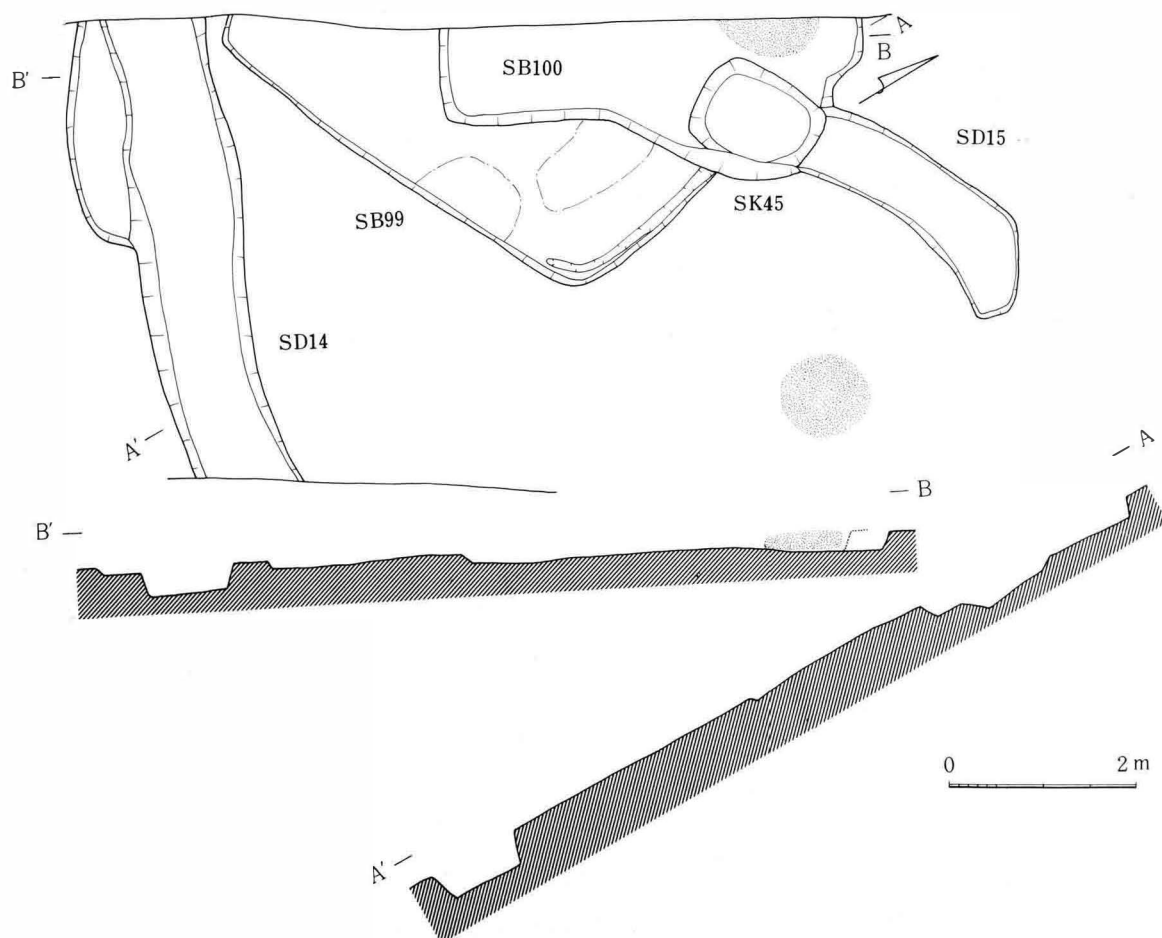
III-430 85号住居址出土土器

85号住居址(上) 弥生時代後期で記した86号住居址の上部を再利用したのか該期の遺物が集中して出土した。出土量は多くない。1は椀形を呈した坏形土器で、内面は黒色処理され、光沢をおびる。5は皿形の器形に高台が付され、内面が黒色処理される。4は須恵器の坏形土器で青灰色を呈す。2は口縁部が短く外反する深鉢形の甕で、3は頸部が肥厚し、口縁部に最大径がある。6は大形品で口縁部は内弯気味に立ち上る。これらの整形はヘラとハケ状工具によっている。



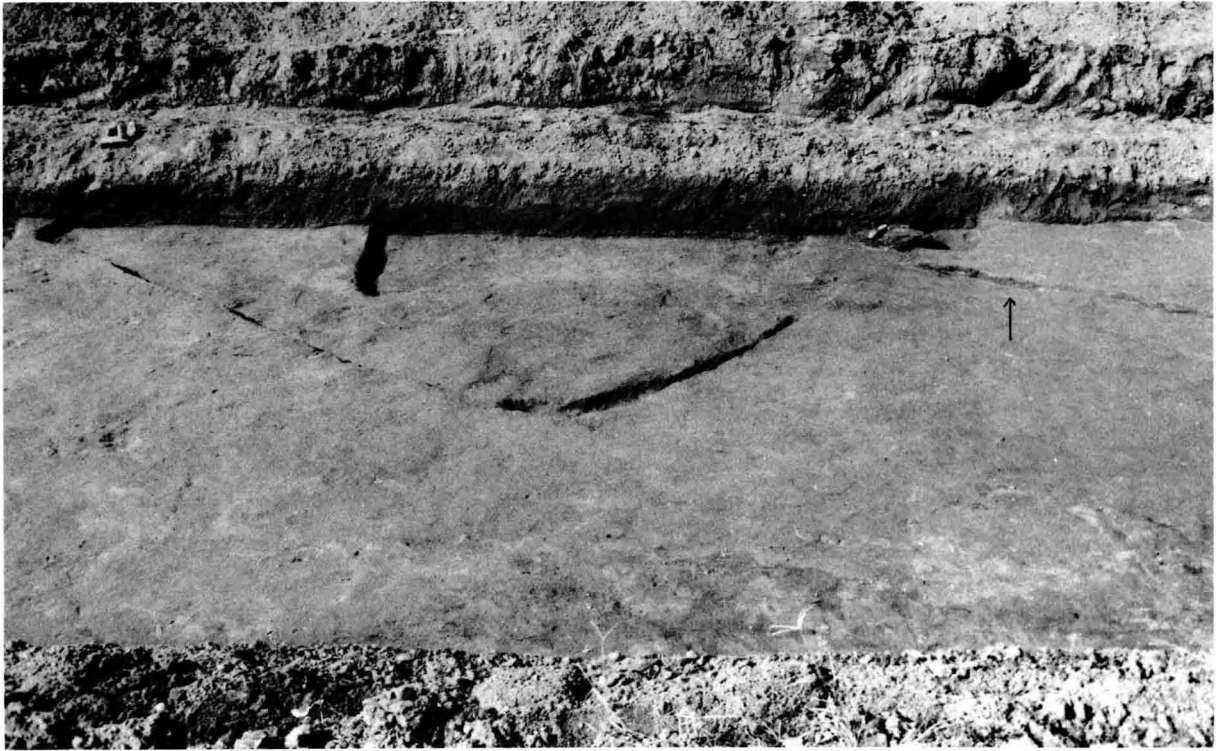
III-431 92号・93号住居址

92号住居址（III-293） 弥生時代後期の91号・93号住居址の上面にあり、長軸方向がN 29°Wになる。形態は長軸3.8m・短軸3.0mの隅丸長方形を呈する。検出面からの掘り込みは浅く、各壁とも5cm前後である。柱穴は、2個検出されたが、支柱穴の配列や個数は不明である。カマド等の施設は確認されなかった。

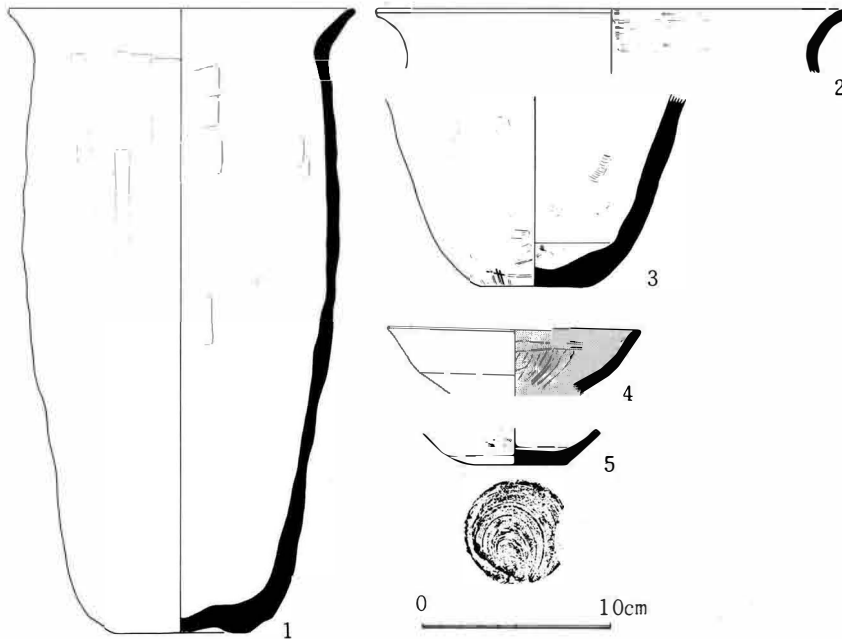


III-432 99号・100号住居址, 14・15号溝址実測図





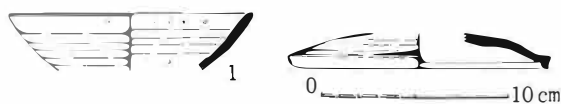
III-433 99号・100号住居址, 15号溝址



III-434 99号住居址出土土器

99号住居址(III-432) 形態は、東西軸方向N 65°Eになる。各壁の掘り込みは10cmに満たない。カマドは東壁に認められる。床面は部分的に貼床がある。

出土量は少ない。1は口縁部が屈開するほか直線的な体部になる。へら状工具による整形である。2は大形の甕形土器で口縁部がゆるく外反する。3は1と同様器形になる。4の内面は暗文風に研磨され黒色処理される。5も坏形土器底部である。これらはいずれも土師器である。



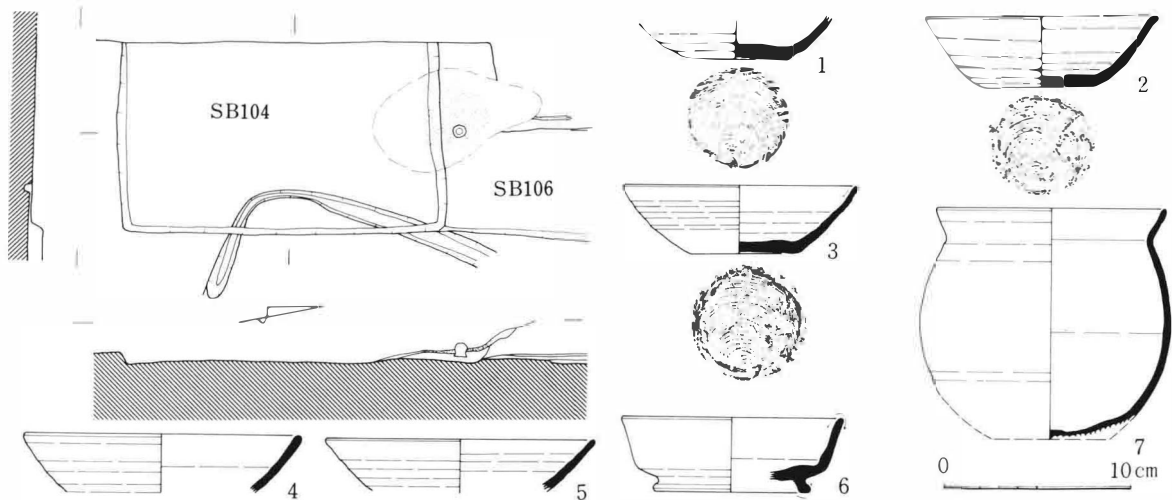
III-435 101号住居址出土土器

1・2は須恵器の坏と蓋形土器で、いずれも灰青色を呈す。このほか須恵器甕片、土師器甕・坏形土器片が若干出土し、磨石(III-171-38)もある。

101号住居址(III-410) 東側の大部分が調査区外へ延び、西壁付近を検出したにすぎない。形態は長方形で、その主軸方向はN 48°Wになるものと考えられる。規模は不明であるが、掘り込みは南壁27cm・西壁34cmになる。主柱穴は1個検出し、4個方形配列を推定する。カマドは不明であるが、中央北寄りに焼土が認められた。



III-436 101号・102号住居址



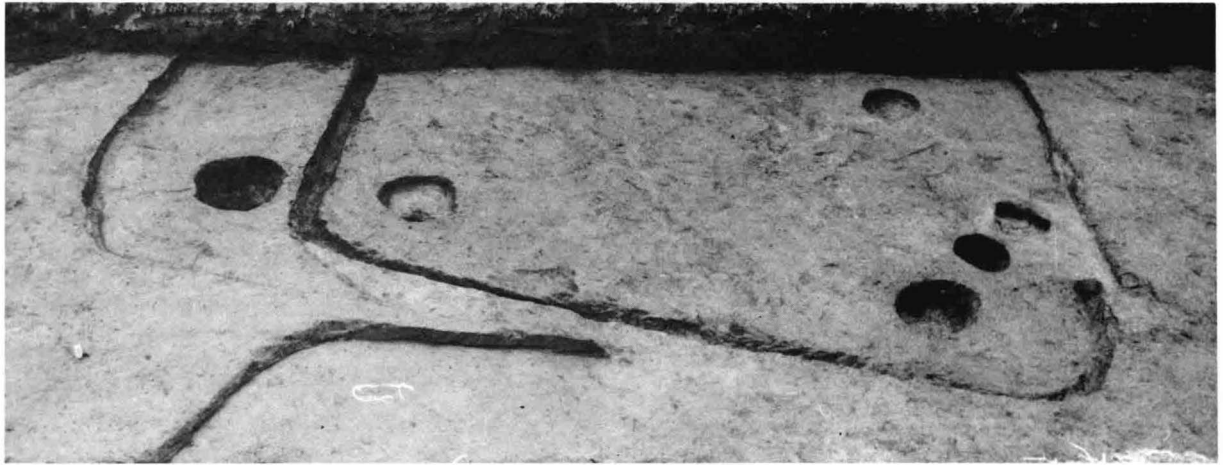
III-437 104号住居址実測図・出土土器



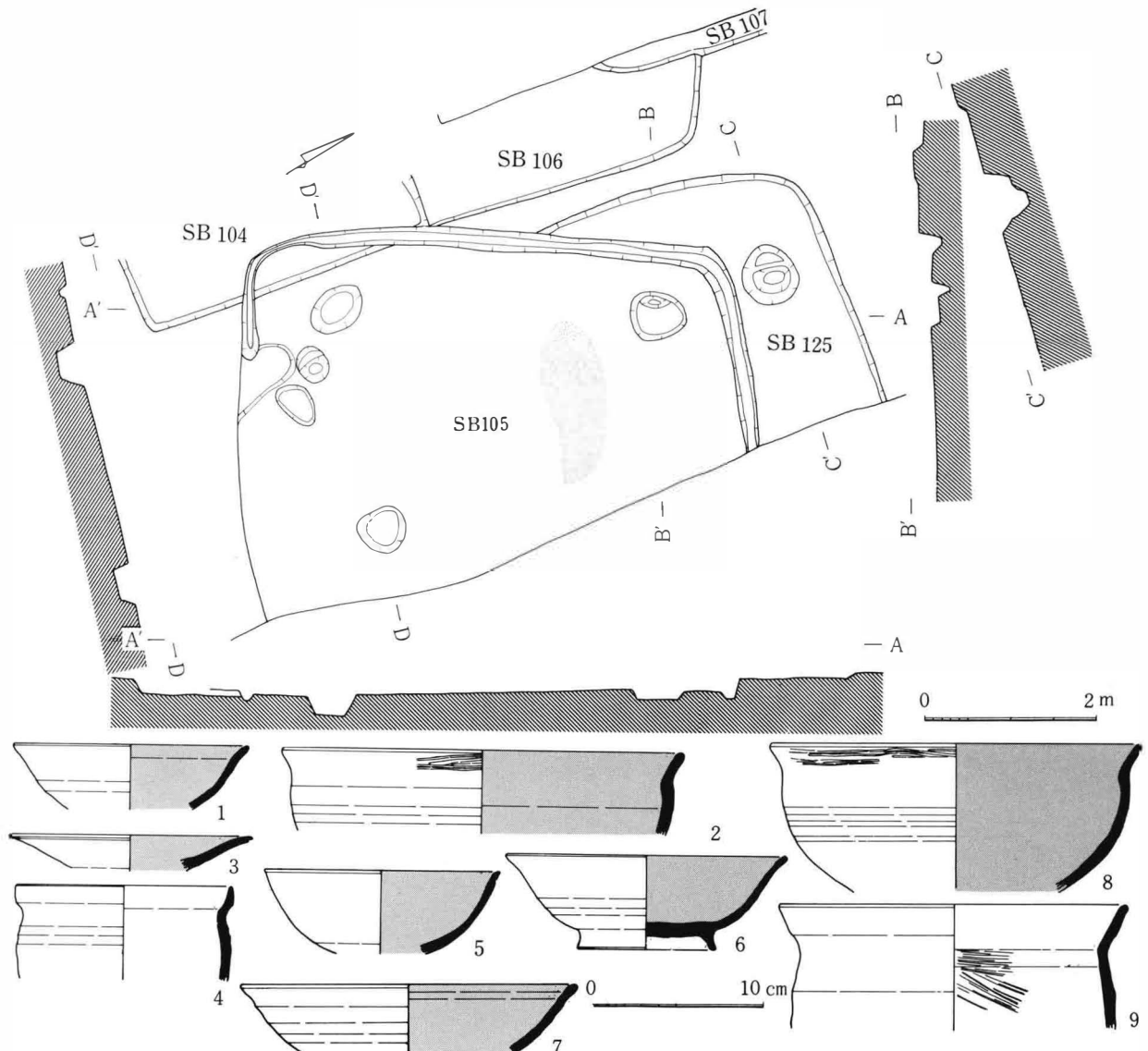
III-438 104号住居址カマド

104号住居址(III-440) 西側半分程調査区外になり、形態は一辺4.0mの方形になる。主軸方向はN11°Eになる。掘り込みは北壁15cm・南壁14cm・東壁11cmを測るが、煙道上面から床面まで22cmある。カマドは北壁のやや東寄りに設置されたものと考えられ、焼土・炭化物が周辺に散在していた。カマドは破壊されるが、支脚に小形甕が逆位に使用されていた。

出土遺物 7はカマドの支柱となっていたロクロ成形を明瞭に残す小形甕形土器で、他の1~6は坏形土器であるが、1と4が土師器で、他は須恵器で、6には高台が付される。



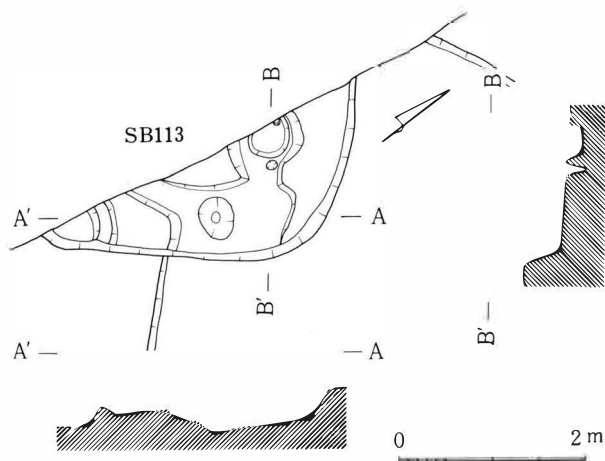
III-439 105号・125号・106号住居址



III-440 105号住居址実測図・出土土器

105号住居址 東側の半分は調査区外へ延びる。形態は隅丸方形を呈するものと思われ、南北方向軸はN 61°Wになる。この軸の規模は6.0mを測る。掘り込みは浅く北壁が6cmになり、北壁から西壁にかけ周溝がめぐる。

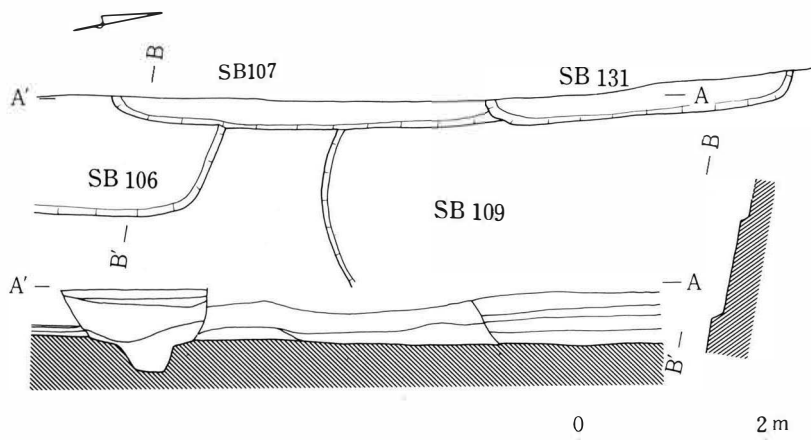
出土遺構のすべては土師器である。1・3・5～7は坏形土器で、3は皿形を呈し高台が付されるものと思われる。2・8は大形の浅鉢であろう。これらの内面は研磨され、黒色処理される。4・9は甕形土器である。



III-441 113号住居址実測図

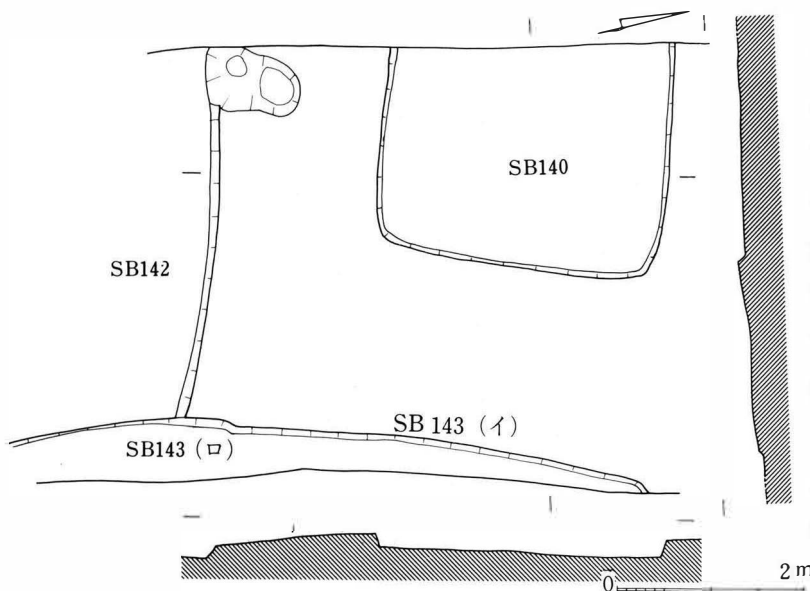
113号住居址 北と東壁の一部を検出したが、全容を知り得ない。南北軸はN 42°Wで、一辺3 m前後の隅丸方形を呈するものと思われる。床面は平坦な貼床であったが、貼床下は凹凸のある床面になった。柱穴様ピットが3個確認されたが、配列は不規則である。掘り込みは東壁25 cm・北壁20 cmである。カマド等の施設は認められない。

出土遺物 図示可能な土器の出土はなかったが、土師器に坏・甕形土器があり、須恵器坏形土器が出土している。坏形土器の底部には、糸による切離痕が残されている。



III-442 131号住居址実測図

東壁側の一部を検出したにすぎない住居址で、南北軸はほぼ軸線上にある隅丸方形を呈するものと思われる。南北軸3.24 mで、土層断面から見る掘り込みは23 cmを測る。床面はいく分凹凸があるものの平坦で軟弱である。尚、107号住居址の南壁には、後世のピットが掘り込まれている。出土遺物は須恵器坏形土器片が出土している。



III-443 140号住居址実測図

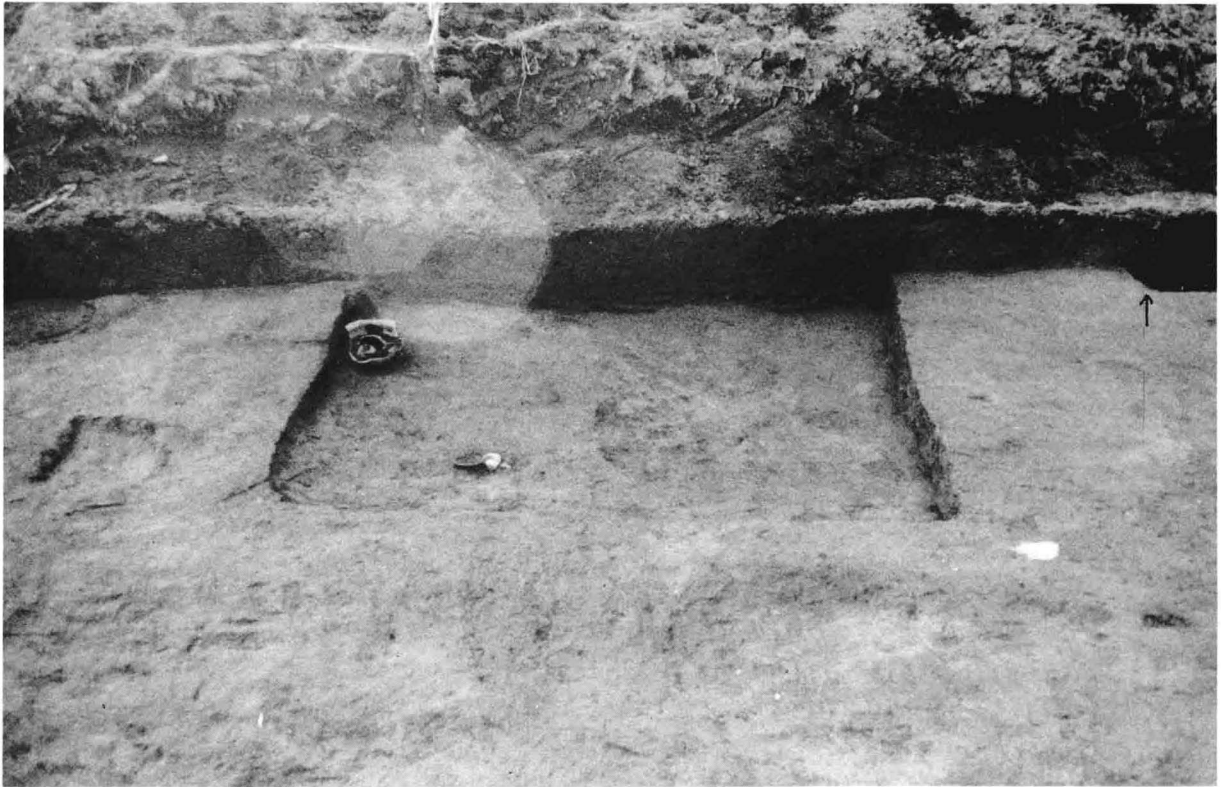
140号住居址 重複関係のない単独で検出されたが西半分は調査区外にある。形態は東西に長い長方形を呈し、南北軸は3.0 m前後の規模で、N 20°Eをさす。検出面からの掘り込みの深さは、南壁が低くなるものの15 cmを測る。床面は北にいく分傾斜するもののほぼ平坦で、貼床は認められなく軟弱である。柱穴・カマド等の施設は確認できなかった。

出土遺物 (III-446) 図示したほか、須恵器の四耳壺・蓋形土器、土師器甕・坏形土器が出土している。

132号住居址 (III-173) 形態は方形を呈し、南北軸5.2 mを測る。床面は平坦で軟弱である。出土遺物は少なく、土師器甕・坏片がある。

133号住居址 (III-4) 124号住居址の北にあり、貼床面を確認した。須恵器甕・坏片が出土している。

139号住居址 (III-95) 第III墓壙群の西側にあり、形態は方形を呈するものと思われる。検出面からの深さは数cmたらずで、床面に貼床がみられた。出土遺物は坏 (III-446-5) と蓋形土器が出土しているにすぎない。

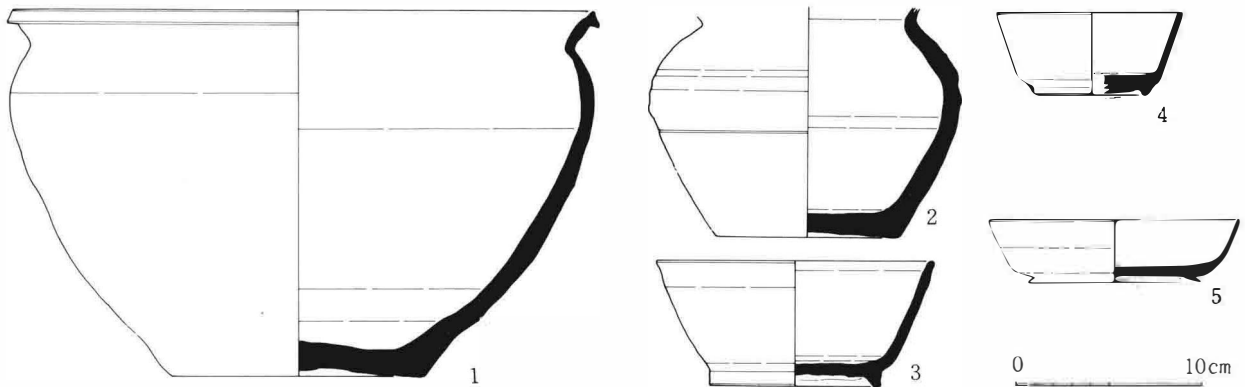


III-444 140号住居址



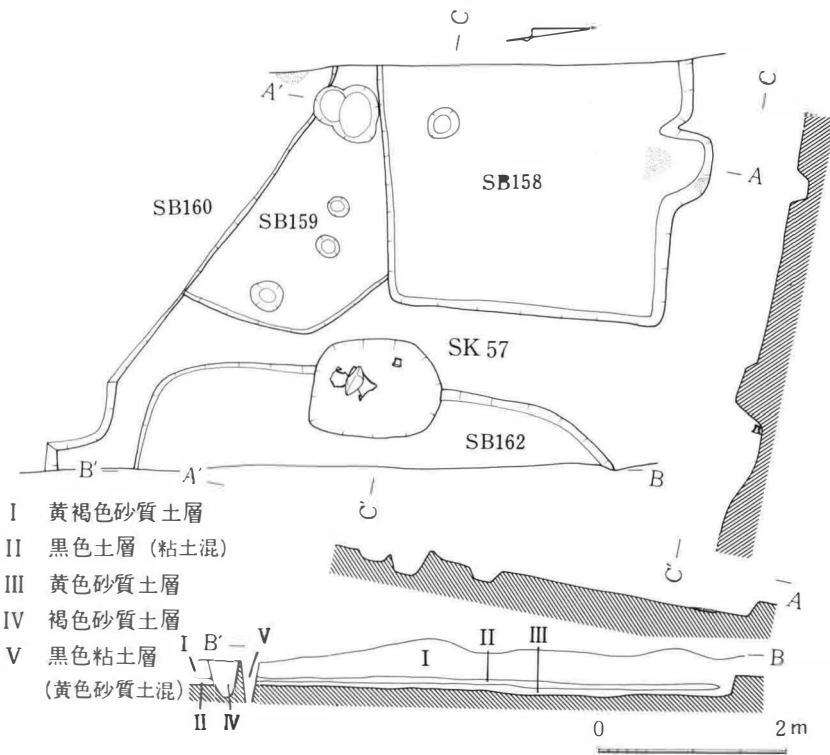
III-445 140号住居址

140号住居址出土土器(1~4) 1の浅鉢の中に2の甕形土器が、更にその中に4の高台付坏形土器が納められていた。これらはともに須恵器で、南壁下中央付近で正位の状態出土したものである。3も須恵器坏形土器で、高台が外縁に付され、底部には糸による切離痕が中央に認められる。5は139号住居址出土の浅い高台付坏形土器で、底面中央付近に糸切り痕を残し、外縁はヘラケズリ整形である。



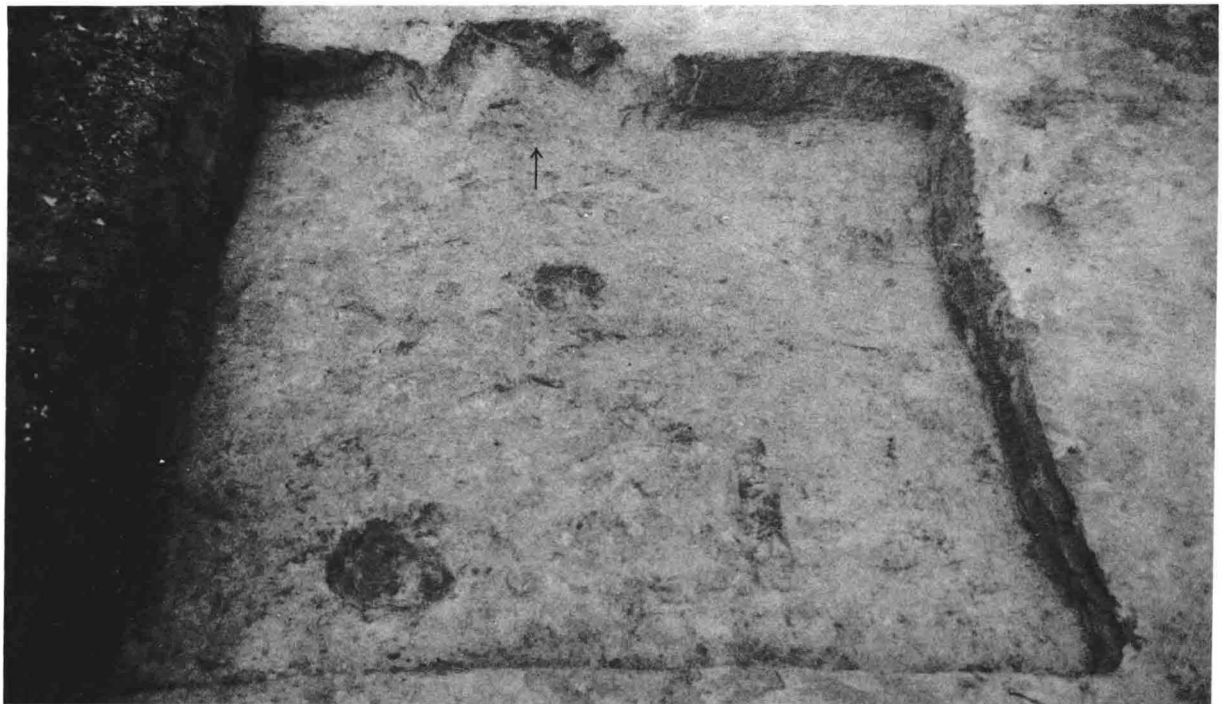
III-446 139号(5)・140(1~4)住居址出土土器



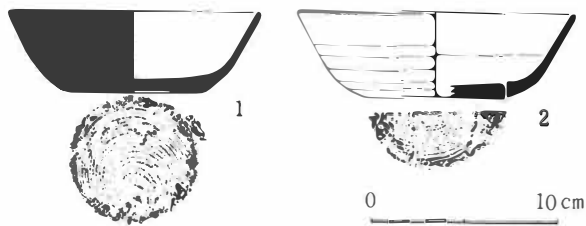


III-447 158号住居址実測図

158号住居址 西側のほぼ半分は調査区外に延びる。形態は方形を呈するものと思われ、主軸はN 14° Eになる。規模は主軸3.0mを測るが、東西軸の方が長い様相をみせる。掘り込みは北壁20cm・南壁10cm・東壁で21cmになる。床面は平坦に近いが、貼床は認められない。カマドは北壁中央付近を張り出して構築されるが、調査時にはすでに破壊され、焼土と炭化物を認めただけである。主柱穴はなく、南壁よりに径35cm・深さ14cmのピットが検出されている。

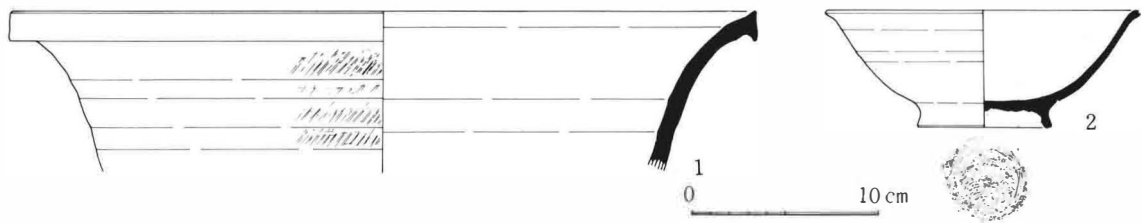


III-448 158号住居址



III-449 158号住居址出土土器

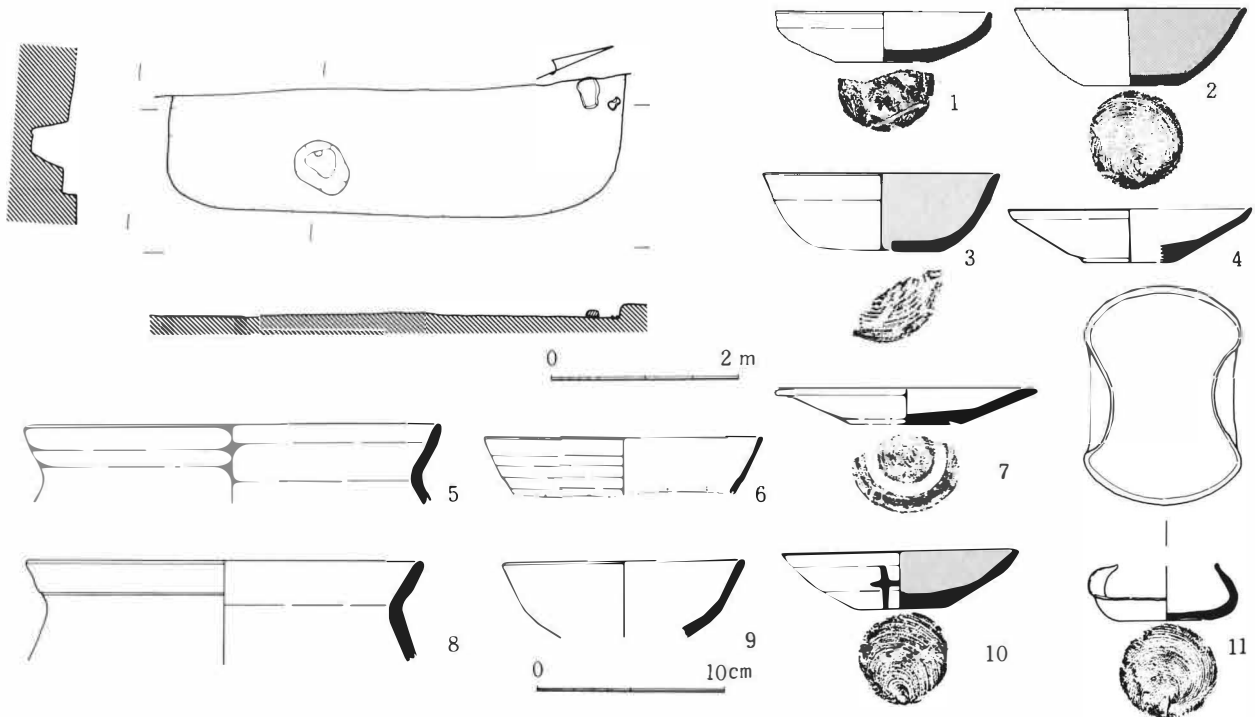
出土量は少なく、器種に土師器甕形土器片、須恵器坏(1・2)・甕・蓋形土器片のほか断面四角形の把手が出土している。1・2ともロクロ成形され、底部外面に糸による切離痕を残す。ともに青灰色を呈し、焼成は良好である。



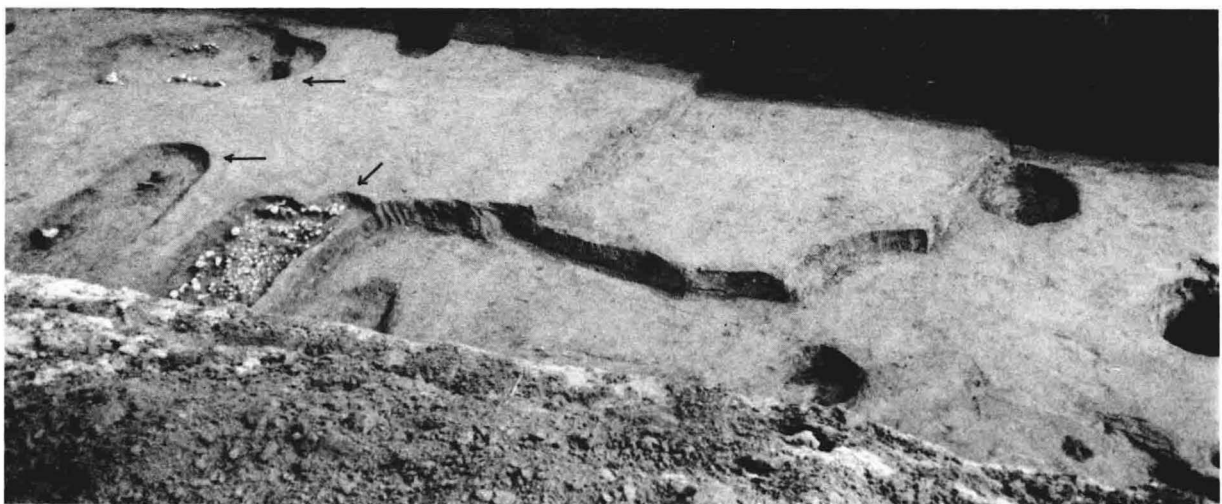
III-450 171号住居址出土土器

171号住居址(III-4) 178号住居址の東側に位置し、東側の大部分が調査区外に延びる。形態は方形を呈すると思われるが、規模等の詳細については不明である。床面は平坦で軟弱である。

出土遺物は少なく、土師器甕・坏形土器(2)、須恵器甕(1)・坏形土器片が出土している。

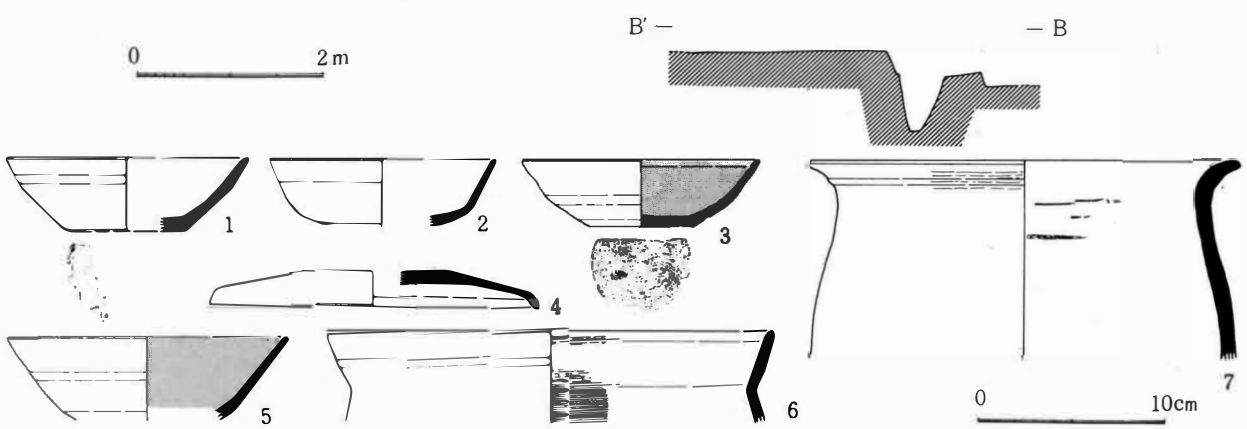
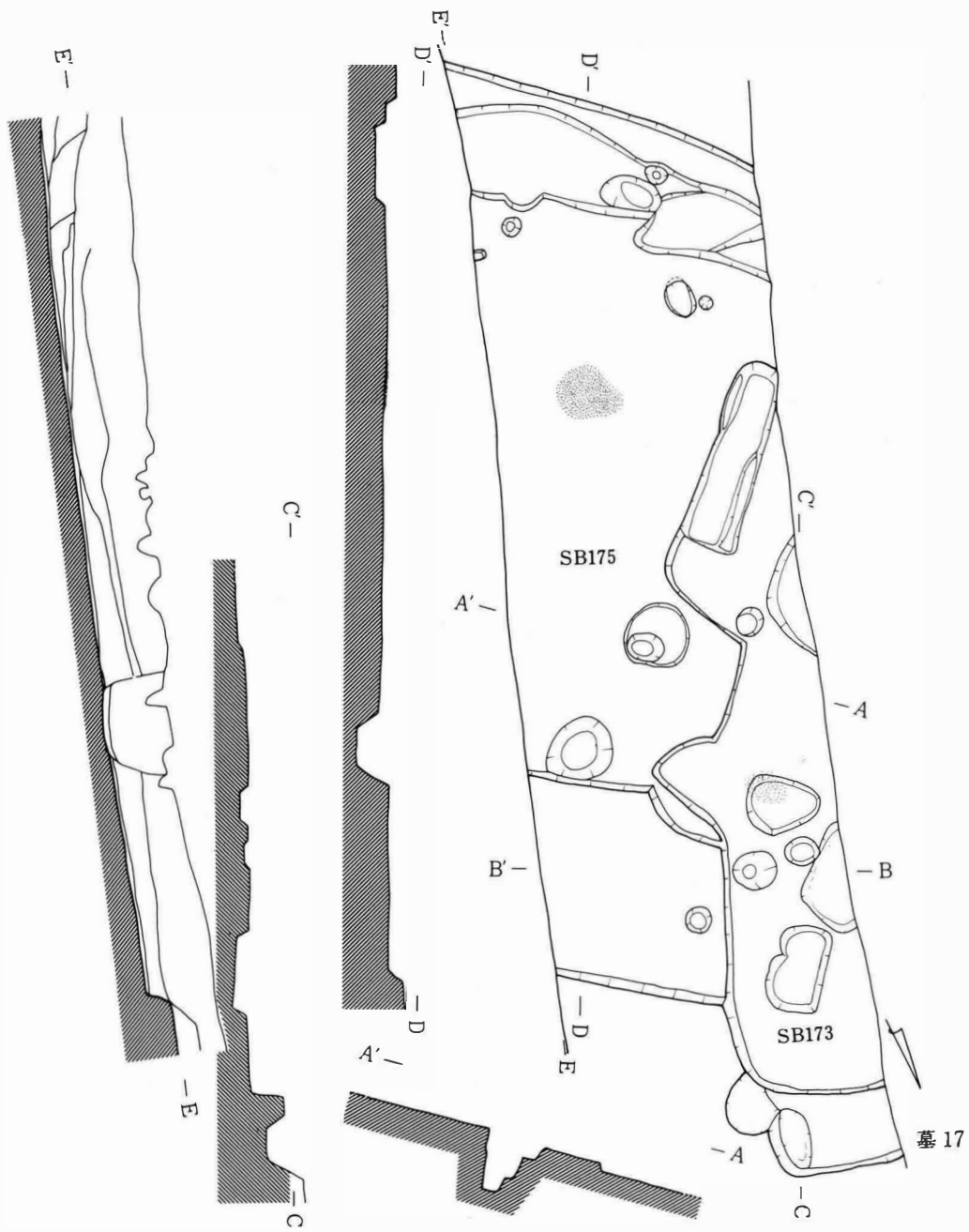


III-451 173号住居址実測図・出土土器



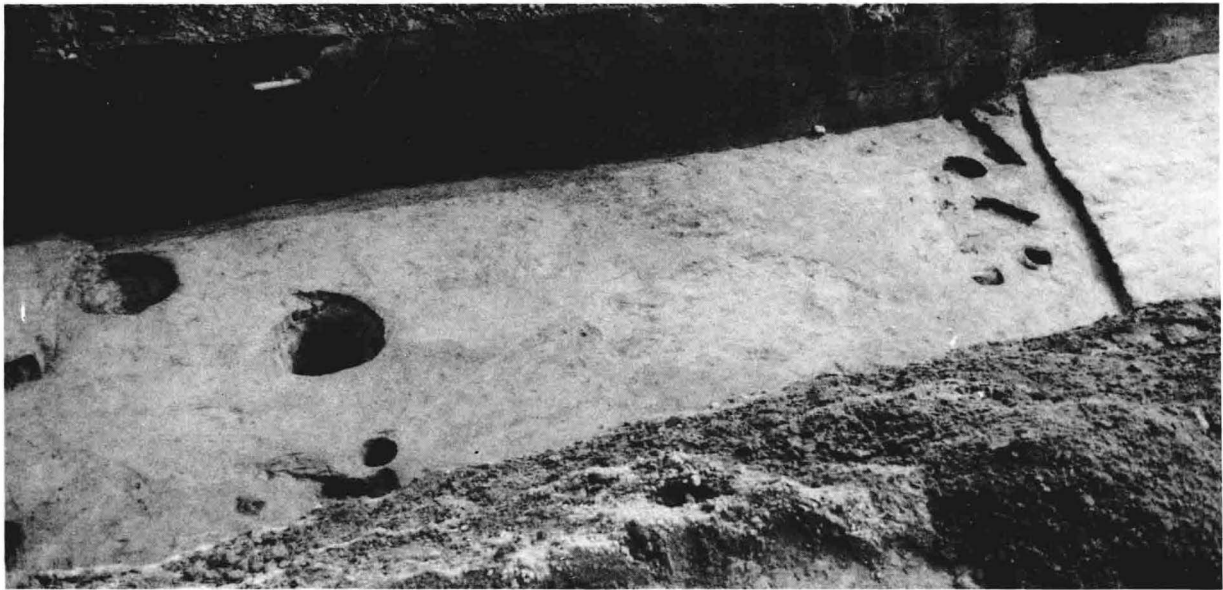
III-452 173号・174号住居址, 第V墓塚群

173号住居址(III-453) 上・下面あり、上面の覆土は黄褐色砂層である。形態は隅丸方形を呈し、南北軸4.8 mを測る。掘り込みは北・南壁が7 cm・東壁13 cmである。出土遺物のほとんどが上面からの出土である。出土遺物は9の須恵器坏形土器、11の灰釉耳皿のほかは土師器で、ほかに糸鑿形鉄製品(III-403-28)がある。

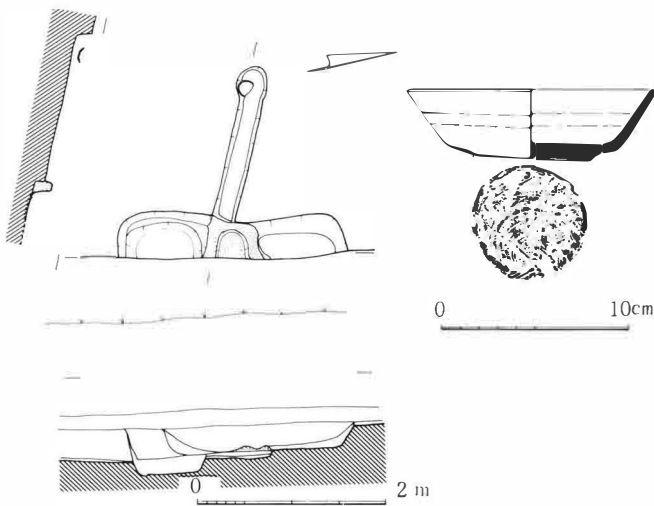


III-453 175号住居址実測図・出土土器

175号住居址 形態は方形を呈するものと思われ、上面の規模は9.6mで、下面6.4mを測る大形のもので、上面には貼床が認められた。カマドは確認できなかったが、南壁よりに幅60cm・厚さ5cm程の焼土がある。出土遺物は少なく、土師器甕(6・7)・坏(3・5)、須恵器坏(1・2)・蓋(4)形土器が出土している。



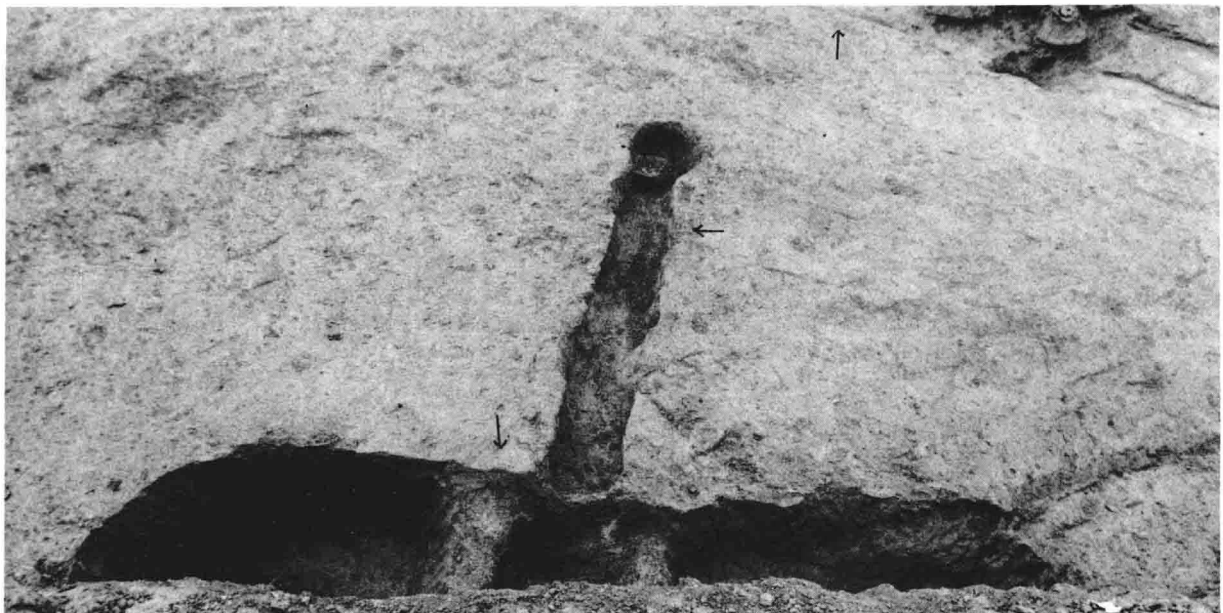
III-454 175号住居址



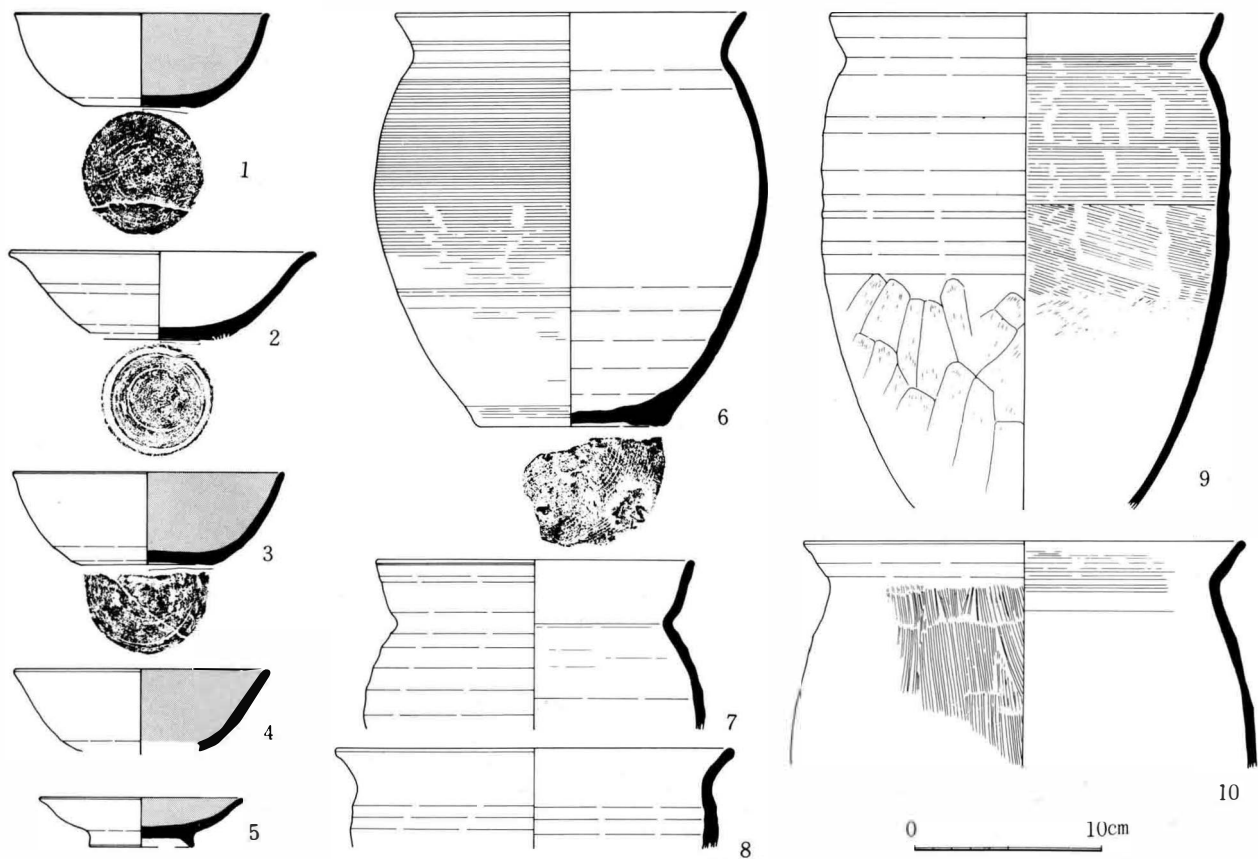
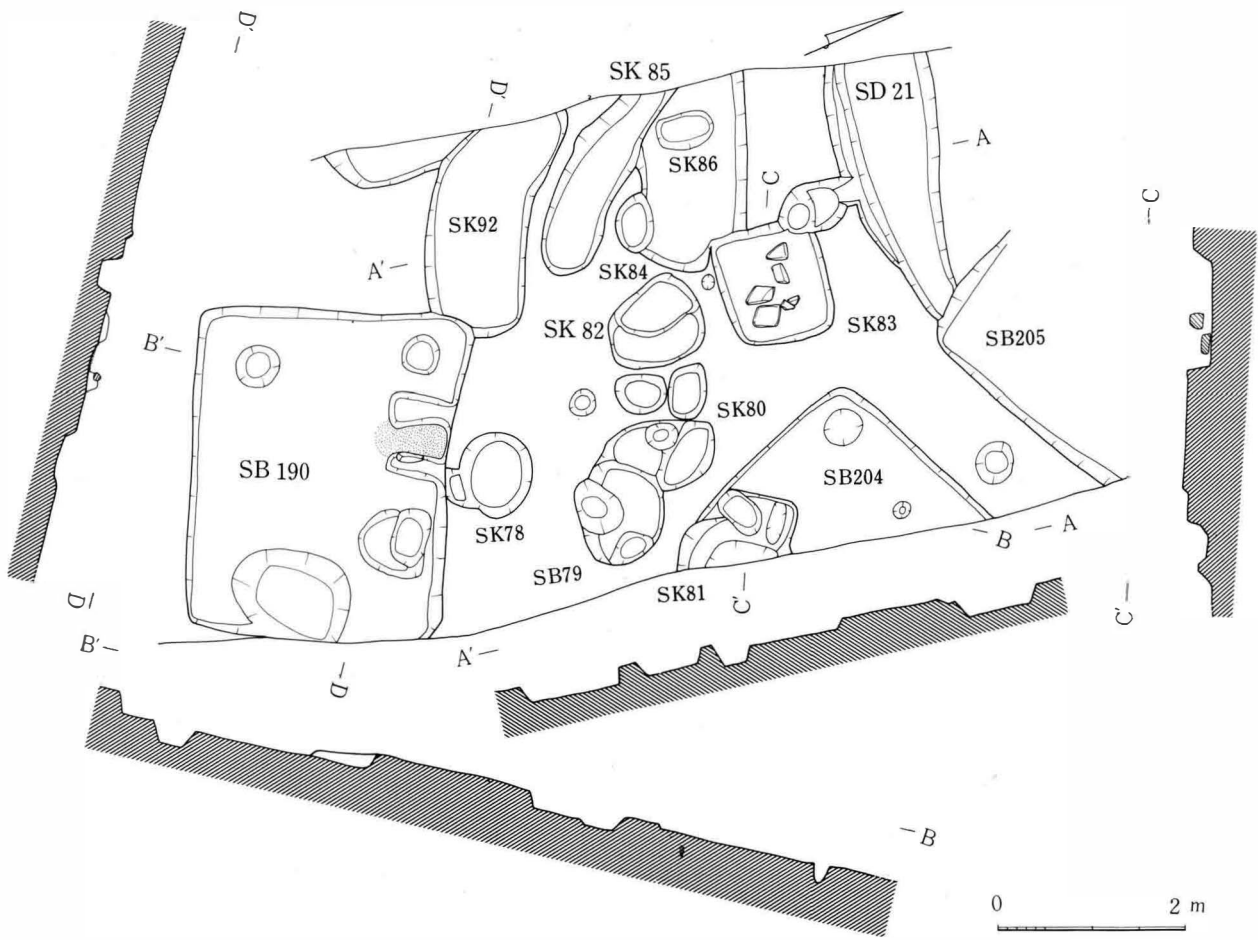
III-455 188号住居址実測図・出土土器

188号住居址 カマド付近の西側一部を検出したにすぎない。形態は隅丸方形を呈するものと思われ、主軸方向はN 65°Wである。南北の規模は2.4 mを測り、掘り込みは北壁で27 cmである。カマドは西壁中央にあり、両裾形になる。煙道はやや北方向に1.7 m程のび、先端は径30 cm程のピット状になる。またカマド左側に長軸80 cm・深さ15 cmの楕円形を呈する貯蔵穴がある。

出土量は少なく、1は煙道先端から出土した須恵器坏形土器である。他に土師器甕・坏形土器片がカマド内より出土している。



III-456 188号住居址



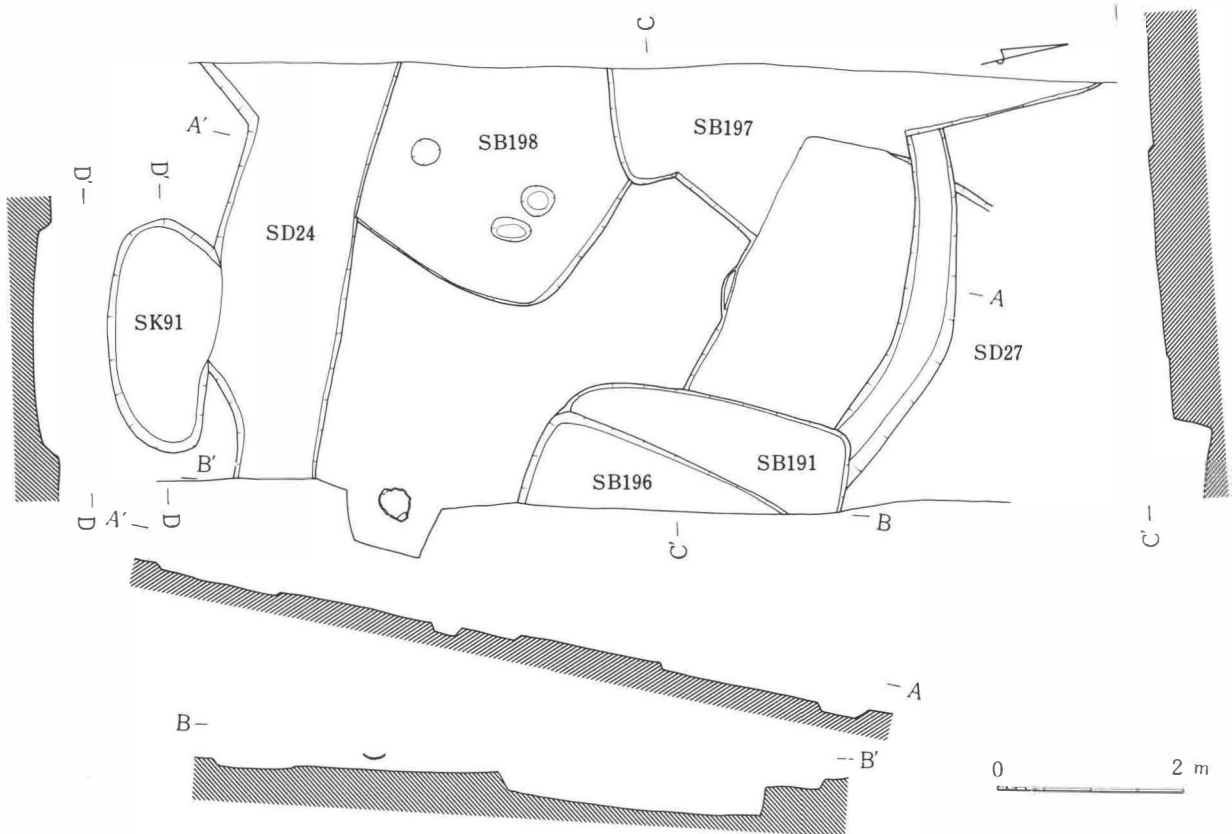
III-457 190号住居址实测图·出土土器





III-458 190号住居址

東壁の一部を除きほぼ完掘できた住居址の一つである。形態は長方形を呈し、主軸方向はN 27°Eになる。規模は主軸2.66 m・東西軸3.6 mを測り、掘り込みは北壁18 cm・南壁25 cm・東壁19 cm・西壁24 cmになる。主柱穴は3個確認され方形配列になる。カマドは北壁中央よりやや西によって構築される。出土遺物の多くはここからの出土である。図示したものはすべて土師器（III-457）で、1～5は坏形土器で、底部中央に糸切り痕を残す。2・5には高台が付される。6～10は甕形土器で、10の整形にハケが用いられる他は、ロクロによる整形である。他に須恵器の坏形土器がある。



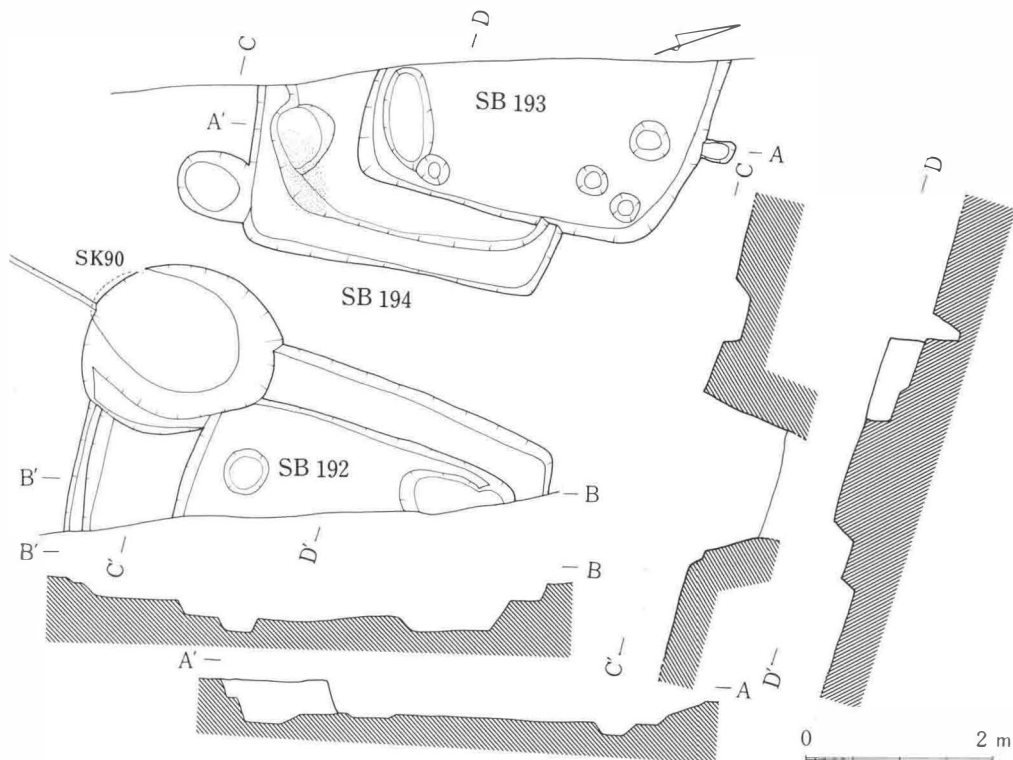
III-459 191号・196号～198号住居址実測図

### 191号住居址

191号と196号住居址は共に平安時代のもので、主軸方向は若干異なるが、隅丸方形を呈し、南北軸3.0前後の規模になる。北壁の掘り込みは、191号が7 cm、196号は更に14 cm深くなる。カマド・柱穴等は確認できなかった。出土遺物は両者混同し、土師器坏・甕形土器、須恵器甕・坏・台付坏・蓋形土器片が出土している。



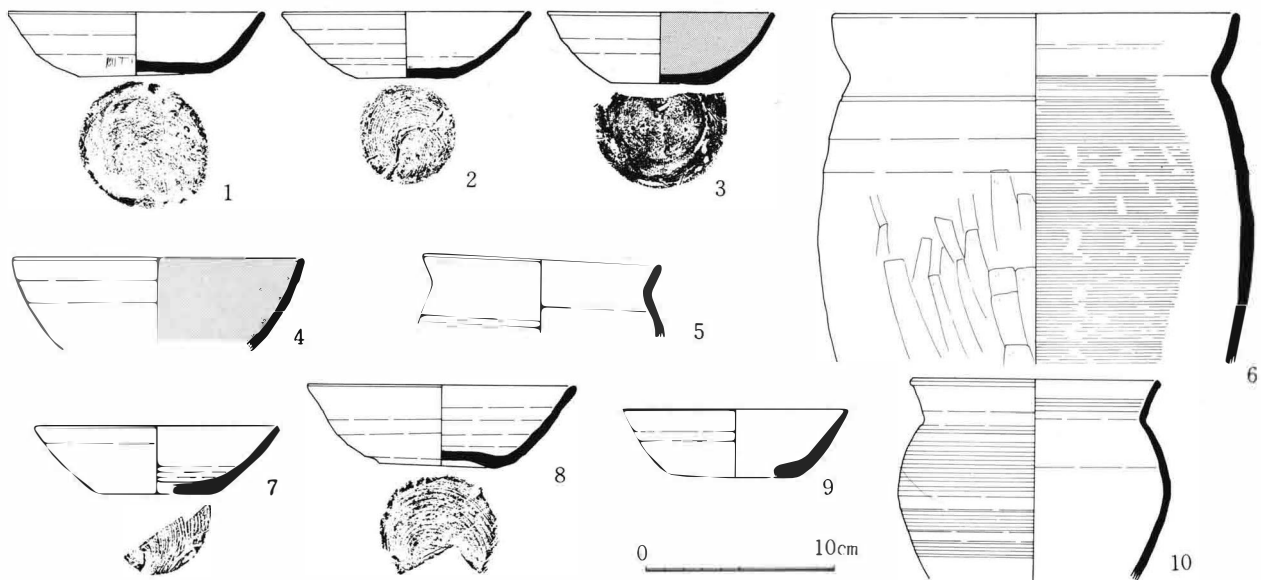
III-460 191号・196号・197号198号住居址



III-461 192号(上・下)・193号・194号住居址実測図

192号(上)住居址 土壌90により南西部隅が切られる。形態は方形を呈し、南北の規模は4.9mを測り、掘り込みは北壁17cm・南壁25cm・西壁28cmになる。カマド・柱穴は確認できなかった。床面は軟弱である。

192号(下)住居址 形態は方形を呈し、規模は3.3mを測り、掘り込みは検出面から北壁22cm・南壁20cm・西壁16cmになる。出土遺物は土師器甕・坏形土器片、須恵器坏土器片だけである。



III-462 193号・194号住居址出土土器



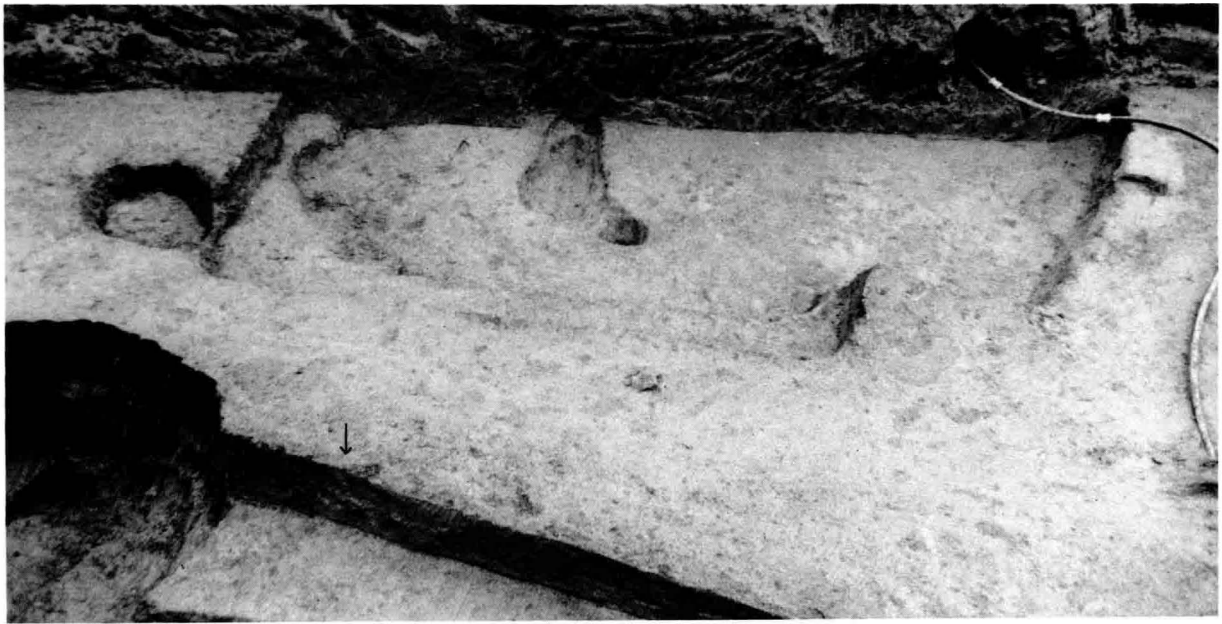
III-463 192号住居址



III-464 193号住居址

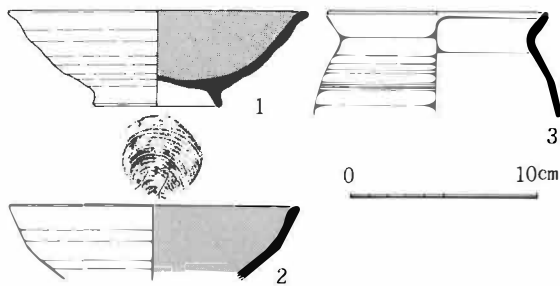
193住居址(III-461) 194号住居址より新しい。形態は隅丸方形を呈し、主軸方向はN 35°Eになる。掘り込みは北壁28cm・南壁29cm・東壁32cmになる。カマドは北壁の東寄りに構築され、焼土と煙道の一部が確認できた。支柱穴と思われるピットが東壁下に2個検出した。

出土遺物は194号住居址のものと混同していたので一括する。1・2・7は須恵器坏形土器で、青灰色を呈し、底部に糸切り痕を残す。3の底部外縁はヘラケズリが施こされる。5・6・10は土師器甕形土器で、6の内面と10の外面にカキ目が残る。このほかに須恵器甕・蓋形土器片が出土している。



III-465 193号住居址

形態は方形で、主軸方向は193号住居址とほぼ同じである。南北軸3.46mを測り、掘り込みは北壁24cm・南壁19cm・東壁24cmである。住居址内南東隅のピットには焼土がつまっていた。また床面は2段になり、軟弱である。



III-466 210号住居址出土土器

210号住居址 カマド付近のみの調査で、形態・規模等不明である。カマドは焼土と炭化物が残っているだけで旧来の姿をとどめていない。

出土土器 土師器高台付坏(1)・坏(2)・甕形土器(3)があり、須恵器の高台付坏形土器片が出土している。1・2は内面黒色処理され、3にカキ目が残る。



III-467 199号・206号・210号住居址、土壇69

- 14号溝址(III-3) 99号住居址の南に検出され、幅約1.5m・深さ20cm前後のU字溝で、西から東へ傾斜する。
- 17号溝址(III-397) 土壇46に接続する短いU字溝で、幅約62cm・深さ30cm前後を測る。
- 23号溝址(III-301) 205号住居址を貫通する幅1.25m・深さ80cmのU字溝である。





III-468 192号・193号住居址，土壙90

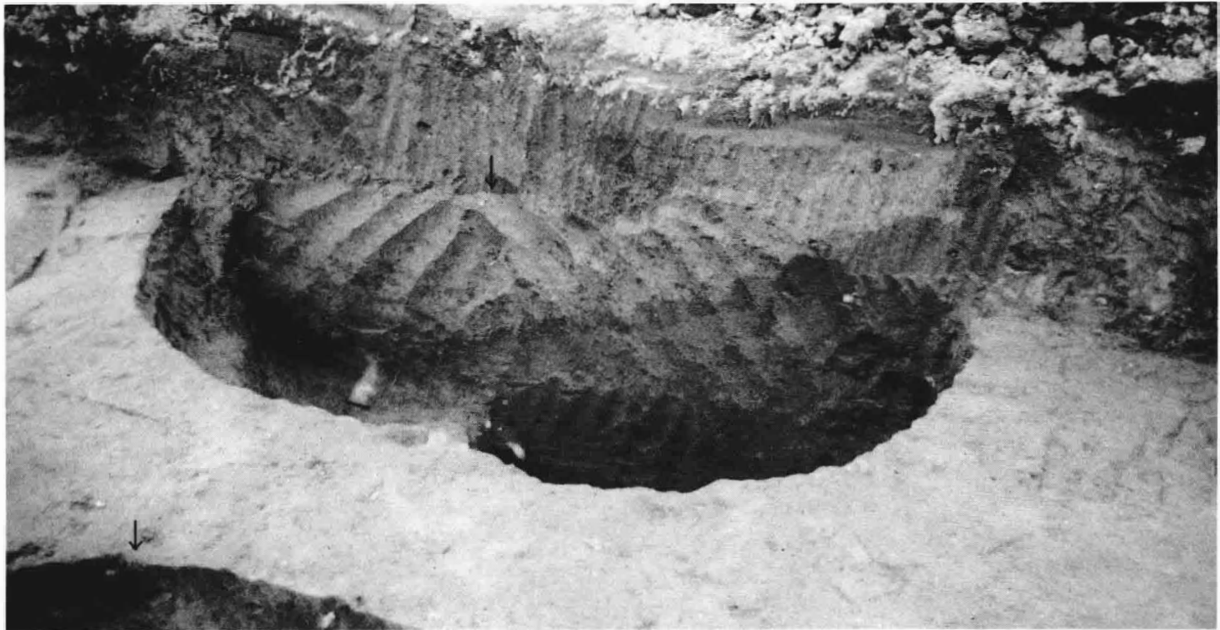
土壙90(III-461) 192号住居址の南西隅にあり、規模は2.0×1.85mの楕円形を呈する遺構で、検出面から95cm付近より湧水がみられ、井戸址の性格がある。出土遺物は糸切り痕のある坏形土器が1点出土した。



III-469 土壙39

土壙39(III-273) 92号住居址の北側に位置する。径1.3mの円形を呈するものと思われる。約150cm掘り下げたが湧水が著しく調査を断念した。井戸址の性格を有する。出土遺物には、各期の土器片が出土した。





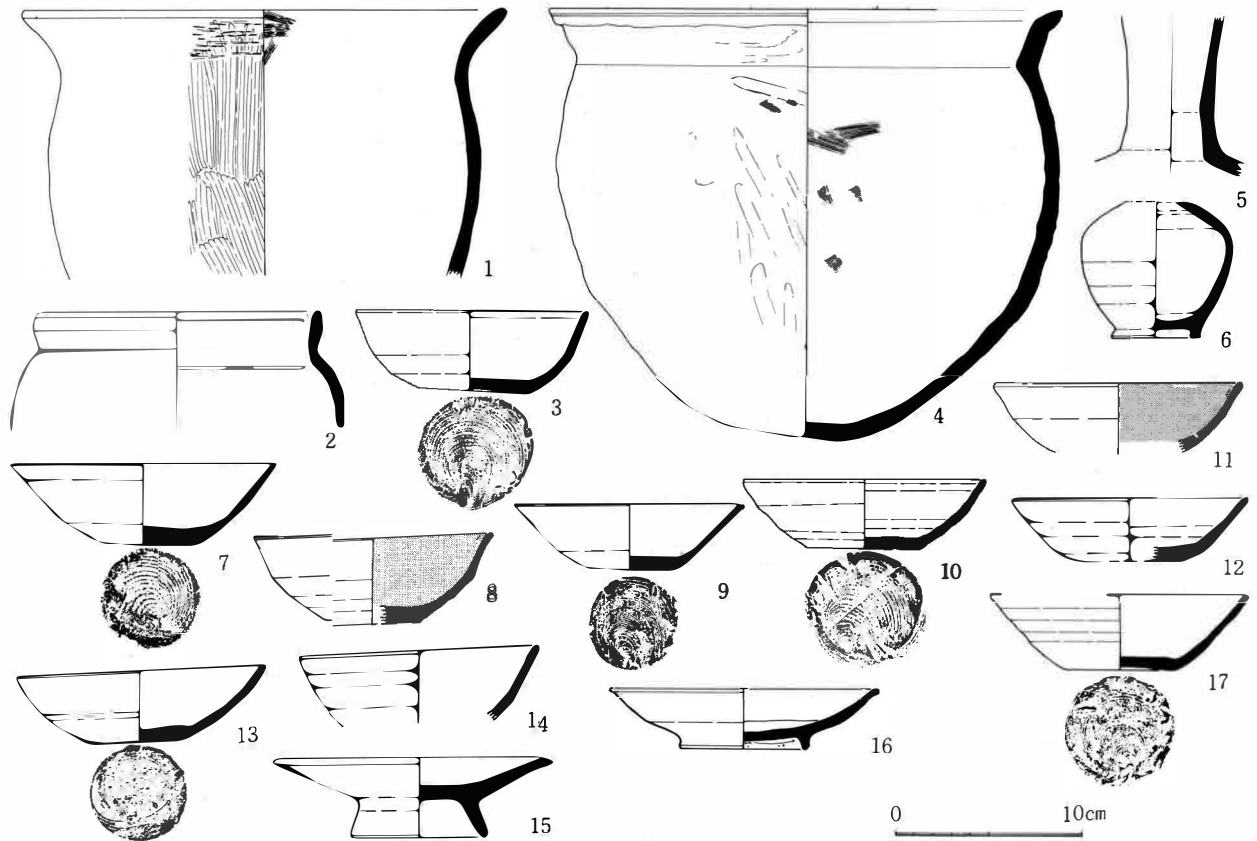
III-470 土壙 68

土壙 68・71~73はJ地区のほぼ中央、第I墓壙群の北側に位置する。どの土壙も一定の深さ以上は湧水をみる。この水が浸透し始める面は68号-96 cm、71号-91 cm、72号-101 cm、73号-103 cmとほぼ一定している。形態は円形または楕円形であり、規模はそれぞれ、68号-2.0 m×?、71号-1.5×2.0 m、72号-2.0×1.75 m、73号-1.9×2.2 mである。該期に属する井戸址的な土壙群であると推察される。



III-471 集石址

集石址 (III-36) 主軸は南北方向で、形態は1.35×0.75 mの長方形である。深さは60~70 cmで、多量の小礫とともに、弥生時代中期~江戸時代に至る、土器・石器類が多量に出土している。殊に須恵器が比較的多かった。弥生期の蛤刃石斧 (III-167-17) なども出土している。江戸期の磁器片が確認されたことから、本遺構は、江戸期以降の所産であろう。



III-472 その他の遺構出土土器

その他の遺構又は検出の際出土した該期の土器で、土師器・須恵器の坏形土器が中心である。須恵器坏（3・7・9・10・12・13・17）はすべて底部糸切り無調整である。土師器坏（8・11・14・15）の8・11は内面黒色処理され磨かれる。16は灰釉陶器で、口縁部内面のみ施釉され、底部は静止ナデによって糸切り痕が消される。5・6は、それぞれ長頸壺の頸部と体部である。6は小型で外面に自然釉が付着し、光沢がある。4の甕形土器は、土壙27から出土したものである。出土状態は覆土中に正位で設置されたように存在した。甕上部には礫、鉄器が廃棄されていたが、如何なる意味を有するかは不明。土器は内外面ともにヘラミガキされ、外面底部はヘラケズリ、内面の一部にはハケナデが施される。

（奈須野由美）

## 第9節 時期不明の遺構と遺物

144号住居址（III-284） 148号住居址と重複し、北壁と東壁の一部を検出したにすぎない。形態は方形を呈するものと思われるが、規模等は不明である。この住居址の年代を比定できる遺物の出土はなかった。

154号住居址（III-4） 西壁部分だけの検出に終わった。形態は隅丸方形を呈するものと思われ、南北軸2.9mを測る。西壁の掘り込みは15cmである。時代を比定する資料はないが、横刃石器（III-168-18）が出土している。

189号住居址（III-422） 188号住居址の北にあり、東南隅付近だけを検出した。形態は方形を呈すると思われるが、規模等は不明である。出土遺物はない。

200号住居址（III-4） 212号住居址の東側から検出され、東側半分は調査区外へ延びる。形態は隅丸方形を呈し、東西軸3.0mを測る。北壁の深さは22cmである。出土遺物はない。

202号住居址（III-4） 201号住居址の西に位置し、西南隅付近を検出したにすぎなく、大部分は調査区外とケヤキ大樹下へ延びる。形態は方形を呈するものと思われる。掘り込みは南壁22cm・西壁27cmを測る。

尚、56号・61号・66号～70号・76号・94号・121号・127号・163号～167号・170号住居址が欠番である。

- 2号溝址(Ⅲ-304) 40号住居址を切る東西の不安定な溝で、幅は1.6~1.2mを測る。深さ25cmである。
- 13号溝址(Ⅲ-267) 84号住居址をとりまく様に環状を呈する溝で、調査軸規模は約7.4mを測る。溝幅40~50cmで、深さ10cm内外のU字溝である。北側の溝西端はピット状になって終結する。南側は83号住居址に切られる。
- 21号溝址(Ⅲ-457) 22号溝址内に延びる曲線を描く。溝幅50cm前後・深さ16cmである。
- 30号溝址(Ⅲ-191) 19・29号溝址に切られる。形態は環状を描くものと思われる。溝幅60cm前後、深さ17cmを測る。時期は重複関係から、箱清水期かそれ以前の所産と考えられる。
- 土壙12(Ⅲ-14) 径60cmの不整円形を呈し、深さ62cmを測る。西側の一部は袋状になり、底面は平坦である。
- 土壙16(Ⅲ-217) 長軸1.25m・南北軸0.8m前後の楕円形を呈し、深さ34cmを測る。
- 土壙17(Ⅲ-3) 24号住居址の北側にあるピット状の遺構で、南北軸75cm・短軸50cm・深さ32cmを測る。
- 土壙21(Ⅲ-254) 土壙20・21と同時期のものと推定する。東北軸1.6m・短軸1.3mの隅丸長方形を呈する。
- 土壙23(Ⅲ-365) 45号住居址の南側にあり、南北軸1.1m・短軸0.75mの楕円形を呈する。深さは18cmである。
- 土壙25(イ)(Ⅲ-332) 48号住居址北西隅にある。東西軸1.18m・短軸0.78mの不整楕円形を呈する。
- 土壙25(ロ)(Ⅲ-372) 54号住居址東側にある。楕円形を呈し、短軸(南北)53cm・深さ28cmを測る。
- 土壙28(Ⅲ-304) 40号住居址の南、2号溝址内にある。径1.65mの円形状を呈し、深さ66cmを測る。
- 土壙30(Ⅲ-382) 81号住居址の北側、土壙29と隣接する。形態は楕円形を呈し、主軸(東西)0.7m・短軸0.65mを測る。
- 土壙31(Ⅲ-267) 形態は長方形を呈し、長軸1.15m・東西軸0.8mで、深さ42cmを測る。
- 土壙33(Ⅲ-293) 93号住居址内にある。形態は径1.45mの円形になり、検出面下60cmで湧水がある。
- 土壙40(Ⅲ-3) 97号住居址東南隅にある。形態は径約70cmの円形を呈する。深さ28cmを測る。
- 土壙42(Ⅲ-272) 形態は長方形を呈するものと思われ、長軸(南北)0.92m・深さ34cmを測る。
- 土壙44(Ⅲ-383) 形態は長方形を呈し南北軸1.3m・短軸1.0mを測り、深さ51cmである。
- 土壙58(Ⅲ-291) 形態は楕円形状を呈し、長軸(南北)1.15mの円形に近い楕円形になる。深さ56cmを測る。
- 土壙59(Ⅲ-291) 形態は不整円形を呈し、径0.85m・深さ25cmを測る。
- 土壙60(Ⅲ-291) 形態は不整円形になる。最大幅0.9mで、深さ42cmを測る。
- 土壙61(Ⅲ-40) 形態は楕円形を呈し、長軸1.5m・短軸1.0mで、深さ75cmを測る。
- 土壙70(Ⅲ-303) 206号住居址内にあり、径0.9mの不整円形を呈し、深さ57cmを測る。
- 土壙71(Ⅲ-303) 楕円形を呈し、東西軸2.05m・短軸1.5mを測り、深さ91cmで湧水をみる。
- 土壙72(Ⅲ-291) 189号住居址と近隣する。形態は楕円形を呈し、長軸2.05m・東西軸1.75mの井戸址になる。
- 土壙77(Ⅲ-191) 形態はほぼ円形に近い楕円形を呈し、長軸1.0m・短軸0.75m・深さ38cmを測る。
- 土壙78(Ⅲ-457) 形態は不整円形を呈し、長軸0.93m・短軸0.75m・深さ34cmになる。
- 土壙79(Ⅲ-457) 形態は楕円形を呈し、長軸1.1m・短軸0.9m・深さ52cmを測る。
- 土壙82(Ⅲ-457) 形態は不整円形を呈し、最大径1.0mを測り、深さは18cmである。
- 土壙84(Ⅲ-457) 形態は楕円形を呈し、長軸0.55m・短軸0.45m・深さ25cmの小規模なものである。
- 土壙89(Ⅲ-4) 形態は円形を呈するものと思われ、径2.6m・深さ47cm以上になる。
- 土壙ホ(Ⅲ-52) 形態は不整円形を呈し、最大径0.7m・深さ66cmを測る。
- 土壙へ(Ⅲ-387) 形態は不整円形を呈し、最大径0.52m・深さ38cmを測る。
- 土壙り(Ⅲ-52) 形態は不整円形を呈し、最大径0.67m・深さ30cmを測る。
- 尚、土壙5・64~67・88・97~98・117は欠番である。

(奈須野由美)

## 第Ⅳ章 ま と め

今回調査した自然堤防は、古くから先学諸氏により調査が進められてきた。それは松節地籍より祭祀遺構を伴う銅鉾及び同石製模造品の出土をみたり、伊勢宮地籍より長野盆地に最初に定着したと思われる弥生時代中期初頭の土器が多量に確認されたことに象徴される。また畑地・果樹園等での深耕の際に弥生時代から平安時代の遺物が出土し、それも完形に近い土器・石器類が多く採集されており、その表面から該期の土器片等が万遍無く散布し、今でも遺物が表面採集できる代表的遺跡の一つである。もとよりこの自然堤防は、聖川更に国道18号線を境にし通称篠ノ井遺跡群・横田遺跡群と帯状に連なる千曲川左岸の大遺跡群の一区画にすぎない。そのためこの自然堤防上は前記した遺跡群を分ける部位を除き、どこを調査しても何らかの遺構にあたる可能性は大きく、またその過密ぶりは過去の調査例にみるとおりであり、その内容は多岐多様にわたっている。

調査は、塩崎遺跡群がある自然堤防の南東部から北西にかけての中央付近を縦断する5m幅のトレンチ調査的性格をもち、遺跡の内容判断に一つの指針を与えたことは前に述べたとおりである。更につけ加えておかなければならないのは、各時代の遺構のまとまり（集落のあり方）等を考察するにたる資料が乏しいこと。遺物においては、各時代の遺構が複雑に重複して破壊がくり返されているため、そして検出された遺構等の掘り込みが意外に浅かったこともあり、また調査面積・遺構数の割には完形およびそれに近い土器資料も比較的少なかったことからして、遺構出土の土器として同一視できない資料も含まれている可能性があり、再検討を要することを付記しておく。次に番号を付した住居址192軒・土壙墓31基・土壙（井戸址含）111基・井戸址2基・ファイアーピット3ヶ所・溝址33ヶ所を時代別に遺構と遺物を瞥見する。

**弥生時代中期** 所謂「栗林式」期以前の土器を出した遺構をあてる。住居址18軒・土壙墓及び木棺墓30基・土壙28基・溝址3ヶ所を抽出することができる。その分布は自然堤防中央付近に密集する傾向がうかがえる。住居址形態は、栗林式土器より古いと思料される代表的なものに186号住居址を上げることができ、ほぼ円形を呈し、炉は中央付近にある。しかし他の遺構は、規模等にも不安の材料があるが、むしろ隅丸方形と考えられる。栗林式土器を出す遺構の特色的なものに、85号・134号・146号・147号・120号住居址がある。従来小竪穴遺構と呼ばれていたもので、形態は小規模な隅丸長方形を呈し、深い掘り込みのものである。134号では周溝が確認されている。住居の用に供する施設と考えると良いと思う。ちなみに同時代後期の84号からは、柱穴及び炉址が確認されている。今回の調査で特記されるものに木棺墓（土壙墓含）の検出されたことである。これをⅤ群にグループ化したがる、まとまりを考えただけで、ⅠからⅤ群までは同じ性格をもつものと考えられるが、Ⅰ群の覆土上面は円礫付設になるものがあるなど趣を異にする。また各群内の1又は2基だけに管玉を伴う副葬品があり、また同一墓壙から複数の埋納人骨を検出されたことは何を意味するのだろうか。人骨の性別・年齢構成等の判別から興味ある問題が提示されるものと期待している。そして主軸方向・規模等にも一貫したものがなく、ⅠとⅢ群には重複関係にあるものがあり、単一時期の所産とは考えられなく時間差を考慮しなければならないし、群としての把握も再検討する必要があるかと考える。土壙57及び136号住居址内の祭祀遺構からは、善光寺平では初見の土器が出土し、ともに赤色顔料の痕跡が残っており、墓址的性格がうかがえる。また土壙は、前述した遺構付近にあり、特にⅡ群墓壙近くにはカタカナ付合のピット状土壙が集中しており、住居址の柱穴とも考えられる。

遺物は多種多様なものが出土している。今これを系統的に分離し、時間差を求めることの力量もないし、余裕もない。そのため各遺構から出土した特徴的有文土器のほとんどを提示した。これらの土器には、新しい要素のものが混在している感を持つが、果たしてどうだろうか。また従来の栗林式土器がセット化していない点も気になることである。また墓壙出土の一括資料は器形・文様構成面から編年作業の基準になると思うが、用途はあくまで副葬用の儀器と考えている。現時点でこれらの土器の位置を、庄ノ畑式期・新諏訪式期、関東においては須和田式期